

義 弘 公 慶 長 五 年

後 編 舊 記 雜 錄 卷 五 十 二

関ヶ原御一戦書抜中馬大藏丞由來書出之内

一慶長五年之秋、出水へ罷越居候處ニ、惟新様御事高麗ト直ニ大坂ニ御登り被遊、石田とのへ被卷立、難御遁御仕合ニ而、関ヶ原弓箭ニ御立被遊候、御一大事ニ相究り候由、御國へ相聞へ、川上四郎兵衛只今米之津之様ニ被相通候由承、長野勘左衛門江申合、則時に打立、米之津へ走付候へハ、川上四郎兵衛乗舟最早出舟にて候故、聲トに相招候へとも、何方も急之事ニ候へハ、舟取戻不申候故、無是非九州路を夜を日に次罷通、関ヶ原御弓箭十四五日以前ニ走付候へハ、惟新様御

感悦被遊、大藏と長野勘左衛門事者、此御大事承付候ハ、則參上可仕と被思召上候處、不差走參候段神妙（遺詔之）ニ被思召候、扱勘左衛門事者と御問条ニ付、勘左衛門事ハ少々申殘儀共候間、在所へ手間取申候、追付參上可仕旨、申合置候通申上候へハ、大藏事ハ先御臺所へ參候而、休息可仕通御意候、左候而、其翌日勘左衛門も不變約參着仕候付、弥以 惟新様御機嫌御能被遊御座候、夫々十四五日相過、已ニ関ヶ原御取合ニ相成、筑前中納言殿御腹返ニ付、敵味方悉く相乱、惟新様御備も纒ニ卷弐百計ニ相成候故、無是非 家康公之御陳ニ向て、伊勢路を御心懸御退被遊、士纒に三拾人程も御供仕、其内ニ而祖父大藏も罷在候、御馬印も大藏ト申上、途中ニ御捨、伊勢・近江・伊賀・大和・河内之嶮難ヲ御遁れ、攝州住吉迄御引取被遊候、其間兩夜ハ野宿を被遊候、主従ともニ無飯之事も御座候、其毎に大藏事足輕五六人召列、御旅宿を一夜ニ三度ツ、相廻り申候、尤 惟新様御直之御意にて、右之通御奉公仕候、其恩賞として御感狀御添、知行五拾石被下候、于今私格護仕候、

桐野掃部覺書拔書

一慶長五年九月十五日関ヶ原一戰之刻、惟新様御側へ御奉公仕節、其場の駒野越之よふに御供申候、明之十六日ニ者伊勢路之様ニ御供申候、然処須田傳吉殿手負被成候を、上様御意を以南郷覺右衛門殿奉行として、夜白三日伊勢國土山までのけ申候、同十七日之夜伊勢之内森山之在所ニ米御求メ可有由にて、御使へ參申候、土山の森山之間五里にて候、帖佐彦左衛門殿證據にて候事、

一同十八日、伊賀國之内川はたのよふニ御供申候事、

一同十九日、和城之國かきか越之様ニ御供申候、其夜者飯森之在所へ御宿被成候、同其夜爲御使、九里之所住吉棚邊屋道譽へ參候而御理申、聽而三里跡へ御迎ニ參候、左様候へ者、棚邊や軍衆老人も罷成間敷由申候間、白坂與竹老・伊地知掃部兵衛との我等三人御供申候事、

一同廿日、住吉棚邊屋所の坂井まで見聞として被仰付參候、本田源右衛門とのへ取合申候て、聽て住吉之様ニ參候処、上様御意を以大坂之御屋形ニ籠申候、明之廿一日ニ御舟ニ乗、御國元帖佐まで御供申届候、右同

前御奉公被成候御側之人衆者、皆々五拾石ツ、之御加増御給ニ而候へとも、我等ハ小身之故ニ御侘不申上候、今度御手附可有御座よふ奉憑候、以上、

慶長十九年七月六日

桐野掃部助

長野勘左衛門由來書覺書拔

一惟新様帖佐へ被成御座候砌、拙子親長野勘左衛門事御座元へ罷在候、然者普請奉行被仰付見廻申候、今令人者伊地知徳世ニ而御座候、惟新様御移可被成由ニ而、出水へ普請奉行右兩人江被仰付候、然處ニ上方雜説相聞得候而、川上四郎兵衛殿・川上左京殿なと其外俄ニ上落（マ）之由、左候得者、勘左衛門儀御一代を申上たる者之儀ニ候条、則借銀とも仕、帖佐へも人遣申、具足鎗不謂夜白召寄、慶長五年庚子八月十五日、阿久根出舟仕候而、主従自力にて罷上候、出水江懸番衆之内同心之人、中馬大藏・竹内宮内左衛門・花棚善兵衛・長野勘左衛門此四人ニ而候、大坂江着舟者何日とも不存候事、

一伏見の関ヶ原へ、親勘左衛門むかし具足之一入重きを着用仕、式尺三寸之脇差、長柄之鎗小者へ爲持爲申由、

伏見ヶ関ヶ原之間者、三日四日路にて候哉之様承候へとも、軍衆多勢之儀にて、七日ニ御着之由承候、召列申候小者若輩にて、三日目ニ付離候故、吾と長柄之鎧を持御供仕候、其後 御意ニ者、勘左衛門事ハ重キ具足を着、武道具を持候而、七日路を御供仕候事、無比類候通御意之由承候事、

一 惟新様兼而之御意ニも、上方之雜説承候ハ、長野勘左衛門儀者、中馬大藏同前必可參と思召候由御意ニ而候處ニ、兩人ともニ罷上候間、御感難有面目を取候由承候事、

一 内府様御陳場者、赤坂と申所ニ御取由承候、九月十四日之夜、明ル十五日之合戦ニ御評義相極候由ニ付、川上四郎兵衛殿・勘左衛門見合之通爲申由候、様子者大敵無際限と普請とも未仕候間、撰共を百五拾人ほと被仰付候へかし、左様ニ候ハ、夜籠ニ 内府様御陳を崩可申、明日ニ罷成候ハ、成かね可申由爲申よし候、四郎兵衛との被仰候者、大敵を百五拾人にて、中々何と可仕哉之旨被仰候由、勘左衛門申候者、五拾人ツ、^本三手ニ分ケ、白支度赤はちまきにて伐込申候ハ、としふ^{マ、レ}ミに崩可申と存候、敵勢弥相續可申候、其上心も

不知御味方大將衆余多にて候、必明日之軍ハ乱可申候と存候由、爲申由候、四郎兵衛殿被仰候者、尤其儀ニ而も可有之候へ共、今宵之儀者惣而無人數之儀候条、其内多り衆百五拾人とても有間敷候、運次第之由被仰候由候、勘左衛門申候ハ、運之極おのつからにて候、大死を仕候而ハ殘多候と爲申由候、此様子中馬大藏細く我等へ申聞置候、大藏者無之人にて候、平山九郎左衛門事、四郎兵衛殿與力にて関ヶ原へ罷在候間、委ク被存候、九郎左衛門者今ニ堅固ニ罷在人ニ而候事、

一 四郎兵衛との被仰候ハ、勘左衛門豊後・高麗方々之大敵を見爲申儀ニ候間、内府様御陳之人數如何程と見極候へと被仰候、大形人數八萬程と見爲申由候、左様候ハ、大藏へ勘左衛門申候者、内府様御勢拾萬と及見候へとも、味方無人數にて候条、八萬と者内ヲ申シテ爲向後ニ而候間、然々見及候へ、我等事者今晚迄、明日者人ハ先ニ打死可仕候、大藏へも今宵まで由候と承候事、

一 其夜中馬大藏へ爲申由候、大藏事ハ人に勝、力もつよき人ニ而候条、此節が心得被申、御側不離我手柄をやめ、諸人敵合仕候とも、大藏事ハ無用ニ而候、損手も

神戸五兵衛関ヶ原之覺書

負候而者御爲成申ましく、其故ハ心も不知大將衆御陣場余多ニ而候、心替とも候ハ、必ス可乱候間、殿様ハ御退可被成候、或ハ川を御渡候とも、或ハ難所ニ而候とも、セライ候而御供被申、御國へ御下國被成候ハ、敵何程爲打取よりましたる御奉公にて候、相構へて此儀相背間敷候、我等事者御供申度候へとも、年も五十ニ及候、迎も御供申届間敷候、扱者明日之合戦に入ら先ニ打死と思ひ極候と、中馬大藏へ我等親勘左衛門爲申通、大藏が我等へ被申聞候、最早大藏も無之人ニ而候へとも、細く我等へ申聞置候条、如此候事、一九月十五日未明、石田との・小西殿人數 内府様御勢に被指向、鉄砲取合、其が太刀打ニ罷成、はけしき取合とも致刻、勘左衛門事ハ能敵を打、首を取、川上四郎兵衛殿へ問度候、今日の太刀初長野勘左衛門仕候と、證據ニ御立候へと申候間、則首を捨、鎧取大敵ニ詰入候を、出水衆中平山九郎左衛門、四郎兵衛との例へ罷在、委く見被申候、其場にて定而打死候半と、九郎左衛門儘ニ被申候事、

井尻弥五助奉公之次第

慶長五年ニ公方様大坂を御打立被成候而、江戸へ御下向被遊候、然処ニ西國之諸大名衆も大方御供ニ而候、御跡より爲御使、御親父井尻弥五助殿も江戸江無程打立ニ而候、御狀并御進物孔雀之尾羽二鳥御進上ニ而候、於江戸一段御仕合能、御返事早く申候、御親父弥五助殿持參被成、上洛之刻於中途取沙汰申候ハ、近江國水口ニ関居り、上下之人を以之外稠敷相改申候由、風聞申候ニ付、大事之御狀ニ而候、内ニハ如何様成儀も可有之候間、御判計を切實、爲證據可懸 御目と被存、御狀ハ燒捨、御判をかミ之おりニ卷籠被罷通候処、如案之稠敷相改、不審成者之由候而、則籠ニ入、廿日被召置候、然処ニ弥五助殿被申候ハ、我等者伊勢ニ立願御坐候間參申候、嶋津兵庫頭内ニ我等親松岡勝兵衛与申者罷在候、此人生得伊勢衆ニ而候ニ付、其人ノ引付を以願成就仕候而罷上候処ニ、覺悟之外之儀を被仰懸、數日籠者御させ被成候事、迷惑至極ニ存候間、人を御付被成、右之通彼松岡少兵衛方へ御尋被成候而可被下之由被申候へ者、奉行被承、左候ハ、別儀有間敷候間、可罷上之由候て、籠より出被申候間、則右之段々被申上候へは、籠者迄仕候而御奉公仕

候夏神妙ニ被思召候由ニ而、御褒美御給ニ而候、自其無程伏見城御せめ被成、御仕寄之内より別而御奉公被成候者、我等細々爲存前之儀ニ而候、然処ニ伏見落城仕候得者、少間有之候間、美濃國大柿へ御打立被成候、石田治部殿より御迎舟過分ニ大津迄參候間、御舟ニ而さお山之様ニ御越被成候処、於中途俄ニ大風仕、さお山へ御着被成候事不罷成候故、近江之内八幡山と申候所ニ小庵有之候、それニ御一宿被遊、次日御打立、さお山江御着被成候而、中一日御逗留被遊、それより御打立、美濃國之内たるひ之宿ニ三日御逗留被遊候、其後石田殿より早々此方へ御越被成候へと御使參候ニ付、大柿之ごとく御越ニ而候、彼大柿ニ數日御逗留、此方之御先手美濃國之内曾根と申所ニ而候、左様成番手ニも、夜白弥五助殿辛勞被成候、左候而石田殿より美濃國之内がうど、申渡ニ、番手之士千人被召置候処ニ、東國衆向より見切大河を関渡、がう戸ニ被召置候番手之衆悉打取、相殘人數ハ大柿へ追籠、赤坂之内岡山と申山ニ公方様御陳御取被成、大柿へハ手あてを被召置候て、京都のごとく公方様ハ御通被成候由、大柿へ相聞得申候ニ付、左様ニ候てハ何共可被成やう無之候間、関ヶ原江打立一軍可被成と之御談合ニ相

濟、九月十四日夜入候てより大柿御打立、夜中ニ関ヶ原へ御着被成候、夜明け候へハ東國衆大谷形部殿陳ニかゝり、六七度之合戦有之候処ニ、上之山より筑前中納言白旗をさゝせ横入仕、大谷殿人數百人も不殘打取申候、備前中納言殿陳へハ新手之大將相懸追崩、此方之御陳へ相かゝり申候、東ハ別手之大將相懸候間、石田殿陳追崩候間、此方之御陳へ相かゝり、其猛勢眞中へ維新尊公御かゝり被成、大敵を討捕眞中を切明、東之ごとく御切通被成候、然処ニ如此御通被成候而も、何方へ御出可被成事ニ而候哉、と人々申候へハ、又本之ごとく大柿へ御籠可被成候との御意ニ而、南宮山と申候所へ御出被成、大柿を御覽被成候へ者、もはや本丸ニ火之手上り申候ニ付、御籠被成候事不罷成、自其伊勢地こま野之坂江御上り被成、近江・伊賀・大和・河内・和泉御歸國之路次傳、片時も御側を不相離御奉公被成候事、我等日夜御側ニ罷在爲存前ニ而候、左候而 維新様ハ住吉之築地之内ニ御入被成候てより、桂太郎兵衛殿を以被仰聞候ハ、是を先御除可被成所無之候間、内ニ而御切腹可被遊候間、何も之人數へハ御暇被下候間、何方へも落行候へと被仰聞候、何も承、菟角之御返事申上候人も暫無之候而、少間有之而被

申上候ハ、関ヶ原ニ而も別而御奉公申たる者共ニ而候処ニ、御暇被下候由ハ難心得奉存候、外ニ而切腹仕候共、來世ニ而ハ又同所ニ可參候間不苦候由申候而、何もおもひくニ五人三人ツ、同坐仕、介錯之談合被仕候処ニ、其後又本田源右衛門殿を以被成 御意候ハ、先々切腹相留候へ、維新様被思召候ハ、御上様・宰相殿いかやうニ御成被成候事も無御存候て、やみくくと御切腹可被遊事ニ而も無之候間、大坂へ山くまり御遣被成候間、此一左被聞召候而、御切腹可被成との御使ニ而候ニ付、何もこしはたを入留被申候、然処ニ少間有之候間、又源右衛門殿を以被成御意候ハ、大坂之山くまり只今罷歸候、御上様も宰相殿も一段御堅固ニ被成御座候由相聞得申候間、何も大坂へ參候而、御上様・宰相殿御成被成候やうニ罷成候而御奉公可仕之由、御意ニ而候間、皆々畏申候由候而、大坂のことく參、御屋形之御番仕候、然処ニ御城へ使僧を以大坂御屋形之人數被申候ハ、兵庫頭夏ハ於関ヶ原秀頼様御奉公ニ遂戦死被申候間、維新之人質ハ御下被成候て可被下候通被申上候得ハ、御手形出申候而、皆々御下向被遊候、御親父弥五助殿も御供ニ而御下向ニ而候、以上、

1404

右之段々、我等若輩ニ而候へ共、夜白御側ニ罷有、細々爲存儀ニ候間、覺之儘ニ書記、令進覽申候者也、

寛文四年

卯月吉日

神戸五兵衛在判

井尻喜兵衛殿

慶長五年於関ヶ原御合戦之砌木脇
休作殿働之次第神戸五兵衛寛書写

覺

一慶長五年ニ 惟新様伏見御打立被成、美濃國大柿之こ
とく御越ニ而候、其刻御親父休作殿へ御長刀御拜領ニ
而候、則其御長刀を持せ乘馬ニ而御供被成候、近江國
大津の御船ニ召申候而、中先通御通被成、大柿ニ御着
被成候而、數日御在陳ニ而候、此方之御先手ハ曾根と
申所ニ而候、然處ニ石田治部殿が被仰候ハ、洲之俣渡
口を敵可相渡様ニ聞得申候間、御辛勞ニ而ハ御座候得
共、 惟新様被成御越候而被下候へと被仰候付、大柿
御立被成、さわたりと申舟渡被遊候而洲俣ニ御着、御
一宿被遊候、然処ニ夜中ノ東ニ當、石火矢之音間もな
く仕候、夜明候而ハ 御意被成候ハ、千熊事ハ所之儀

存候間、ぎふ之城ニ而ハ無之候哉、見申候へと御意ニ而候間、堤ニ上り見申候へハ、まかひもなくぎふ之城ニ當、夜明候而も石火矢之音仕、其上火之手立申候間、其通申上候得ハ、何共咲止成儀ニ而候由御意ニ而候、左候処ニ石田治部殿御使を以被仰候者、遮而御談合申度儀御座候間、さわたり口へ御出被成候得、左候ハ、御小姓一人ニ而御出被成候へと御意趣ニ而候、御返事ニ、御心得被成候由御意ニ而候、それらさわたり口へ御出、御供新納旅庵・本田源右衛門尉殿・矢野主膳殿、乗馬此衆御供ニ而候、御かち衆少ニ而御出合被成、御談合被遊候處、俄ニ敵程近くよせ來申候へ共、すのまたニ被召置候人々ハ、不存候而罷道^{【本マ、】}候へ共、何も御跡ニ被罷居候人々被申候へ、いかに仕候而も、今かやうの時分、誠ニ無人ニ而御差出被成候間、我々も御跡も可參之由談合候而、皆々打立被申候、御親父も御跡之御人數にて中途迄參候へハ、黒具足ニ矢ほろかけ申候武者、栗毛之馬ニ乗一足ニ而かけ向候、敵ニ而候ハんと存候、用心仕候へハ、矢野主膳嶋津中書へ御のき被成候へと御使ニ參候、彼人被申候へ、其右手之桑之木ノ中ハ皆々敵ニ而候間、一刻も急御側へ參

候へと被申候付、一入馬を早め申候処、先を見申候へハ、御親父馬上より御拜領之長刀を持御參候ニかけ付申候而、同舟にてさわたりを相渡、御前へ參申候、其時乗馬ニハ、貴老御親父と我等が先ニ御參被成候人老人も無御座候、左候而敵可相渡候間、無人ニ而候へ共、一軍可被成由御意ニ而、日没申候迄御待候へ共、敵參不申候ニ付、又大柿之如く御出ニ而候、左候而間有之候而、関ヶ原夜中ニ御出候処ニ、日出時分はや東國衆のほりを指立、大谷殿陳ニかゝり申候、此方ノ御陳之前備前中納言殿、東者石田殿請取之陳場、此方ハ二番備ニ而候處、大谷殿戰死、備前之中納言殿石田治部殿追崩し、此方之御陣ニ猛勢かゝり申候時、貴老御親父拜領之長刀を持、大音ニ而嶋津兵庫頭内之小弁慶と名乗、猛勢之中へ切入敵數多相取、又 惟新様御側之如く御參候、其後御跡を閉目可申候間、御心安御除被成候へと被申上、山田民部殿・刑部左殿只兩人御跡へ返敵をふせき、 惟新様をのかせ上被申候処、伊賀國之内しがらきと申所ニ而、御一大事ニ而候へ共、刑部左衛門殿被罷出種々被申候而、其場無何事御座候、しからき之事ハ細成儀多候へ共、老筆不得書申候、それ

より七ヶ國御通被成候、片時も御側を不相離御供ニ而御下向ニ而候、

以上、

右愚身之覚申候通、大方如此御座候まゝ、別紙ニ書付進上申候、以上、

寛文元年十二月九日

神戸五兵衛判

木脇三右衛門様

「黒木左近平山九郎左衛門覚書」

関ヶ原御一戦之大抵

一 慶長五年九月十一日、手前事大坂を打立、濱之市衆・

福山衆卅人程同道申、同十三日昼程ニ大垣江參着候、

上り之本乗馬衆・小指之本大坂江被召置、御國より參

候人數、如右本仕調可參候由御座候条、如其誘道中備

ニ而まゝ候事、

一 惟新様 中務様大垣之城より外御陳屋へ御座候、石田

治部少輔殿此方御陳屋へ御出候時節にて、御同座御座

候、參候衆銘々御目見得候、赤崎丹後罷出候刻、惟

新様御意候ハ、此者國許ニ而武邊仕者ニ而候と御座候

得ハ、石田とのゞ随分相働討死候得と被仰候事、

一 翌日十四日うち出御座候、明やしき有之候、家之上道

具を取、梁ニ簀子をかきして御座候、 惟新様 中務

様其外功者之衆御上り候而、赤坂之大駄被御覽合候事、

一 石田殿衆赤坂之軍衆ニ懸合、敵卅人程討取候由、石田

殿より注進候事、

一 頓而御陳屋へ御歸候、日入時分関ヶ原之様に御陳直御

座候、夜入候而雨降候、濱之市衆者 中務様御手ニ可

相付候由にて、 中務様御備ニ參候事、

一 夜明前ニ関ヶ原江御着候、御備場御見合候処、石田殿

備御座候、夫より右之方江一丁半程間候而、此方軍衆

夜明御備被成候、御備御座候、中務様先備にて候事、

一 十五日早朝ニ、諸勢ハ内府様勢上切候之よし申來候、

一 戦ハ辰巳之間ニ而も可有之候、雨天にて候間、細々

ミへかね候事、

一 敵合前ニ龜川武藏殿より被仰候ハ、敵か付候間鉄鉦衆

可有御加勢之由、濱之市衆可遣之由御意ニ而、堀井三

郎兵衛・前原孫左衛門、其外餘多福山衆鎌田次郎九郎

・前原源六遣候、其衆彼方備ニ被參着候半と存候時分、

はや味方勢崩候、以後承候得ハ、龜川との野心之由申

候事、

一石田殿より八十嶋助左衛門殿を以、敵勢ニ被爲懸候間、跡江押寄候様ニと被仰候、委細心得候よし御返事候、

八十嶋殿使ニ被參候、其時ハ此方備中より馬上より口上、尾籠之事杯口々に悪口申候得ハかけ戻り候、石田

殿自身追付御出候而、敵勢相懸候間跡江被押寄候様に御座候、中書様御返事ニ、今日之儀ハ面々伏ニ手

柄次第ニ可相働候、御方も其通り御心得可有由直ニ被仰候得ハ、近來能有御座と被仰、手備ニ被歸着候半と存候時節、はらはらと敗軍候之事、

一 一戰前ニ大谷殿陳を筑前中納言殿被責敗候刻、此方御備之近邊を馬乘ニ二騎相通候、敵欵何者かと可打取と口々ニ申候得者、先手ニ參可相働候、其節敵味方ハ可相知と申候而相通候、其後出合候ハ大谷殿陳攻取候由、東衆江注進之使ニ而可有之と申候事、

一 敵勢如何ニも間近寄付、御一戰可被成と、鉄鉋前積御打せなく候、左候而中書様御馬ニ召候、漸鉄鉋一箇ツ、打候へハ、敵味方入乱候付、鉄鉋用ニ不立、其俣刀を抜敵ニ向候、敵勢充滿して敵ミ方之分ち無之候、少間候て此方衆ひる巻を取、削かけも抜捨うちましり候事、

一 中書様より御先ニ馬をかけ、敵味方入乱候付、中書様御座候処を心掛、彼方此方見合候處ニ、惟新様江

參合御供申候、御手廻り纒之御人數ニ而候、然共敵勢ハ敗軍之味方ニ追掛り差通候、然處ニ内府様御備、

此方御通被成候道筋ニ打向ひ被成候、御出候条一大事に見得申候得ハ、佐和山海道之様御通り候而、無別条

候、夫ハ何方之様可有御出哉と御座候、大垣之城江可被成御籠と彼方へ御越候得共、野心多候間、城中之儀無覚東候条、可惡と御座候、去者先いせ路を御通候而可然と、御議定ニ而候事、

一 四國陳に長東大藏太輔殿・長曾我部殿其外大勢御陳ニ而候、合戦之手にも不被合候、大勢御座候、長東殿へ伊勢平左衛門、當手之衆此方迄返取之由被仰断候、彼軍衆敵共味方とも不相知候、逆心之衆ニ而候ハ、平左衛門殿直可有討死候、又味方ニ而候ハ、さひを振

可被成と約通候而、馬かけニ而長東殿ハ被爲參候、頓而さひを振被成候間、夫より御退御座候、長曾我部殿勢四國陳より被退候、彼軍衆より先ニ可有御退哉、跡へ可有御退哉と御座候、彼軍衆大勢之儀候間、先ニ御退候而可然と、則御立退候事、

一 惟新様駒野ニて花色之木綿合羽を召、同色之もめん御手拭ニ而御髪を御包被成、御馬之鞍を矢野主膳被乗候馬之鞍ニ敷替候而御馬に召し、山田舎之ミチを夜中ニ御通候、夫より住吉迄ハ夜も日も御通道ニ而候事、

一 長束殿より爲御案内、馬乗一人一夜被相付候事、

一 御通之道すから、此人數ハ主人に爲取後者ニ而候、能相手之伐死可仕と存候へ共、向候もの無之候、仕合も候ハ、伐死可仕と申候而、中途ニ罷出候事、

一 惟新様何方へ欵御出候、御供衆ハ大坂御屋敷江參、御番可仕之由候而、何れも如大坂參候事、

一 大坂御やしきへハ國分様・宰相殿被成御座候、宰相殿

御下向之御書物專秀坊被取候而、大坂御出舟ニ相濟候、

國分様御同心候而御下向たるへく候間、おまつと申御

女房衆を、國分様と申候而可有御座との様子候、其刻

鹿兒嶋より相良日向殿、濱之市よりは吉田美作入道殿・

新納孫右衛門殿・上原右衛門佐殿などお松江被相付、

大坂御屋敷へ可被居留之由、平田太郎左衛門殿御差圖

ニ而候、殊之外諸人迷惑かりニ而候、然とも御差圖之

衆ハ御屋敷江御座候、如何様ニ候哉、我々舟江頓而兵

庫ニ而追付被參候事、

一 大坂より秋月殿奥方御同心被成御下之由候、日州美々ニ而 惟新様御宿江御暇乞に御出候を見申候事、

、黒木左近兵衛殿申分

一 関ヶ原合戦、慶長五年九月十五日辰巳之刻之間ニ而も

可有之候、雨天ニ而霧深候而、方々ミへかね候、此方

御備二備ニ御座候、中書様先備ニ而、右備ニ山田民部

殿ニて御座候、我等事相付罷居候、猛勢寄來候を間近

寄付御一戦可有とて、前積鉄鉋御打せなく候、敵勢間

近寄來候時、中書様時分能可有之と候而御馬ニ召、弓

を御持候、赤崎丹後いま些早く可有御座候、膝之掛上

る程寄付可仕と被申上候、少間候而、時分能可有御座

と丹後被申候へハ、中書様御馬上ニ鎧を御持候、此方

軍衆一同ニ鉄鉋一箇ツ、打候得者、敵味方入乱るゝニ

付、鉄鉋不用立候、鉄鉋を腰に差人も御座候、又細引

などニて琵琶かけに頭にかかけ候方も有之、捨候人も有

之候、其まゝ刀を抜敵に切むかひ候、民部殿ハ中書様

より御先に馬を被懸入候、此方軍衆右も左も敵を切被

申候、猛勢入乱てき味方之分ちも無之候、三四町程も

切通候得ハ、少敵薄様御座候、其時中書様何方ニ御座

候哉と山田民部殿被仰候、家來荒木嘉右衛門・上田内

藏助申候へ、如跡御馬爲參と申候、如何と民部殿ためらひ被申候、嘉右衛門・内藏助馬之手綱に取付候、左近兵衛・荒木助左衛門なども馬之尻ふさに取付引留、中書様御馬ハ跡之様ニ參候を見候儀無之紛候、跡江引戻し見合可有と申候而被引戻候、濱之市衆・福山衆餘多被付居候、其内誰とハ覺不申候、此方御馬印伊吹山之方野瀬多尾に見得候と申候、御馬印ハ熊之皮にて候、一本杉之様爲仕御馬印ニ而候、見合候處 惟新様御一手ニ而、敵中を切通候ニ被參合候、御側ニハ纒之人数ニ而候、 惟新様を引包候而敵方ニ御掛候、木脇刑部左衛門殿杯四五人ニ而も候半、御前ニかゝり候敵をふせかれ候、刑部左衛門殿持道具ハ御長刀ニ而はたられ候、民部殿を見付悦候而、御手前ハ御側無人ニ而候間、御側江可有御座候、被付居候衆ハ此手ニ相付可有之由候、濱之市衆廿人餘程も御座候、其衆我々も刑部左衛門殿へ相加里、御先江寄來敵をふせきのけ候、手強くふせき候而、御先ニ寄來敵左右ニよけ、伊吹山之様敗軍候、敵追掛通候、如此御切通候得ハ次第ニ敵薄く成候、一里程茂御出候候ハ、敵勢遮而無之候事、

一 駒野近くニ而、桂太郎兵衛殿と民部殿、御跡を閉め可

被成とのあらそひニ而候、其時大野弥三郎殿被仰候へ、御兩所重き御身上ニ而候、我等閉め可申候、敵相掛候ハ、討死可申間ニ可有御退取事候条、弥三郎閉め可申と被仰候、然處民部殿・太郎兵衛殿早々追付御供可有之由御使ニ而候、太郎兵衛殿被仰候ハ、深く數御望ニて不申叶候間、手前先御供可申由候而御側之様被參候、夫々民部殿御跡を閉め被成、翌日より御下知ニ而、一日替りニ民部殿と太郎兵衛殿と御先御跡を閉められ候、道中強盗人多御座候事、

一 駒野を御立候而二日目ニ而も候半、御供衆何れも草臥申候間、はたごを可被下と候而、誰とハ見知不申候、其人御先ニ被參候而聞合候得者、旅籠可調と申者御座候、村中之者共切寄ニ取上り家をあけのけ候、切寄ノ米を持下し、黒米ニ而旅籠を調候、御供衆何れも庭に罷居、めし被下候、其時分御使銀無之と承候事、

一 民部殿指刀金丸拔ニ而候を、迦し被差上候、左候而刀之鞘紙よりニ而巻候而、なめしの引込ニさし入、御國迄其候ニ而差候而、御供ニ而候事、

一 平山九郎左衛門申分

一 御備并御敵合之様子等、黒木左近兵衛申分に少も不相

替候事、

一大軍入乱、川上四郎兵衛殿此方御手を取はなれ被成、

たる井川石飛御座候処を渡候而被引退候処、相付罷在

候若輩之事候間、又四郎兵衛殿ニも取はなれ、右之時

宜ニ候間、御合戦之様躰不存候事、

一御敵合前ニ時之聲度々上り、當手之時聲ハ高橋喜兵衛

殿始ニ而候事、

一白狐二ツ御備之前ニ有之池を渡り、敵勢之様向ひ候、

頓而跡之様草原を行戻候、此節之御合戦如何可有御座

候哉と、皆々被仰候事、

一御敵合前ニ永野勘左衛門殿敵勢ニせき入、敵一人討取、

首を鎌刀ニ取添參候而四郎兵衛殿江被申候ハ、今日打

始之敵仕候證據ニ御立可有由候、夫々勘左衛門殿躰而

可爲討死と存候事、

一戰場乱候而、毛利覚右衛門殿へ四郎兵衛殿被仰候ハ、

殿様御行多を申合度と候得ハ、只今可參と覚右衛門と

の被仰、敵勢ニ被懸入ハ、刀鎌ニ而さわり候を掛通り、

小岡越ニかけ込候を見申候、定而頓而可爲討死と存候

事、

右御記録所々書認候而可有御差出之よし候ニ付、閑

ヶ原江被罷立候衆山田民部殿より被取揃、各被仰合
穿儀如此御座候、以上、

一石田治部少輔殿慶長五年野心を起し、西大名からくり

廻し、其後嶋津殿御同心之由被申候へ共、家康様江

別而被仰合候条、御同心罷成ましき通御意被成候、夫

々伏見御城御番衆松平主殿介殿・鳥井彦左衛門殿、石

田治部少輔殿被仰候ハ、右之衆御同前ニ可罷成候由

承候得共、成間敷候間、御城江御籠可被成之由被仰候、

然共城主取衆々、嶋津殿を城ニ入申候事成間敷之通被

仰候付、於其儀ハ平地ニ而御味方者罷成間敷、不及是

非御替可被成と御意ニ而、竹尻弥五助被仰付、江戸右

之通御狀を以被申上候処、家康様御返事御狀持參申

罷登ニ、近江之水口ニ而とかめられ、御狀を捨御判計

取留候処、頓而籠舎させられ候得共、色々ちんし籠よ

り出被申候而伏見江罷登候得共、御返事ハ不知候事、

一慶長五年七月十九日ニ伏見御城江矢入御座候、無程同

八月一日落申候、夫々頓而美濃之様ニ御下り被成候而、

大垣より一里奥須之侯と申候処ニ御除取ニ而候、其間

ニ大川有、ろくの渡りと申候而舟渡り也、其渡瀬ニ石

田殿・小西殿・惟新様大垣之城より御出合被成、惟

新様江御談合御座候処、内府方之衆美濃國岐阜之城を
詰落し、石田殿人數梅野と申所ニ而三百人程討取、直
ニ其人數ろくの渡リニ押寄候、此方之人數ハ須之俣江
ミナク召置候、御供衆入來院又六殿・川上久右衛門
殿・新納弥太右衛門殿・喜入攝津守殿其外十人計ニ而
御座候、其時石田殿被仰候様子ハ稠御座候程ニ、先
御除可被成之通被仰候得共、人數を皆々須之俣江召置
候、彼人數一人も不殘くり除不申、我等除事罷成間敷
由御意被成候、然共石田殿ミれん被成候而、如大垣被
爲曳候を、新納弥太右衛門殿・川上久右衛門殿、治部
少輔殿馬之口を取、兵庫頭殿爰元江相はまられ候、ミ
れん被成間敷之由被申候へ共、馬を曳立大垣之様籠被
成候、然處ニ木脇休作殿馬ニ乗、長刀を持、ろくの渡
りかけ入、薩摩之今弁慶と名乗かけ渡し、御前ニ被
參候、御意被成候へ、久作馬を乗入參候を御覽被成、
千騎之きほひと被成御意候、夫々須之俣之人數も不殘
除取申候而、大垣之城ニ御籠被成候、夫々赤坂江 家
康と被成御陳候、惟新様も大垣江數日御滞留被遊候、
慶長五年之九月十四日之晚六ツ下りニ、大垣を御出被
成候、関ヶ原之様御打立、其夜雨降申候、左候而夜之

七ツ時分ニ関ヶ原ニ御着被成候、取合之賦一番鎧石田
殿、二番中書様、三番備前中納言殿、其續ニ 惟新様
ニ而有之、其外大名衆方々ニ陳取被成候、石田殿一時
も不答候而、中書様陳場江被懸崩候処、中書様些御答
被成候、 惟新様未御鎧も不被召候、こくちハ如何様
有之、御支度可被成通御意ニ而候、最早能時分ニ而候、
御鎧可被召之由ニて御支度被成候、取合を曾木五兵衛
殿被上召遣し、中納言殿はらかへり被仕、大谷刑部少
輔殿江被掛合候、大谷殿差答まくり被返候、又中納言
殿こミかへされ候而、大谷殿も不答くつれられ候、備
前中納言殿陳所 惟新様御陳之間に池有り、中納言殿
人數皆々池江逃入申、此方之陳場ニ乱入、方々ニ罷成
候、其場之御談合ニハ、何方ニ御懸可被成候哉と御相
談有之候ニ付、先々筑前中納言殿へ切かゝり可被成候
御談合ニ而御掛り被成候へ共相替、本之俣大將未勢之
方ニ御懸被成切御通被成候ハ、大垣之城江御籠可有
之候、若於不罷成ハ、御はまり可被成と御意候、則本
之俣未勢之中を切御通被成候、其時白濱七助殿舟歌を
あけ、皆々うたひ申候へハ、 殿様御腹立ニ而候、夫
々大垣之城見ゆる迄御除被成御覽候得ハ、大垣ニ火を

かけ焼立申候間、城江御入被成候事不罷成候而、なり
 次第ニ御除可有と御座候而、伊勢路をへ心差御除被成
 候、然ハ六ツ下りニ罷成候、駒野之坂ニ打向御除候、
 御意被成候ハ、何れも御供ハ具足を脱捨申せと御意ニ
 而候へ共、何れも不被捨候、頓而駒野之峠ニ御上り候
 時分ハ、夜入四ツ時分也、又其時御意之通、皆々具足
 を脱捨申せと被仰候得共、無其儀候、御鎧御ぬぎ被成
 候、先々御捨可被成通御意ニ而候、其時横山久内殿御
 側ニ罷在被申上候ハ、大事成御鎧、此野原ニ捨置申事
 罷成間敷儀候、久内江被下候得、御鎧諸共ニ着可申候、
 若着届申候ハ、御奉公也、また着届不申候ハ、御鎧
 諸共ニ相果可申由被申候付、則横山久内ニ被下候而着
 被申候、夫々伊勢・近江・伊賀御通之刻、跡先を取切
 稠候得共、御通ニ而候、伊賀之内しからきと申所一宿
 被遊候、其夜御供衆談合申候ハ、兵庫頭様と相知通間
 敷之由申候ハ、如何可有之哉と相談御座候処、本田
 源右衛門殿被仰候者、我等首を差上ケ可申候間、各首
 を御取被成候而差出、其場を御通可被成候、左候而則
 源右衛門殿入道被申候、然共御通被遊時分、取籠事無
 御座候付、皆々御通被成候、夫々大和・川内・和泉を

御通被成候、和泉之内平野と申所ニ御出候、平野ノ境
 之住吉ハ一里也、其ニたなへや道与と申て、別而御目
 懸之人罷居候、夫ニ平野ノ先老人忍而御遣被成、是迄
 御出被成候通御意被成候ハ、何れも御共衆餘多召列御
 忍被成事難成思召候条、皆々御暇可給候、大坂之様可
 被參之由、御意ニ而候、其時御供衆御返事被申上候ハ、
 只今御暇給御側を離申候而後、二度懸御目事御座有間
 敷候、今日御暇被下候ハ、只今爰ニ而腹可仕と被申
 候、又御意被成候ハ、大坂も鹿こしま之御前様も御座
 候、宰相殿も御座候条、爲御奉公いづれも參候得、又
 我身上も三日中ニ免角可相知候、成果を承、其時者今
 之分別次第たるへくと、被成御意候、何れも御奉公と
 御意ニ而候条、先々任御意大坂之様ニ可參と、御返事
 被申上候、然所ニ住吉より道与女乗物を持せ御向ひニ
 被參候、其乗物ニ召、住吉之様御忍被成候、御内之者
 ニハ大重平六一人、道与腰かき二人ニ而住吉ニ御入被
 成候、左候而御跡ノ夜入時分ニ一人ツ、被參候、先伊
 勢平左衛門殿・白濱七助殿・曾木五兵衛殿・矢野弓次
 殿・白坂与竹・本田与兵衛殿、此衆御跡ノ忍々ニ被參
 候、又住吉ニ御忍被成候事難成、境之様御忍被成候ニ、

乗物かき無之候而、白濱七助殿・矢野弓次殿御腰廻し被申候、道与案内者ニ而塩屋之孫右衛門と申者之所江一宿被成候、彼孫右衛門と申者、連々御目懸之者ニ而候へ共、殿様とハ不相知候、いせ平左衛門殿と申候而御入候、御舟之約束住吉江廻候得与、御舟頭東太郎左衛門約束被申候処、思之外一里奥境之浦ニ御除被成候、舟之約束相違仕候、如何可有之候哉と御座候処、塩屋之孫右衛門屋敷之浦江御舟參候、先何方之舟共不知、平六參候而尋ニ可罷出之由候間、能尋申候得ハ、薩广舟と答候、近參候得ハ御座舟ニ而候、太郎左衛門申候ハ、是ハ住吉ニ而有之候哉と申候、いや境之浦ニ而候、先々太郎左衛門舟江召置、則御前江罷出、御舟と申上候、御供衆皆々目出度御仕合と被申、則御宿を御立候、御舟夜之七ツ時分ニ參候間、御乗被成候而、でんふう口之様被成御座候、左候得ハ御前様之御舟も一度ニ兵庫川口江御出被成候而、天ヶ崎・西之宮間ニ而 惟新様宰相様・鹿兒嶋之御前様も召移被成候而、廣瀬次助殿・赤塚源太左衛門殿御供ニ而、御舟ニ乗被申候、然処ニ豊後之浦ニ而、宰相様御座舟・鹿兒嶋御臺所舟・帖佐御臺所舟三艘、黒田甲斐守殿兵舟參候而

1406

かけ取候、御座舟之乗衆、伊集院左京殿・比志嶋源右衛門殿・有川助兵衛殿戦死ニ而候、其外戦死餘多御座候、帖左御臺所舟主取大重重次郎殿戦死、其外餘多有之候、鹿兒嶋御臺所舟主取宅間与八左衛門殿戦死、其外餘多有之候、 惟新様日州之内細嶋江御着被遊、佐土原江御立寄被成、八代江御止宿にて、大窪江御止宿ニ而、十月三日大隅之國富之隈江御着被成候、頓而御舟江召、慶長五年十月三日ニ帖左江被成御着候事、
万治二年己亥九月十九日
一 惟新様御鎧、横山久内大坂迄着届被申候、其後京都愛宕ニ御祈神ニ而候事、
一 御馬但青毛、名むらさきと申候、境之住吉大明神ニ御上、

兵庫頭義弘様先年高麗江御渡海被成候事

一 慶長二年二月、帖佐被成打立、高麗江御渡海被成候、大重平六十四才ニ而御供仕候、親大重大藏事ハ自力ニ而御供仕、御奉公被申上候事、
一 高麗赤國之内そてんと申所ニ御城とり候而御座候、そてんより五里奥ニ晋州と申所ニ、江南人共万餘陳取て

罷居候事、

- 一 そてんより一里奥ニ古くわんと申所ニ、此方之人數ニ三百程召置被成候処、晋州より江南衆、慶長三年九月廿七日ニ掛申、古くわん之人數餘多討死被成候、殘る人數そてん之城ニ追入、御城口迄江南人餘多參候、義弘様直ニ御下知被成候、今日一人も城ニ罷出間敷候、鉄鉦一ツも打間敷と御下知ニ而候、左候而江南人も晋州之様引申候事、
- 一 慶長三年九月廿八日、晋州ニ定使者黒房と申者使者參候而、昨日ハ若者共氣任申、味方之人數過分ニ損し申候通申候事、
- 一 慶長三年十月一日ニ、そてんニ人數寄可申候、其御用意可被成通申來候事、
- 一 慶長三年十月一日ニ、江南人廿万餘そてん御城ニ押寄申候、大將もうろう屋・とんろう屋・ういひん、掛樋和泉殿右之陳所ニ罷居候、左候而御城左右方之口ニ押寄申候、其時、義弘様御下知被成、御城外廻ニ返御通被成候而、今日鉄鉦一ツも打間敷と御下知被遊候事、
- 一 大手之矢倉へ、御兩殿様其外餘多御上り、寄來ル敵を御覽被成候得へ、城元江參候人數如何程共不相知候、

籠門之南之矢倉ニ鉄鉦壹ツ打被申候事、

- 一 大勢之中ニ塩焔ニ火入候而、物之色地見得不申候、其時御城より切出被成、敵も崩そてん川を逃渡り、大將ニ崩掛候、大將差答候、此方之人數足々ニ罷成候處ニ、島津圖書殿・伊集院抱拙御答被成候、其時、又八郎様ニ御使御座候得共、御意之趣不被聞召分候間、川上掃部助殿を以、只今之御使如何様成御意趣ニ而御座候哉、可承候、御意趣へ、敵も大勢ニ而大將皆答、此方之人數も足々ニ御座候か、如何可有御座哉と御意ニ而候事、
- 一 藜刈源兵衛江被成御意候へ、西之門塩入口敵大勢横入を仕躰ニ見得候、如何可有之哉と被仰候、源兵衛、如御意ニ而候、日本軍ニ而候得へ横入可仕候、乍去大國人ハ於不存へ、横入ハ仕間敷候、併大將も頓而崩可申と被申上候、然処圖書頭殿・抱拙何れも御働被成候、而則召崩被成候、夫々方々ニ追打被成候事、
- 一 古くわん之前ニ川御座候、其川石橋ニ而候、大勢其川ニ崩入候、其川を間ニ置、答戦申候、其時本田右馬頭殿手負被成候処、川上四郎兵衛殿・同久右衛門殿兄弟之手勢にて御崩し被成候、夫々たまらず崩申候事、
- 一 晋州質重坂と申候坂有、其坂之平中程ニ西之方江進行

敵、又八郎様御馬をかけ付、御馬之上より弓ニ而射落被成候、頓而御馬之上より御腰物を抜、則御討被成候、義弘様坂之下より御覽被遊、扱も御仕合早きと御褒美ニ而候、

一其日 義弘様御討被成候敵三人、又八郎様被成御討候敵七人ニ而候、夫々如御城被成御歸宅候、城近所ニ平原御座候、其原ニ而 義弘様御軍拜被遊候、又八郎様御討被成候首二ツ、義弘様御討被成候首一ツ、合三ツ御軍拜被遊候、又八郎様ハ東向ニ床机ニ御腰を御掛被成候、其時川上四郎兵衛殿被申上候ハ、士之左扇子とハ今日之事ニ而候、左扇子御遣ひ可被成候、御腰の扇子を召出御つかひ被成候事、

一義弘様より菱刈源兵衛殿へ御意被成候、今朝塩入之敵様子御尋被成候、横入ハ仕間敷通申候、頓而大將も崩可申候条、御念遣有間敷通申候か、何と見及候而申候哉と御意ニ而候、源兵衛殿被申上候ハ、如御意大勢答申候而も、足々之物崩掛り申候得ハ、答んものニ而候間と存候而申上候、弓前ハわれ共か功者と存候而御座候処、源兵衛ハ我共ハ功者ニ而候と被成御意候而、頓而御城江引入被成候事、

一此日帖佐土瀬戸口弥七戦死ニ而候事、

一此日稻荷敵陣ニ走入候、半弓之矢之跡餘多中り候而死申候、御城之北方之岡ニ取置セ被成候事、

一十月二日ハ城中之人數江被仰付、切捨之首集ニ被出、

三日御取セ被成候、大形大手之口ニ集候首三万八千七百餘と承候、其外取捨之首ハ數不相知候、大手之口ニ首塚十五間法ニ御築セ被成候へ共、たまらず候而又廿

間法に直候、左候而松植被爲置候事、

一其後江南方ハ御無事之様子申上、御無事ニ罷成候而、人質もろうふや之弟ういひんと申唐人を人質ニ差上候事、

一慶長三年霜月十五日ニ、そてん御出船被成候而、ちやくせん嶋ニ御懸被成候而、三日御滞留ニ而候事、

一小西攝津守殿城、しゆてんと申所江御座候、番船取巻候故、除方不罷成候付、此方番船を御崩被成候而、小西殿をくりのけ被成候而、霜月十八日番舟ニ御懸被成候、御仕合悪敷方人數餘多戦死被申候事、

一義弘様御馬印敵舟よりうはい取申候を、御供舟ハ鹿兒嶋士黒田宅右衛門と申人、敵船ニ切乗候而御馬印を取返し被差上候、其時上下共ニ扱くと申候事、

一霜月十八日之夜、唐嶋之様御退被成候、十九日之朝唐嶋之小瀬戸ニ御懸被成候事、

右関ヶ原之大抵書終畢、

(本文ハ一七四号記録ノ一部ト向文ナラン)

井上主膳覺書

覺書留

一我等十九歳ニ而長壽院御供仕、関ヶ原江罷登候、惟新様御兄弟者前より被遊御在陣候、長壽院様者御留守居ニ而御在國ニ而候得共、跡より様子ニよ可被成御出陳よし、内々御用意ニ而被成御待候、然処ニ七月末ニ上方より早飛脚參、早々可有御上洛よし被仰下候、其折節者濱之市ニ被成御座候故、宮内八幡之しはニ而候間、しは違之祭り被成、蒲生地頭職ニ而候故、蒲生衆中相付被罷登候、人數被成御待、帖佐之川口より八月三日ニ御出船ニ而候、帖佐衆茂少々相付、以上七拾人程ニ而御登候事、

一右之ことくニ而、夜白を不嫌御登候処ニ、佐多之御崎ニ而難風仕、御船ニ塩入陳道具ぬれ候故、船を戻し、五日被成御支度御登候事、

一瀬戸内ニ御入候得者、最早世間之様子前に相替り、番船迄御座候様子、色々に被仰御通り候事、

一ヶ様之儀ニ付弥御急ぎ、夜る迄茂押船ニ而、水主杯茂情氣尽、夜中ニめしを兩度ツ、被下候事、

一兵庫江御船を着け、地下人銀子杯を被下御頼候者、當時乱中ニ而、御上様杯其外薩摩衆在京被仕候、何様成候ハ、通用を心付可有よし、修(段)被仰置候、定而此人者問屋杯ニ而茂候哉、名者覺不申候、大坂ニ而茂同前に被成候事、

一京都ニ而聞召候得者、弥六ヶ敷候故、少年之者兩人京都江被成御殘置候、其内一人者鹿兒嶋下町江罷居候甚兵衛与申者ニ而候、一人者鮫嶋治部右衛門ニ而候事、

一美濃路江かゝり被成御打立候処ニ、路次関東方之陳多候而、毎度被成御難儀候、駒野・赤坂杯与申所皆敵方之陳屋ニ而、西國衆相通候事難成候事、

一駒野ゝこなたニ而、飯野衆中玉林坊江被仰付、里人を一人からめ取、敵陳之様子道之案内ををしへ候得、無左候ハ、則打果し可被成由稠敷被仰付候付、しはりながら無是非御案内を申上候、後に銀子を被下、被成御歸し候事、

一駒野邊に一夜野陣をとり御留り被成候時者、無兵糧ニ而、其あたりにて夜ニ紛いも被成御取せ被下候事、

一御先立薩摩衆伊勢平左衛門殿を大將ニ而多人數、是茂被成御通儀不能成、彼邊に御滞留ニ而候、中國衆勢茂同前に御座候事、

一伊勢平左衛門殿被仰候者、長壽院殿者赤坂之陳を可被成御通様子与相見得候、彼大勢之中を小勢ニ而可被爲通事、且御無用ニそんし申候、跡より味方追々ニ參着候ハ、待合御通尤候よし被仰候、其節遮而御返事ニ、兎角も不被仰閑に御相談次第与被仰候事、

一如右之に平左衛門殿方江被仰候而、跡に御供之蒲生衆杯に被仰候者、何様ニもあれ我者明朝卯之刻ニ可相通候、其用意可有与被仰渡候事、

一玉林坊江彼赤坂近所之在家江火を掛被申候得、其間に可乗通由被仰付候事、

一我等御側江相詰候故、御拵箱より紙を取出し進上可申候よし御意候、其ごとくに仕候得者、御手自右之紙ニ「本ノマ、」而俄にさいはいひを被成御切、青竹之崎ニ付被成候而、又々帖佐・蒲生之衆・御家中之人數迄被召寄被仰聞候者、明朝未明に可相通候、其時我只一騎先に乗通り可

見候、さいはいを先へふり候ハ、急ぎ追付候得、跡之ごとくふり候ハ、跡ニ歸し候へ、たとへ敵取かけ候共、我者馬上なれば心易き由被仰候事、

一其後中國勢より使ニ而被仰候者、明日御通り被成候ハ、御同道可申よし候、返事に被仰候者、中國衆之御鎧り未不承及候、御同道不能成候よし、無曲に被仰切候を、御側に罷居承候事、

一翌日卯時に御立被成候、彼所より関ヶ原者四五里程御座候、其道者敵陣之前に一筋に小道御座候、陳与道与之間田御座候、其田四五町計も可御座有哉与于今存候、玉林坊者方々走廻り、在家に火を付燒立被申、其近くニ社檀御座候、火掛り則火に上仕候を見申候事、

一夜も明候而跡を見候得者、中國衆之黄色之旗差立、伊勢平左衛門殿旗茂相續見得候、其時さいはいニ而御招候故、御馬近く何れも追付候得者、彼ために我者小勢ニ而通なり、敵者あ之大勢ニ社可心掛候、我々者氣遣なし、急ぎ候得とて御馬をはやめ被成候事、

一如右之ニ而御老人御通候、然処ニ石田治部少輔殿より千計之人數ニ而相迎ニ耆里計被遣候、其衆被申候者、扱々各者彼之大勢之中を如何して御通り候哉、召鬼「本マ、」か

ミニ而候与ほめ被申候事、

一御馬を早道に乗りなされ、関ヶ原御陳之前ニ而馬を乗
放し御參、 惟新様被聞召付、門外に御走り出被成、

長壽か一番者可爲其方と思ひし、案に不違与被成御意
候、殊之外被成御悦喜、御手を取陳ニ御入候を慥ニ見
申候事、

一ヶ様之首尾ニ而、九月十三日ニ晝前ニ被成御着^{「本」}、應与
何れもの人數茂參着候事、

一石田治部少輔殿より御使者ニ而、上洛大儀、萬事被成
御頼候由ニ而、金磨之軍ばいうちわを調置候迎御持參
候事、

一其晩に薪少茂無御座候故、中間衆取ニ參候得共、少も
無之由ニ而罷歸候、就其我等右之衆召列又々參候へ共、
何ニ而も無之、つゝしかふを引こやし罷歸、漸々陳屋
に火を燒候事、

一其後陣中兵糧有之哉与御尋候へ者、無御座よし申候ニ
付、何れにも御談合被成、夜中に田地之稻等を取入可
申与被仰付、諸侍衆も何れも稻を手自被成御持候、十
四日之晩迄其通ニ御相談ニ而候、拾三日も雨ふり、四
日之夜者大雨ニ而、殊之外寒く御座候て、長壽院・平

左衛門殿杯茂稻こつみに火を付、御あたり被成候事、

一ヶ様之御談合最中に、筑前中納言殿野心之よし注進候、
就夫石田治部少輔殿方者、川上四郎兵衛殿御談合、御
使者ニ御出之由承候、後ニ軍評定ニ、中納言殿を呼入
候て實に御取可有与、大將衆御内談候得共、風氣之よ
しニ而御出無之よし承候、其時中納言殿者若年ニ而、
家老之計事与風聞仕候事、

一翌日未明に御備御座候、殿様御具足・羽織・御甲被
成御拜領ニ而候、是者大閣様より 惟新様江御拜領之
御羽織与承候、むりやうに大き成鳳凰之縫白くニ而候、
御難儀ニ候へ、我等御名字を授り、御名代ニ可罷立
よし御申上候事、

一中務様者別備ニ而御座候、彼手ニ御參被成、馬上より
被成御暇乞、中務様被仰候者、今日者味方よわく候へ
者、今日之鏝者つけましそ迎、互に御笑い候事、

一玉林坊を召寄被仰候者、我者御跡ニ残り打死可致与思
ひ定候、其方者力強く候得者、殿様御供仕候得、隨
分山中之難所等をせをひ上候へと被仰付候、玉林坊茂
同前に打死可仕与被申上候へ共、稠敷被仰付おんかへ
し、

一 早朝に入來院殿与兩人物見ニ御出候処ニ、敵方より鉄炮を過分に打申候事、

一 後より筑前中納言殿取掛被成、敵左右の指合ニ而、にかくしき仕合ニ而、此時薩摩衆 殿様御側ニ皆々被成御寄、如何被成へく哉与口ニ御申、 惟新様者兎角共未被仰出候、長壽院老人、御相談者至此時ニ入申間敷候、乍慮外合戦可被成衆者某ニ御付候得与高音に被仰、其時新納弥太右衛門殿沓番に中々与被仰、御馬を歸し候、嶋津下野殿・毛利寛右衛門殿杯茂同前ニ被仰御殘候、其外之外城衆杯も御座候得共、然々存不申候事、

一 池御座候、其前ニ御答被成候、長壽院御具足之上より御拜領之縫白く之羽織をめし、石田殿より被遣候うちわにて人御招被成候か、頓而刀を御被成候、弥太右衛門殿杯茂皆々刀を御被成候を見候事、

一 敵方より馬を七百計兩度入來候、二度めの戦ニ大乱に罷成候、薩摩衆大方後之堀に逃入候、長壽院馬を乘廻し被成候而、薩摩者五百里なり、逃るとも遠し、何れ面を見知候与はかミを被成、高音に被仰候、其時長崎隼人壱人鎗を持御馬之側に立寄、少もミれん申間敷与

被申、我等茂此時迄ハ御馬ニ相附罷居候、脇江御尋候ハ、殿様者何程御退可有や、何れ茂被申候者、敵陣を押分け御退候、最早程遠く候与皆々被申候へ者、扱者目出度、跡者我等御名代ニ打死只今可仕与被仰候を承候事、

一 其後我等江茂鎗數本被取掛、深手を負ひ申、御側を取はなれ申候故、御最後之様子者見不申候事、

一 後に蒲生衆之嘶に承候者、三度目之合戦弥相乱、其時嶋津兵庫守死狂也与御名乗候得者、大勢取掛鎗ニ而突立候を、餘所なから見申候与物語承候事、

一 我等右之仕合故、働不罷成候て退取申候、其後地下人を頼申て在家に罷居候而、事しつまり折角之躰ニ而京江罷登候而、夫より南都江參、大隅宮内之出家圓明坊与申人知人之故頼申候而、伊賀之國中野與左衛門殿と申人、高三百斛程之土ニ奉公に出申候、彼所江二三年罷居候、其後正興寺文之和尚御上落之時、國より頼上候故、召列御下り被成候、其時與左衛門殿より刀大小給候而罷下り候、于今其刀所持仕候、以上、

明曆三年酉九月十日

井上主膳

大重平六覺書

一慶長五年九月十四日之晚六ツ下りニ、義弘公大垣を御打立被成、関ヶ原之様ニ被成御座候、其夜者雨降りニ而候、左候而夜之七ツ時ニ関ヶ原ニ御着被成候、取合之賦、老番鎧石田殿、二番鎧中書殿、三番鎧備前中納言殿請取ニ而、九月十五日合戦御座候處、石田殿一時茂こたへす、中書殿御差こたへ被成候而合戦御座候、義弘公者いまた御鎧茂不被召候、こくちは如何様ニ有之候哉、御支度可被成之由御意被成候而、御鎧曾木五兵衛被召せ上候、大重平六茂御腰之物を取合被召せ上候處、筑前中納言殿はらかへり被仕候而、大谷刑部少輔殿江被掛合候、大谷殿差こたへ一戦に及候處、又中納言殿茂こみかへされ候而、大谷殿茂こたへす被崩候、備前中納言殿陳所与 義弘公御陳之間ニ池有、備前中納言殿人數皆々池に追入られ、此方之陳場ニ亂かゝり、方々ニ被罷成候、其場之御談合ニ者、何方ニ御掛り可被成候哉与御相談御座候處ニ、先々筑前中納言殿江切掛可被成与、御相談合ニ而候得共相替、大將味勢之方へ御掛り被成、切通被成候へ、大垣之城ニ御籠可被成候、若於不罷成者御はまり可被成与御意ニ而、則味

勢之中を切通被成候、其時白濱七助船歌をあけ、皆々うたひ申候得者、殿様御腹立ニ而御座候、夫より大垣之城見ゆるまで御除被成御覽候得者、大垣之城ニ者火を掛燒立申候間、城御入被成候事不罷成候而、成次第御除可有之与御意候而、伊勢地を心指御除被成候、然處ニ晩之六ツ下り罷成候、駒野之坂ニ打向御除候、御意被成候者、何れ茂御供ノ衆具足をぬき捨申せ与御意ニ而候得共、何れ茂抜捨不申候、頓而駒野之峠ニ御あかり被成候得者、夜四ツ時分ニ成申候、又其時御意被成候者、皆々具足を抜捨申せ与被仰候得共無其儀候、先々御鎧を抜捨可被成与御意被成候、其時御側ニ横山(頭注)「或記ニ、御鎧をセライ參居候處、侍ニ被召成候由、已來ハ休内罷居候而被申上候者、大事成御鎧、此野原ニ捨置御道具衆ニ而候由相見得候」申事罷成間敷候、休内江被下候へ、御鎧着届申度候、若着届候へ、御奉公也、又着届不申候へ、御鎧諸共相果可申与被申上候ニ付、則休内ニ給候而着被申候、夫より伊勢・近江・伊賀御通ニ而候、伊賀之内しからき与申所ニ一宿被成候、其夜御供衆談合被申候者、兵庫様与相知通間敷之由申候へ、いかゞ可有之哉与御相談御座候處、本田源右衛門被申候者、我等首を差上ケ可申候間、各首を御取被成候而差出、其場を御通

り可被成之由被申候、則源右衛門入道被申候、然共御通之時分取籠事無御座候ニ付、皆々御通り被成候、大和・河内・和泉を御通り被成、平野より堺之住吉者老里也、夫ニたなべの道與与申而、別而御目掛之人御座候、夫江平野より先ニ忝人忍て御遣被成候、其地迄御出可有之由被仰遣候、其間ニ御供衆へ矢野休次郎を以御意被成候者、何れ茂御供衆餘多召列御忍ひ被成事難成候之間、皆々御暇可給候、大坂之様ニ可參之由御意被成候、其時御供衆御返事被申上候者、唯今御暇給り御側を離レ、後二度懸御目申事御座有間敷候、今日御暇被下候ハ、只今爰ニて腹可仕候与被申上候、又御意被成候者、大坂ニ茂、鹿兒嶋之（頭注）鹿兒嶋之御前様と有之候者忠愍公之御前様、嶋津備前守忠清之女御前様茂宰相殿茂被成御座候、爲御公之ニ何れ茂被參候、又我身上も三日中ニ兎角可相知候、成果を承候而、其時者人々之分別次第たるへきと御意被成候、何れ茂御奉公与御意候間、先々御意にまかせ、大坂之様ニ可参与御返事被申上候、然處道與女御乗物を持せ御迎ニ被參候、其乗物ニ召、住吉之様ニ御忍ひ被成候、御内之者ニ者大重平六老人道与御腰をかき、二人ニ而住吉ニ御入被成候、左候而御跡より、夜入候而老人ツ、被參候、伊勢平左

衛門・白濱七助・曾木五兵衛・矢野休次・白坂與竹・本田与兵衛御跡被參候、又住吉ニ茂被成御座事難成ニ付、堺之様ニ被成御座、御乗物かき無之候而、白濱七助・矢野休次御乗物廻被申候、道与案内者ニ而、塩屋之孫右衛門与申者之所ニ一宿被成候、彼孫右衛門与申者も、連々御目掛之者ニ而候得共、殿様与ハ不存上候、伊勢平左衛門与御名乗り被成候而御入被成候處ニ、御船之約束住吉ニ廻候得与、御船頭東太郎左衛門ニ被仰渡候処ニ、思之外老里奥堺之浦に御除被成候、船之約束相違候而如何可有之哉与御相談御座候處、塩屋之孫右衛門屋敷之浦ニ船參候、先何方之船与（頭注）或記ニ大重平六御小者衆与有、恰四才ニ而致御供候由、親太郎左衛門、白力ニ而致御供候也も不知大重平六江尋て可參之由ニ而、能尋被申候得者、薩摩船与申候、近ふ參候得者御座船ニ而候、太郎左衛門申候者、是者住吉ニ而御座候哉与申候、いや堺之浦与申聞せ候て、太郎左衛門者御船ニ召置候而、則御前ニ罷出、御船与被申上候、御供衆儘々目出度御仕合与被申上候而、則御宿を御立被成、御船ニ夜之七ツ時分ニ御乗り被成候而、てん（本）マコふう口之様ニ被成御座候、左候得者御前様之御船茂老度ニ川口御出被成候而、天ヶ崎・西之宮之間ニ而、義弘公御船に宰相様茂かこしま

之 御前様茂召移被成候、御供衆廣瀬源助・赤塚源太
 左衛門御船ニ乗リ被申候、然處ニ豊後之浦ニ而、宰
 相様御座船・鹿兒嶋御臺所船・帖佐御臺所船三艘、黒
 田甲斐守殿兵船參候而かけ取候、御座船之衆伊集院左
 京・比志嶋源右衛門・有川助兵衛戰死ニ而候、其外ニ
 も打死之衆餘多御座候、帖佐御臺所船主取大重次郎右
 衛門戰死ニて候、鹿兒嶋御臺所船主取宅間與八左衛門
 戰死ニて候、其外ニ茂戰死衆餘多御座候、義弘公細
 嶋江御着被成候而、佐土原江御立寄被成候、左候而八
 代江一宿被成、夫より大窪ニ一宿被成、富隈江御着被
 成、頓而御船ニ召、慶長五年十月三日ニ帖佐江御着被
 成候事、

一 義弘公御鎧、横山休内大坂迄着届被申候、其後京都之
 愛宕江御祈進御上被成候事、

一 御馬青毛、但名紫与申候、堺之住吉大明神へ御上ケ被
 成候事、

(本文ハ一四〇五号記録ノ一部ト同文ナラン)

(表紙)

慶長五年十月霜月

日々記

十月廿五日晴

- 一新正八幡江御社參辰廻、
 - 一 竜伯様より御使者伊集院伴右衛門尉、
 - 一本田助允其外下衆申越ニ祇候、
 - 一日新寺より御使僧、御茶一ツイ并拈香、
 - 一 柳川殿より御使者十時殿、蒲生四郎兵衛尉殿御振舞、
 - 御座伊勢平左衛門尉・一和、
 - 一 閨首座御船頭太郎左衛門尉京都へ打立、脇本より出船、
 - 一 樽二、脇本船大工、
 - 一 山川より内藏允參候、御樽老進上、
- 廿六日晴
- 一 三山より脇本主水左衛門尉祇候、鹿皮老枚進上、
 - 一 松本隠岐介祇候、弓一張進上、
 - 一 種子嶋殿より使者、吉良六兵衛尉并御狀・馬針老本進上、
 - 一 鹿兒嶋江新納作右衛門尉御使者として、伊集院小傳次兄弟同心にて參上、
 - 一 濱市より吉田作州、秋月殿よりの使者意趣被承、湯豊宿采女正を以被申上候、取次大田吉兵衛尉、
 - 一 与竹平佐江御使者として被參候、今日歸候、

一五位野々百姓參候、ひ酒(ん脱之)卷ッイ、

廿七日晴

一蒲生八幡江御社參巳刻、

一伊勢平左衛門尉所へ御飯御上候、おく様も御出被成候、

一新納作右衛門尉鹿兒嶋へ御使者として被參、今日歸候、

一顯娃より御料人様丑越御着船被成候、

廿八日晴申尅少雨ふり、やかて晴、夜ニ入雨、

一市來妙圓寺より使僧、御樽卷ッ、ミかん入候てつほ卷ッ進上、

一關首座廿五日ニ京都へ打立、鹿兒嶋まで被參候するニ

依御留、今日歸候、

一出水より本田六右衛門尉前より使僧并書狀、伊勢平左

衛門尉迄被遣候、即新納作右衛門尉を以 御前様へ被

申上候、

一秋月殿より使者江理藤右衛門尉、鳥目貳貫文被下候、

めし御振舞候、取次本田助允、相伴同人、

一相良新右衛門尉祇候、

一大寺 召直候、

一川上掃部助鹿兒嶋へ御使者として被召越候、

一山口喜左衛門尉海老進上、

一野村兵部少輔兄弟召直候、

一理心祇候、中紙三束進上、飯御振舞、相伴与竹、御

前にて御酒下候、

一有川淡路守・川崎孫右衛門尉・遠矢下総入道・長野淡

路守・温水豊前守・鎌田九郎左衛門尉・赤塚源太左衛

門尉、御城之儀ニ付而被參候、御前にて御酒被下候、

一如水より之御狀持候て、川添市右衛門尉參着、

廿九日晴

一龍伯様より御使者伊集院伴右衛門尉、

一少將様より御使者竹内織部助、

一白濱七介祇候、ミかんほかいふたニッ進上、右三人へ

めし被下候、相伴新入、

一本田新介・敷祢忠兵衛尉・野村狩野介、めし被下候、

一棚部屋又左衛門尉參候、塩燗百斤進上、

一井尻傳次召なをし候、

一加世田之大坊參候、密柑二鉢進上、

一又五郎殿御參候、圖書頭殿より宮城之地頭爲御祝、太

刀一腰・馬代三百疋進上、

一本田六右衛門尉より使僧養福寺、

一川上掃部助鹿兒嶋へ御使者として被參候、今日夜入歸

候、

一福生寺より永香座首參候、ひん二ツイ・肴有之、

卅日晴

一相良殿より使者宮原大右衛門尉并書狀、即御返事有之、

御振舞候、相伴大田吉兵衛尉、於 御前御酒被下候、

鳥目百疋被遣候、

一健軍猪右衛門尉求广へ御使者として被越、今日歸候、

犬童休矣より 御書之御返事有之、

一伊集院肥前入より水鳥一ツ進上、

一維新様蒲生城へ御越被成候、荒平新城歟そめ有之、岩

切三河入歟そめ候、鳥目三貫文被下候、

一奈須彈正忠所より飛脚進上候、

一鹿兒嶋へ御使者として本田源右衛門尉・一步昨日被參、

今日歸候、

一源次郎殿御上様頼娃より御移以後、始而御出被成候、

樽十二・折十二おく表へ進上、右御上様江紅糸一斤、

御孫上様へ鳥目百疋、御引手物有之、

慶長五年

霜月一日晴

一秋月殿留守居内田傳右衛門尉・板波左京亮、此兩人よ

り使者、板波紹甫・川内山宗律并書狀、則御返書有之、

振舞候、於 御前御酒被下候、取次与竹、牧庵使者宿

元へ樽二ツ・肴御持せ候、

一右同所より使者小薄新兵衛尉起請文持參候、御振舞有

之、取次川上掃部助、

一鹿兒嶋より大宮寺被參候、中紙一束進上、

一光明院御下爲御慶參上候、樽二ツ并鳥目百疋進上、

一山城伊賀守參候、弓二張進上、取次与竹、

一大崎よりさこみつ等心齋御下御慶として被參候、

一少將様御越被成候、御寄合有之、平田太左衛門・鎌田

出雲守御供候、其外御供衆何も振舞有之、

一圖書頭殿被成參上候、鳥目百疋進上、

一有馬次右衛門尉出水より使として被參候、

一竜伯様より御使者伊集院半右衛門尉、

一同御使者相良勘解允、

一日州戸城江御遣候使者酒勾式部少輔歸候、それに相付

肥後内膳亮被參候、御意趣有之、

二日晴

一蒲生へ七月卅日ニ御出之時、鳥目老貫文進上候、有川

淡路より今日持せ候、

一少將様辰刻ニ御立被成候、

一圖書頭殿御歸候、同使者細山田市右衛門尉糸書を以御申候、取次大田吉兵衛尉、

一佐土原平井隼人樽ニツ進上、

一敷祢忠兵衛尉在所之こたく歸候、

一阿久祢之宅右衛門尉參候、樽ニツ・海老進上、

一同所より弥右衛門尉參候、樽ニツ・海老進上、

一同所より源三郎參候、樽ニツ・海老進上、

一野尻より前田次作、此比罷下候とて參候、

一指宿帯刀長出水平佐へ御使として被遣候、今日歸候、

一本田源右衛門尉濱市へ御使者として被參候、

一長野助七濱市江御使者として被參候、

一黒田甲斐守殿より書狀、御返書相良殿使者江御渡候、

一柳川殿より使者鎌戸助右衛門尉、取次本田源右衛門尉、

振舞有之、

一吉祥院御參候、うつら・中紙二束進上、

一竜伯様より御使者税所越前入道、

一柳川殿使者案内者として本田源右衛門尉・新納全入道

鹿兒嶋へ被參候、

四日晴

一新納全入道・本田源右衛門尉鹿兒嶋より歸候、

一伊勢平左衛門尉殿出水へ爲見舞被差越候、

一健軍猪右衛門尉御使として出水へ差越候、

一竜伯様より御使者平野左近允、振舞有之、相伴与竹、

取次大田吉兵衛尉、

一内之浦より日高宗需御下、〔本ノマ、〕よろひとして御樽老ツ、

一人被上候、樽ニツ・密柑進上、取次大田吉兵衛尉、

一富山清右衛門尉子被成、御覽候、中紙二束、取次大田

吉兵衛尉、

一秋月殿より飛脚到、伊勢平左衛門尉殿并披露狀、即御

返書候、

一日向より去川隼人佐參候、猪肢四進上、取次本田小源

五、

一赤塚五右衛門尉參候、樽ニツ・うつら十進上、

一小西作州參上、綿五把・鳥目三百足進上、高城七右衛

門尉、御寄合有之、座大田吉兵衛尉、御取次同人、

一少將様より御使者鹿嶋右衛門尉、

一もゝつきより池上甚右衛門尉はいたか、取次鈴木久致、〔本ノマ、〕

一肥後八代江与竹御使者として打立候、

一京都へ御使者として本田助允打立候、井飯野兵部少輔

殿・山口勘兵衛尉殿・黒田甲斐守殿・福嶋左衛門尉大
夫殿へ御書四通御のほせ候、

一 竜伯様江新納作右衛門尉御使者として被參候、

一 濱市へ伊集院小傳次案内者として新次兵衛尉參候、

一 町田勝兵衛殿御樽二ツ、

五日晴

一 小西作州案内者として、矢野久次富隈へ被參候、

一 加世田より迫坊被參候、御振舞、相伴大田吉兵衛尉、

一 球玖〔本マ〕より使僧地福院被參候、

一 桐野助允京都より罷下候とて參候、

一 是枝次左衛門尉去二日より平佐へ御使として被參候、

今日歸候、

一本田助左衛門尉殿被參候、中紙三束、取次大田吉兵衛

尉、

一 野尻より敷祢越中守前より被申候、高橋殿使者召留置

候、意趣聞ニ、

六日晴

一新納一步濱市へ御使者として被參候、

一 秋月殿より使者内田四郎右衛門尉并書狀、黒甲州より

の書狀相添持參候、即 御返書有之、取次大田吉兵衛

尉、振舞候、相伴取次同人、

一 圖書頭殿より使者細山田作右衛門尉・関善兵衛尉、取
次大田吉兵衛尉・本田源右衛門尉、

一 二皆堂傳右衛門尉出水へ御使として差越候、

一 赤塚源太左衛門尉・山口大藏允、市來城見ニ御使とし

て罷越候、

一 平佐城へ合塩硝百斤・玉五千・いわう六貫目御遣候、

一 上村与左衛門尉加久藤・吉田・曾木使ニ御遣候、今日

歸候、

一 少將様より御使者道祐、取次大田吉兵衛尉、

七日晴

一 鹿兒嶋御稻荷・小城權現江、爲御再興八木廿貳石被成

御拜進候、御使者長野助七、

一 鹿兒嶋寶持院被參候、樽二ツ・折巻、但ミかん進上、

取次大田吉兵衛尉、

一 上床宗圓子息元服候、鳥目老貫文進上、

一 出水へいわう十貳貫目被遣候、使落合作介、

一 平佐へ塩硝二百五十斤被遣候、使右同人、

一 加久藤江合塩硝五十斤・玉二千五百、使柳田助五郎、

一 秋月殿より使僧誓紙持參候、御振舞有之、相伴帖佐彦

左衛門尉、

一 竜伯様より御使者阿多甚左衛門尉、振舞有之、相伴新納奎入道、

一 甌嶋より先給人祗候、取次帖佐彦左衛門尉、

一 濱市より飛脚成廻參着、此方より即新一歩御使者として被參候、

一 鹿兒嶋へ飛脚として、秋永隼人佑被遣候、

八日晴

一 出水へ御使として、山口喜左衛門尉罷越候、

一 眞方八郎右衛門尉平佐へ御使として罷越候、今日歸候、

一 肥田木玄齋平佐へ御使者として差越候、

一 新納作右衛門尉鹿兒嶋江御使として被參候、

一 宮内より下之寺被參候、雜紙三束進上、取次相良藤作、

一 平田新左衛門尉被參候、取次曾木弥兵衛尉、

一 加治木より木佐貫大炊助ひん一ツイ・折沓ッ進上、

一 秋永隼人佑鹿兒嶋へ飛脚ニ御遣候、今日歸候、

九日晴

一 濱市へ閨首座 御使僧として被參候、各へ被遣候知行

目録 御狀相添、山田民部少輔まで被遣候、

一 維新様蒲生之御城之普請御見廻として御光儀候、

一 平佐へ御使として、柴田利介被參候、今日罷歸候、

一 鹿兒嶋へ御使者として、新納作右衛門尉被參候、今日罷歸候、

一 大寺久左衛門尉殿より使にて、中紙二束、

一 北原善右衛門尉之子蒲生にて御覽被成候て、なを被下候、ひん酒ニ對進上候、

一 今度京都より御供被成候人衆へ、知行目録被下候、

一 山伏衆之御祈念始被成候、

十日晴酉烈ヨリ雨

一 本郷作左衛門尉・相良新右衛門尉飛脚を以書狀被遣候、

一 少將様より御使者として、伊勢兵部少輔被參候、取次

本田源右衛門尉、

一 柏原周防介被參候、

一 五代勝左衛門尉飛脚遣候、

一 二階堂傳右衛門尉出水より歸候、

一 求广より使者宮内次郎左衛門尉同心候て被參候、求广

の使者かち木ニ召置候て、帖佐彦左衛門尉出合候て意

趣承候、

一 本郷作左衛門尉より使者兩人進上被申候、取次大田吉

兵衛尉、

十一日晴

- 一 塩屋助右衛門尉御樽二ツ・鳥目百疋進上、
 - 一 相良殿より使者、振舞有之、相伴帖佐彦左衛門尉、
 - 一 無足殿原十六人、種子嶋六兵衛尉以取次、大田吉兵衛尉懸 御目候、
 - 一 竜伯様江御使者として、大田吉兵衛尉参にて候、
 - 一 加久藤江御使者として、市來治右衛門尉被遣候、鉄炮・玉薬・あへせ煙硝十貫目・玉數三千・硫黄五十斤、
 - 一 維新様蒲生城普請御見廻被成御出候、道すから御鷹御遣候、
 - 一 伊勢平左衛門尉殿出水より歸候、
- 十二日雨
- 一 一日置より人數付持参候て、伊地知伊豆入被参候、
 - 一 本郷次郎殿より使者本郷右衛門尉、取次本田源右衛門尉、
 - 一 山田民部少輔知行被下候爲御礼被参候、
 - 一 新納奎入道とミのくまへ御使として被参候、
 - 一 富隈へ御使者として、本田源右衛門尉被参候、
 - 一 大川平將監より猪一圓進上、
 - 一 細嶋より宇多津丹後介被参候、御樽壹ツ進上、

十三日晴

- 一 出水へ御使者として、帖佐彦左衛門尉被参候、
 - 一 須木より村尾源左入使として、鬼塚五兵衛尉参候、
 - 一 出水より本田六右衛門尉殿使として蓮光坊、水俣之のき衆泐脇助六同心にて被参候、於 御前御酒被下候、
 - 一 宗江院隠居・當任参上候、中紙二束進上、此内一束當住、取次大田吉兵衛尉、御振舞有之、相伴鱗齋、
 - 一 新納奎入道御使者として、とミのくまへ被参候、
 - 一 指宿帯刀長日州へ御使として被参候、
 - 一 於総善寺、十日様之御志有之、維新様総善寺へ被成御出候、中紙三束総より進上候、
 - 一 入來衆兒玉弥右衛門尉被召出候、御前にて御酒被下候、
 - 一 京都より長崎隼人佑罷下候、已上下衆五人被参候、
 - 一 少將様とミのくま江御逗留之間、大脇藤右衛門尉飛脚として 御書持参候、
- 十四日晴
- 一 宗江院東堂當住・伴壹人、御振舞有之、相伴新納作右衛門尉、
 - 一 加久藤 御玉屋坊主被参候、御茶進上、取次南郷九郎

次郎、

一 高橋喜兵衛尉參候、

一 大田吉兵衛尉蒲生城へ御使者として被參候、やかて歸候、

一 出水へ爲御使者柏原周防介・山口大藏允差越候、

一 桂太郎兵衛尉殿今度知行被下候爲御礼儀參候、鳥目千

疋・樽四・折三進上、御寄合有之、座伊勢平左衛門尉殿・大田吉兵衛尉、取次同人、

一 福永伊与守參候、樽老・肴一種進上、取次大田吉兵衛尉、今度知行被下御礼儀也、

一 比志嶋紀州より使者、口上伊勢平左衛門尉殿被聞候、

一 黒甲州より書狀ニ、高橋殿之書狀相付被持候、則御返書有之、

一 新納奎入昨日より富くまへ御使被參候、夜入歸候、

十五日晴

一 藤久右衛門尉殿參上候、於 御前御酒御寄合、取次大

田吉兵衛尉、

一 眞幸吉松より篠地但馬介祗候、水鳥老ッ進上候、

一 少將様より御使として、濱市より兼入被參候、

一 蒲生へ御使者として、矢野久次被遣候、

一 白坂七右入道・有馬次右衛門尉、柳川殿使者同心にて

被參候、柳川殿御狀進上候、与竹・有馬次右衛門尉事
ハ、富隈追付被參候、

十六日晴

一 新納作右衛門尉日向外城へ御使として被罷越候、

一 光明坊・明星坊御祈念成就、

一 吉松より田迎次郎左衛門尉、此方より御扱目出度由申候て參候、水鳥二ッ進上、次取宗的、

一 柳川殿より使者鎌戸助右衛門尉、御寄合有之、座伊勢平左衛門尉殿・同兵部少輔、

一 入來院殿御さかしき由、鈴木番左衛門尉此中如水ニ相付候て居候する、今月九日ニはしり參候、

一 柳川殿使者鎌戸助右衛門尉、夕振舞有之、相伴伊勢兵

部少輔・伊集院半右衛門尉・与竹・有馬次右衛門尉、

一 談儀所より使僧教覚坊、般若寺別當坊、莊嚴寺へ可有御住之由被仰候事、則返事有之、

一 白坂七右入道・有馬次右衛門尉富隈より歸候、

一 柳川殿より使者、御意趣被聞候とて、鹿兒嶋より伊勢

兵部少輔、富隈より伊集院半右衛門尉被參候、

一 柳川殿使者与竹・有馬次右衛門尉、御意趣申され候、

一臺所へ 御出之時、種子嶋六兵衛殿鳥目百疋進上、
一市來治右衛門尉加久藤方へ使ニ被參候、今日歸候、

十七日晴

一日向八代光教寺隱居參上候、中紙三束進上、御ふるま
い有之、相伴宗的、

一執印吉左衛門尉被參候、

一鷹師兩人、

一又吉殿御參上候、御樽二、同御ふくろ様御同心にて候、
於奥御寄合有之、御ふくろより御樽二ツ・五貫文進上、

一正天院參上候、ひん酒三ツイ・ミかん折巻ツ・餅折巻

ツ・鳥目百疋進上、取次矢野久次、御ふるまい有之、

一醫者三官參候、

一富隈へ伊勢兵部少輔ニ到而、圓乗坊爲御使被遣候、

一押川河内守參候、かも三・御酒樽二ツ進上、

一少將様より御使者として、濱市より伊勢兵部少輔・伊

集院伴右衛門尉被參候、

一維新様 臺所へ御成候、

十八日晴

一柳川殿使者竈門助右衛門尉、御振舞有之、

一又吉様御歸候、

一坊津より薄屋勝左衛門尉、御下之時分細嶋迄參申候

へ共、其後不參候とて、祇候申候、中紙巻束進上、取

次長野助七、

二皆堂弥六今度知行加増被下候爲御礼、鳥目百疋并ひ
ん酒進上、取次大田吉兵衛尉、

一甕嶋之先給人被召出候、四十卷人有之、取次岩崎藤左

衛門尉、

一柳川殿使者竈門助右衛門尉へ銀子一枚被遣候、取次新
納奎入道、

一伊集院伴右衛門尉濱市之ことく歸候、

一伊勢兵部少輔鹿兒嶋之ことく歸候、

一秋月殿より書狀、山田利安殿前より持せ候、取次新納

次兵衛尉、則 御返書有之、

一柳川殿使者罷歸られ候、与竹・有馬次右衛門尉、又候
使者同心にて、肥州陣へ被罷越候、

十九日雨

一仁王千部開白候、

一曾木ノ座主被參候、茶一ツイ進上、

一出水より清心被參候、中紙一束進上、

一馬越之祝子參候、水鳥巻進上、

一 曾木祝子參候、ひん酒一ツイ并めこ看進上、

一 帖佐十日町之部當、樽壹ツ并鯛一懸進上、

一 於新正八幡宮、衆中下々迄神水有之、帖佐・蒲生・吉

田・山田衆中、在郷衆皆同也、

一 於殿中、右之侍衆起請文ニ血判有之、

一 伊勢平左衛門尉殿宗のへ御茶之湯被成候、

一 圖書頭殿より書狀到、伊勢平左衛門尉殿御遣候、

一 少將様へ御狀、新納弥太衛門尉鹿兒嶋參上候ニ御持せ被成候、

一 黒田如水・井上久左衛門尉殿・秋月長門守殿、右三人

への御返書、圓乗坊持參候て串間へ被罷越候、

一 彦山之泉藏坊同行二人、振舞有之、右山伏今度如水之

格護之下衆めしつれ被參候、爲御礼儀鳥目百疋被遣

候、取次川上掃部助、

一 餅田肝煎子元服仕候、樽壹ツ・鯛一懸進上、

一 加治木より宮原与衛門尉被召出候、取次矢野久次、

廿一日酉魁より雨

一 鹿兒嶋江御使者として、本田源右衛門尉被參候、

一 押川吉藏肥後口ことく罷下候、

一 伊東一藏被召出候、雜紙老束進上、

一 池田石見介子元服仕候、弓一張進上、

一 東郷衆二人罷出候、取次大田吉兵衛尉、

一 菱刈二人罷出候、取次大田吉兵衛尉、

廿二日

一 入來院殿おくより使者入來院大炊助被參候、取次牧庵、

一 志布志より船頭田原乘右衛門尉參候、樽壹ツ・鯛一懸

進上、

一 閩首座求广より歸候、

廿三日

一日向外城へ御使として、指帶刀長被罷越候而歸候、

一出水表へ御使として、柏原周防介・山口大藏允罷越、

今日罷歸候、

一 北郷小兵衛尉被參候、振舞有之、相伴帖佐彦左衛門尉、

一 桃山淨慶・木原但馬入道、住吉之宮見廻ニ御意を

以被遣候、

一日向表へ御使者として、新納作右衛門尉被罷越、今日

歸候、

一 志布志より船頭彦兵衛尉名を被下候、樽一ツ進上、取

次大田吉兵衛尉、

一 赤崎平馬允參候、御振舞、相伴帖佐彦左衛門、取次大

田吉兵衛尉、

廿四日雨

一南郷覚右衛門尉飯野・加久藤へ爲 御使被召越候、

一鹿兒嶋へ 御使者として、新納弥太衛門尉參上候、

一濱市へ 御使者として、新納次兵衛尉被參候、

一少將様のおく様より御使者萩原、御樽四ツ・鯛一懸進

上、御樽二ツ・鯛一掛、おく様へ進上、

廿五日晴雨子烈より雪

一維新様 総善寺へ被成御出候、

一寺師勘解由入道三男名を被下候、弓一張進上、

一伊集院より梅学寺參上候、瓶酒三ツイ・ミかん一折進

上、御振舞有之、相伴大田吉兵衛尉、

一肥後より与竹・有馬次兵衛尉歸候、追付濱市へ被參候、

一圓乗坊串間より歸候、

一泉壽庵不動千座成就候、

一於臺所注連百本御立、おく様より御調にて神舞有之、

平松之上様・源次郎殿上様、何も被成御見物候、

廿六日晴

一北郷久次郎殿參上、樽二ツ進上、

一於書院伊集院源次郎殿御茶之湯被成候、座伊勢平左衛

門尉殿・紹佐・一和、

一野村久右衛門尉子名を申上候、餅一折・樽二ツ・中紙

二束・鯛一懸進上、取次大田吉兵衛尉、

一志布志より小川千介參候、ミかん一鉢進上、

一平田美濃入道殿參上候、中紙三束進上、取次新納作右

衛門尉、御寄合被成候、座紹佐・一和、

廿七日晴

一維新様蒲生城普請御見廻ニ被成御出候、

一柚木崎次郎右衛門尉參候、中紙二束進上、

一与竹濱市より歸候、

一新納弥太衛門尉鹿兒嶋より歸候、

廿八日晴

一穎娃弥一郎殿今度知行加増候御礼として參上候、鳥目

二百疋進上、

一川崎兵衛門尉被參候、樽二・纏ふし廿進上、右兩人へ

御振舞候、相伴紹佐、

一狗留孫座主被參候、中紙二束進上、

一鹿兒嶋より祖護藏主被參候、瓶酒二ツイ進上、

一惠环首座被參候、瓶酒三ツイ進上、右兩人へ御振舞有
之、

一寺澤殿へ 少將様之御使者として、善哉坊被遣候、罷歸候とて參上候、

卅日晴

一鹿兒嶋へ御使者として、新納一步被參候、

一琉球よりの使僧前より使被上候、御振舞有之、

一新納武藏入道殿參上候、鳥目百疋進上、御寄合被成候、座紹佐・高城七右衛門尉・伊勢平左衛門尉、

一本田与兵衛尉今度知行被下候爲御礼被參候、鳥目二百疋進上、

一曾木光徳寺より使僧茶一ツ進上、

一岩切雅樂助右同爲御礼參上候、鳥目二百疋進上、

一吉松より新穂參候、木ノ子一折進上、

一鎌田次右衛門尉右同爲御礼被參候、鳥目二百疋進上、

一大嶋久左衛門尉被參候、鳥目百疋進上、取次本田源右衛門尉、

一白濱七介今度知行被下候爲御礼被參候、鳥目二百疋進上、

一南郷寛右衛門尉眞幸より歸候、

一帖佐八幡座主より 稻荷御祭礼之御花から使僧を以進上、

一種子嶋殿より使者、同彈右衛門尉被參候、鉄炮二丁道具相揃進上、取次矢野久次、但此使むかさのことく罷通候、

廿九日晴

一新町より御道具衆三人罷出候、取次大田吉兵衛尉、

一竜伯様より御使者阿多源右衛門尉、

一新納助右衛門尉、此中爲御使者長宗我部殿へ被遣候、

一蒲生城普請衆へ御酒被下候、御使者大田吉兵衛尉、△

罷歸候とて被參候、

(▽△部分へ「日」記ヨリ補充セリ)

一楠本中村より、 取次野村早右衛門尉、

一少將様御使者として、川上日向守、御振舞有之、

一善哉坊濱市より御用候とて、又候被參候、

一於書院 御茶之湯被成候、座紹佐・一和・伊勢平左衛

門尉、

(表紙)

義久公
義弘公
家久公
自慶長五年冬
至同六年春

後
編
舊
記
雜
錄
卷五十三

1410 「圖書頭忠長譜中」

割於 太守之公領賜新恩地、其目錄曰、

1411 加增目錄

薩州祁答院之内

山崎村

高七百廿七石貳斗貳升九合貳夕

指宿十九町

浦之門

高五拾八石四斗七升八合四夕

指宿十九町

尾辻之門

高百五拾七石一斗八合八夕

同所

下吹越之門之内

高五拾七石貳斗

惣合千斛貳升

右知行、爲御加増被差遣候也、

慶長五年十二月二日

鎌田出雲守

政近(花押)

比志嶋紀伊守

國貞

平田太郎左衛門

増宗(花押)

(念見)
圖書頭殿

1412 慶長五年庚子賜祁答院、故同十二月中旬、去東郷、與息

男河内守忠倍俱移于宮城也、

1413 「北郷忠能譜中」

關个原以後、 忠恒公御上洛、忠能祈 公安泰言上其旨、

依茲賜御書、有正文、左記之、

1414 爲見廻、早々一人被差上、殊我等上落ニ付而、祈念被相

企候哉、大慶之至此事候、仍爰元仕合之儀、弥無別儀候間、不可有心遣候、内府様も必年内御上國之由候条、

御目見得相濟次第、追々吉左右可申下候、將又卷物壹端

爲音信到來、是又令祝着候、恐々謹言、

十二月四日

(家久) 忠恒(花押)

北郷次郎殿

1415 「御文庫拾六番箱十卷中」

起請文

一奉對 竜伯様 維新様 少將様、無吳儀御奉公可申上

事、

一縱親類中萬一逆心之者於有之者、則致言上、可抽忠節

事、

一自然愚拙身退付讒者之時者、御糺明可蒙仰事、

右之旨於僞申上者、

(牛毛) 起請

奉始上梵天帝尺四大天王、下堅牢地神冥官等、惣而日本

六十余州大小神祇勸請諸神、別而當國擁護開門正一位

新田八幡大菩薩 當所鎮守諏方上下大明神并稻荷大明神

隅州正八幡大菩薩、殊者霧島六所大權現 愛岩山大權現

天滿大自在天神御部類眷屬、各各神爵冥爵可蒙罷者也、

右起請文如件、△

慶長五年庚十二月五日

子

村田藤五郎

經永(花押)

平田与九郎

宗敏(花押)

進上 川上日向守

〔本ノマ、〕

1416 「御文庫拾六番箱十卷中」

天爵起請文

一就今度御弓箭、奉對 竜伯様 維新様 少將様、毛頭

無貳心御奉公可仕事、

一先高麗入之刻、至 維新様幸侃言上之趣、對幸侃可致

一味由、血判ニ而元巢申合候旨、被遂披露候哉、曾以

我等無其儀事、

一親子骨肉雖爲同抱、謀叛仁於有之ニ者、則可申上事、

一從他方不審成廻文之時者、不開緝可差出事、

一就倅進退讒言之族可有之砌者、速ニ被仰聞候者、愚意

「長谷場氏文書」

又可申上事、

右之条々若於僞申上者、

▽^(牛志)奉始上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神、惣日本國中六十

餘州大小神祇、別當國鎮守開門正一位 新田八幡大菩薩、

殊當所擁護諷方上下大明神 戸柱 稻荷 春日 若宮勸

請諸神 愛岩山大權現 大天狗 小天狗 天滿大自在天

神、各身上神爵冥爵可罷蒙者也、仍起請如件、△

慶長五年庚子十二月

伊集院肥前入道

元巢(花押)

伊勢平左衛門尉殿

山田越前入道殿

圖書頭殿

「義弘公御譜中」

「正文在水引泰平寺」

大少路村之内、合佰五石、如先規不混于他、令寄附之訖、

慶長五

十二月八日

嶋津兵庫入道

維新(花押)

泰平寺

「長谷場氏文書」

惣合二百四拾石

右知行、爲加増被履行者也、

慶長五年十二月八日

鎌田出雲守

政近(花押)

比志嶋紀伊守

國貞

平田太郎左衛門尉

増宗(花押)

圖書頭

忠長

長谷場越前守殿

『在官庫』

尚々兼々沙汰候へ、日本之實否今度之一戰ニ究候様

ニ申候處、神變不思儀之武運候、

十一月二日之御狀髓來着、巻飾數返令對顔思候、助丞・

中原坊被差上被及御理忍、近比珍重候、雖不應御存分之

事候、御思維^(マツ)而、少將江茂被加御吳見、國平安之御分

別肝要候、就其其國之衆依不思儀之仕合、于今我々方へ

(本文書ハ一四一九号文書ト同文ニツキ省略ス)

堪忍候、寒天之時分、不如意之躰咲止千万候、各茂下國

之事大望候得共、内府江得内儀茂事難成候而、時日押

移事候、委曲中原坊可申候、かしこ、

十二月十日

(信尹) (花押)

龍伯

1421 「御文庫廿二番箱八卷中」

京都不慮之就出合、其後無音心外候、仍於貴院當國之價
衆六人致開壇候、雖然依有子細、門中令異儀候処、愚老
存分申達、國元之開壇同前用儀候、爲我等大慶候、先々
最前之爲首尾如此候、將又沈香二斤令進之候、誠補心緒
計候、恐々、

極月

「義久公御案文ニテ御宛書ナシ」

1422 「本田氏藏」

大隅菱刈徳邊村之内

一 前原之門

松崎 中田九畦 老斛八舂 玄蕃助
同所 中田三畦六步 三斗八舂四合 同人

同所 中田式拾八步 老斗老舂式合 善四郎

同所 中田式拾四步 九舂六合 同人

松崎 上田六畦 八斗四舂 善四郎

同所 上田一段拾五步 一斛四斗六舂九合 同人

堂田 下田一段三畦九步 一舂三斗三舂 前原

同所 下田三段五畦 三舂五斗 善四郎

同所 下田六畦廿步 六斗六舂六合 前原

堂田 下田一段四畦九步 一斛四斗三舂 前原

同所 下田式拾四步 六舂三合 同人

同所 下田八畦式拾步 八斗六舂六合 同人

同所 下田老段五畦 老斛五斗 善四郎

同所 下田老段 老斛 同人

堂田 下田拾五步 三舂三合 金兵衛尉

同所 下田四畦拾五步 四斗三舂三合 善介

同所 下田式段拾式步 式斛三舂九合 同人

同所 下田五畦式拾四步 五斗七舂九合 同人

越藏 上田老畦式步 老斗四舂九合 助次郎

同所 中田二畦三步 式斗五舂二合 同人

同所 上田老段四步 老石九斗六舂 前原 玄蕃

同所 中田老段三畦廿六步 老斛六斗六舂 同人

同所	下田廿七步	八舛九合	馬越之
同所	下田拾貳步	三舛九合	同
嶋追	中田壹畦廿七步	二斗貳舛二合	玄番丞
同所	上田五畦三步	六斗三舛四合	同人
同所	中田九畦拾四步	壹石一斗五舛二合	同人
越藏	下島五畦拾步	三斗二舛	清右衛門
同所	中島廿六步	六舛五合	玄番
同所	上島一段拾二步	壹斛四舛三合	同人
同所	下島八步	壹舛六合	前原
同所	下島荒六步	三合	同
越藏	上島六畦二步	六斗六合	前原
同所	中島三畦廿七步	三斗一舛一合	玄番丞
同所	下島四畦十步	壹斗六舛	玄番丞
同所	中島荒一畦三步	八舛	同人
前原	上島五畦拾一步	五斗三舛六合	前原之内
同所	下島六畦	三斗六舛	玄番丞
同所	下島廿四步	四舛八合	前原之内
			善四郎
			玄番丞

合田方廿三石五斗八升壹合

田島屋敷合式拾八斛五斗二舛貳合

徳邊ノ内浮免

野中田

下田

中田

合田方

下島

中島

上島

下島

合田

1423

「義久公御譜中」

(本文ハ一三三八号記事ト同文ニシキ省略ス)

同所

七舛二合

三舛九合

貳舛

一石二斗六舛貳合

合島高屋四斛九舛

壹石一斗五舛二合

貳斗貳舛二合

三斗二舛

六舛五合

壹斛四舛三合

壹舛六合

三合

六斗六合

三斗一舛一合

壹斗六舛

八舛

五斗三舛六合

三斗六舛

四舛八合

三斗六舛

四舛八合

同人

同人

同人

前原

同人

同人

同人

助三郎

甚拾郎

前原之内

次郎四郎

九舛貳合

壹斗八舛

貳斗八舛

壹石壹斗一舛

壹石壹斗一舛

壹石壹斗一舛

壹石壹斗一舛

壹石壹斗一舛

壹石壹斗一舛

壹石壹斗一舛

壹石壹斗一舛

壹石壹斗一舛

伊勢平左衛門尉

本田勝次郎殿

慶長五

拾二月拾一日

日

「正文有之」

(本文書ハ一三三九号文書ト同文ニツキ省略ス)

『入来院氏臣入来院直記載』

寛条々

「義久公御譜中」

「案文在本田助之丞」

天爵起請文之事

一今度於上方不慮ニ生捕ニ罷成、當國御變之儀ニ付、度々往返仕候、然者御家之御爲可惡儀、内外共ニ曾以不申候、向後も申間敷、勿論京都にて計策之儀、少茂不被仰聞候、又々罷上候而、計策之儀承候、其請付申ましく候事、

一慶長四年十二月、犬童仁兵衛殿と申人御使として御通被成候刻、魚塩之荷物七十荷御通シなされ候、
一慶長五年二月十六日ニ、吉左衛門尉と申者求广従走来候、就夫使僧三度被指越候、
一同九月十日ニ、中嶋源五郎と申者、馬関田よりくまへはしり申候間、使僧壹度遣申候、
一雪月七日ニ、求麻從帖佐へ御使僧參被成、歸さニ魚塩七荷通なされ候ヲ、加久藤衆岩崎後藤と申人參合候て留申候、

一爰元御弓箭ニ罷成、自然上方ニ被召留、急ニ下向雖不罷成候、他之主人ヲ頼申間敷候事、

一同十六日ニ、馬越之有馬与介と申人しお少被通さ候、是又留置申候、

一竜伯様 惟新様 少將様御奉公之外、向後別心を不可存候事、

慶長五年雪月十八日 入来院弓市(花押)
右之書物鹿兒嶋へさし上申候付、湯尾へ一ツ上置申候留也、

右旨若於僞申上者、

「義久公御譜中」

「案文有之」

(本文書ハ一四二一号文書ト同文ニツキ省略ス)

「鹿屋氏文書」

加増目錄

日州諸縣之郡志布志安樂村

勢園之門

高拾三斛六升一合六夕

江園門之内

高拾斛六斗三升九合

浮免

高式斛五斗

惣合二拾六石二斗

此内ニ返地拾六石二斗籠候、

右知行拾石、爲加増被宛行者也、

慶長五年十二月十八日

平田太郎左衛門尉

増宗(花押)

比志嶋紀伊守

國貞

鎌田出雲守

政近(花押)

圖書頭

忠長

〔御文庫廿二番箱八卷中〕

(本文書ハ一五九三号文書ト同文ニツキ省略ス)

〔義久公御案文也〕

1430

〔御文庫廿二番箱八卷中〕

敬白起請文前書之事

一龍白・同少將殿御身命之儀 □□御座有間敷事、

一御國之儀ハ兼日如御約束、相違御座有間敷事、

一兵庫頭殿御事、右之御兩所御 □□之上者、無相違様御

取成可申候事、

右之趣於違背者、

右梵天帝尺四大天王、惣而日本國中六十余州之大小之神

祇、別而伊豆箱根兩所權現 三嶋大明神 八幡大菩薩

天滿大自在天神部類眷屬、神罰冥罰各可罷蒙者也、仍起

請文如件、

本多佐渡守 (正徳) 在判

山口勘兵衛尉 (寛文) 在判

嶋津修理大夫殿 (義久)

羽柴少將殿 (家久)

〔此書写也、年月日ナシ〕

1431

〔御文庫四拾九番箱中 三卷〕〔義弘公御譜中正文在新納仲左衛門忠雄中〕トアリ

態以使者申入候、仍拙者事筑前致拜領、當月上旬入國

仕候条、令啓上候、

一御身上之儀ニ付而相良・秋月下國之刻、從大坂以書中申候処、兩通御返書拜見仕候、然者御家之儀、我等式御指南申儀如何ニ候へ共、從先年申談儀者、かやうの節推量をも申、又者可得御意ためと存知申合たる筋目候条、不殘愚意申入候、急度井兵少以御侘言御尤候、於様子者鳥井勘左衛門尉ニ申合候、從最前使者可進之候へ共、兩人者相煩、一人者上方ニ在之候之間、此使者進入候、高麗以來色々様々御座候へ共、拙者式などハかりそめも表裏別心無御座候事、貴老洩底御存知之候候条、只今も無御疑、此者口上被聞召届、御分別候て、早速對 内府様、御懇望專用ニ存候、

一先度於豊前表、此方へ取申候舟之乗衆、返し可進之由候て、書立被懸御意候、拙者手前ニ在之者老人女式人男、都合三人進之候、相殘分者 内府様へ上り申候間、是者致才覺自跡可進入候、如在存間敷候、

一龍伯・又八殿へも以書中申進候、是又御届頼存候、猶追々可得 尊意候間、不能委細候、恐惶謹言、

〔朱書き〕
〔慶長五年〕
十二月廿三日
黒田甲斐守
長政

羽兵入様
人々御中

猶以御兩三人へ、從井兵少以書狀被申達候、御報所仰候、以上、

1432

『大口丸田氏藏』

猶々案内者として、加藤式部左衛門殿雇候てはいかゝ候はんや、但大彦入へ万談合肝要候、

態令啓候、馬越之前目を御加増拜領仕候、明後日廿六日

ひのへさるの日、吉日にて候、ミ・むま・ひつし此時よく候、さてハ大田雲雪頼存候、不知申候、日記付ニ窪兵

太可被申付候、案内を大嶋殿へ番衆老人被遣可被申入、

專一ニ可罷歸、巨細可承候、万吉、謹言、

〔疑慶長五年〕
十二月廿四日
〔粟祐久道元心〕
丸田久右衛門尉殿
〔再補大口地頭時々〕
拙齋
爲舟(花押)

1433

〔義弘公御譜中〕

〔正文在本田助之丞〕

覚

一爲御使本田助丞被差下御礼之事、

一最前御企之御談合曾不承事、

一其涯ニ成、從御奉行中可致同心由兩度承候へ共、不罷成由不通申切候事、

一其后御奉行中奉對 秀頼様、永々可遂御奉公爲證跡、

度々靈社上卷上置候、然時者同心仕候へてハと強而承

ニ付、不及了簡、任御下知候事、

一大坂へ被召置度由申上候事、

一又八郎可致上洛之由、從御奉行中度々被仰下候へ共、

令延引候事、

一肥後境之事、

一伊東手切之事、

以上

「年月ナシ、昔年ノ写ニ、朱書慶長五年義弘ノカキ入アリ」

「本田助允案文」

急度令啓上候、

一今月十六日大坂致出船、夜前日州ミ、の津へ參着仕候、

然者其元御無事之始末ニ付、井伊兵部少輔殿より御使者

勝五兵衛殿、山口勘兵衛殿使者和久甚兵衛、兩使被成

下向候事、

一薩隅之事別儀有之間敷之由候、諸かたの儀ニ入組御坐候、今度京都之御返事ニより候て、急度山口勘兵衛殿

可被成下向候、其刻 竜伯様御上洛中然々由候事、

一維様御逼塞之儀、此度京都之御仕合ニ罷成候、然者右

御使者御下向候間、御分別尤奉存候、殊ニ御意下之通

細々井伊殿へ申入候、併此節事ハ遠嶋などへ被成御堪

忍、後日御理被仰下候て可然之由候、一段井伊殿御懇

之様ニ候、今度御退被成候始末無比類、御ほうび以之

外候、向後深重ニ被仰談儀候由、内々被仰候通及承候

事、

一御家中之儀、今度於京都つよミをのミニ申候付、連々

被思食候筋をも被相替、御爲可然様子ニ候之通ニ傳承

候、弥御普請其外御弓箭之御催、可爲肝要かと存候、

此度兩使御下向被成候儀も、早竟御國之様子爲御見聞

被指下候へんやと、尤推參存候、就夫右兩使之御意趣

等、何方にて可被聞食候哉、「本マ」上た次第たるへき由、富

城江得御意候事、

一會津表之使へ、いまた相濟不申由候、其外諸所ハ大方

すミ候由候事、

右之通早々參候而申上度候得共、御使者中途無馳走ニ被成候而者如何候、其上京都ニ而堅御同道申遣候由、被仰聞たる首尾ニ候間、今於見合候て理申分、与風籠通へく候、先以此等之趣可然様ニ可被仰上候、恐々惶謹言、

〔慶長五年十二月廿六日之狀ならん、案文故宛書無之〕

1435 「本田助允案文」

急度令啓上候、仍今度御無事之儀被仰登候ニ付、井伊兵部少輔殿・山口勘兵衛殿ヲ兩使被成下向候、今月十六日ニ大坂出船候て、昨日廿五日日州ミ、の津へ參着被成候、御急之儀候間、追付其表江可被成御越候由候、早竟兩使御下向之儀ハ、御國元之様爲見聞被指下候へんやと、尤推參存儀候、扱者於頭方ニ御意趣等をも可被聞食候哉、將又路次筋之儀も、御下知次第案内者可申覚悟候、早々御返事可被仰聞候、萬一於御延引者、霧嶋を者直ニ富隈へ御越たるへく候、爲存知候、兼又薩隅之儀者、別儀有之間敷之由候、諸かたへ入組御坐候、今度京都江之御返事ニより候て、追付山口勘兵衛殿可被成下向候、其刻竜伯様御上洛可然之由候、然時ハ右兩使へ被相添、急度

然々御使者兩人程可被差登由候、俄之儀候間、左様之御使者無御油断御合点尤候、右之外御心遣可被成儀無之候、此度京都之様式承合、御家中之御覚悟之段つよミをのミに申候、就夫連々被思食候筋をも被相替、御爲可然様ニ罷成候かのよし傳承候、然間弥御普請其外御弓箭之御もよをし、就中此節肝要ニ存候、猶追々可得御意候、恐々惶謹言、

〔慶長五年十二月廿六日之狀ならん〕

1436

「御文庫四拾八番箱中」〔義弘公御譜中ニ在リ〕

猶々御意趣可被仰仁之事ハ、よく御念入候へてハにて候間、龍伯様へ得御意候、其元へ御談合候て早々被仰越、御兩殿御談合次第、此方可申付由申上候間、定御方へ可被遂御熟談候、被仰越次第、使申付可差遣候、

尊礼拜見奉得其意候、般若院・本田助丞罷下候由、昨日從富隈御注進候而、右兩人書狀共到來候間、先伊井兵・山勘よりの使者へ辛勞之段爲可申、今朝早々竹内織部助差遣候、從龍伯様野尻へ彼使をも可被召留由候て、被仰越之由候間、いよ／＼さやうに候て可然候由、追々申

1437

遣候、如御書面和久甚兵事者、去年以來知音之方共御座候間、互使へ出入共候て不可然候間、其段も入念申遣候、猶以其心得可仕候、恐惶敬白、

〔朱カキ〕
慶長五年十二月廿九日 忠恒(花押)

維新様
尊報人々御中

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶々本助状に見得候和久甚兵衛と哉らん者、去年當國へ罷下知人共候而、使なとも指越國中之趣を可申と存候まゝ、然々成人を番ことに、上方之使に被付置被仰付候人々之外に、出入仕候ハぬやうにかたく可被仰付候、不始事ながら談合に出合候儀共、いつも〳〵首尾申候ハぬ事笑止之至候、第一先度も申候やう、上方之使ニハ、躰により引物なども可入事ニて候間、由断者有間敷候へ共、猶以可被仰付候、乍重言右申候番衆の事、必々可被仰付候て可然存候、とかくある中に方々より使など可指出と存候、何事も〳〵後たち申候、とかく般若院・本助丞兩人に、一人ツ、ハしかと上方之使ニ被仰付置へき事、肝心

1438

たるへく候、

伊井兵部殿・山口勘兵殿より使者被指下候ニ付而、般若院・本田助丞同道ニ而罷下之由、書状を以申越候間、就御分別も入へきと存、則状を写進之候、然者右兩使之事、定而今日邊者程ちかく可被參と存候、餘うちはへよひ入られ候ハぬやうニ、從是中途まで兩人ほと被指出、先早々意趣を御聞せ候て可然存候、乍不申いつれの道ニても餘無馳走存候、さやうに可被仰付事尤に存候、不可有由断候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
慶長五年極月晦日 維新(花押)

少將殿
床下

〔御文庫四拾八番箱中〕

(花押) 〔維新公御判也御名ナシ〕

追而申候、幸出水へ御越之儀ニて候間、衆中共被召出、掟など被仰聞候て可然存候、就其從是も大形書付進之候、此外にも勿論御思案を以被書加可被仰出候、乍不申多分如此之事者使悪候へハ、申残など仕候之間、兩人ほと然々成人を以可被仰聞候、

意趣ニ、御座所などの人ハ毎朝致出仕、又者方ニ、御供御使等誠ニすえひまなく候
 一 所々番普請等無油断相つとむへき事、
 如シ、外城之者共者別之奉公無之候之間、賣而番普請を無續相つとむへき事にて候、
 一 大酒仕る事、

一 旁輩中別而致念比引あひ候事、付私之遺恨を以取分間
 悪敷事、

一 一向宗ニ罷成たる者ハ、たとひ其身不存科成共、誓紙
 を以申はる之儀者罷成間敷事、

一 喧嘩口論之事、

一 所中之儀を他所之人に洩申間敷事、

一 自他國之物沙汰承付儀共於在之者、実不実によらず、

役人迄速ニ披露可申事、

一 女方に不取亂やうニ可相嗜事、付男之留守ニ無用捨立

入へき儀曲事之事、

一 其仁々を見計、相當之儀被仰付処に侘かましき事、

以上

少將殿

まいる

「此御書、慶長五年迄ト張紙アリ」

「義久公御譜中」

(本文書ハ一四一六号文書ト同文ニツキ省略)

「御日記」

慶長五年庚子十二月廿七日

天晴

一 御旧例之御煤箒、撰良辰向歳徳神之方ニ、坂本對馬守
 定役ニ而箒初也、

一 鹿兒嶋之衆徒御祈禱之卷敷進上、奏者相良新右衛門尉、

於宿所ニ被請執、近習衆に被渡、荷内衆 共言 旧規ニ者寺社

奉行被申次候を、當時其役依無之如右矣、

廿八日

天晴

一 福昌寺曆軸之御礼被申、其時大門被開候、然共從大門

者不被入候、常之門より被入候、御茶參候、御前も上

り候、奏者伊勢兵部少輔、次に南林寺・興國寺被出、

茶不被給、御對面ニ而退出候、

一 三ヶ寺へ被成歳暮之御礼候、一番福昌寺、二番大乘院、

三番淨光明寺、福昌寺ニ而者、小飯上り候、川上殿御

相伴ニ被參候、老中一人被出座候、當年者平田太郎左

衛門尉被參候、憩月之亭ニ而御參會、勸盃之興共潜ニ

候、衣鉢侍者韋駄天之前まで罷出賞申候、住持者玄関

まで被出向招請候、旧例如此矣、談儀所ニて点心上り

候、御酒三返參候、御相伴衆上ニ順ず、道場ニ而も点

心上り候、別時の勲行被修ニ付而、雖爲禁酒 御光儀

故住持も御酒被勸、寮者衆被罷出御酒被給候、例年者

廿五六日之比、右之三ヶ寺へ被成歳暮之御礼候を、當

年者富之隈へ 御越ニ付而、此日御出候、

廿九日

天陰

一老中諸侍古曆之御慶被申上候、

一談儀所諷方之座主衆徒いづれも御慶被申上候、談儀所

法印へへ菓子ニ而御茶參り候、其外者御對面計ニ而被

退候、

一冠岡大性院住持職案堵被申祝儀被申上、兩寺共ニ御礼

錢百疋宛進上、源長坊摩利支天領被下御礼式白麻進上、

否笠刑部少輔子息名を被下、樽肴・鳥目式百疋進上仕、

此日、

一京都より松平内大臣家康公之御内伊井兵部少輔殿・山

口勘兵衛尉殿の兩使者下向候、伊井殿のハ勝五兵衛尉、

山口殿のハ和久甚兵衛尉と申人ニ而候、當家御内衆顯

姫主水佑・白濱三四郎其外侍余多下國仕候、京都之兩

使者ハ日州あや之里にて年を被越之由注進候、御内衆

者此日かこしまへ下着候、

慶長六年辛丑正月朔日

天晴

藤原朝臣少將忠恒薩州鹿兒嶋屋形年甫之御旧例

元日庚子最前小板屋ニ御出候而、被成裝束年男御櫛初

申、御冠被整御對面所へ御出候而、時之奉行衆被懸御

目、其より廣間ニ被成御出、諸面々町田・村田・上井

・本田何れ茂被懸御目、年男なけしより奏者被申、諸

侍ハ伺候所ニ候を被成御覽候、從其五社參り候、一番

諷方大明神ニ而者御三献參り候、御太刀一腰・散錢百

疋御拜進、二番戸柱御三献參り候、散錢百疋御拜進、

太刀者不參候、三番稻荷御三献參候、散錢百疋御拜進、

四番春日御塩參り候、三献者不參候、散錢百疋御拜進、

五番若宮御塩參り候、散錢百疋御拜進、御一家諸侍不

殘御供被申、直ニ御祈念所之不動へ御參候、御しほ參

候、拜進百疋、次ニをくニ御入候へば、各退出被申候、

一奥ニ而御三献參候、式三献也、續而御節供參候、先御齒

堅目の餅上り候、次ニ御茶上、宮仕者もろかうの童部

衆仕候、次ニ力御臺山之御臺御節供大御臺也、式之膳の
汁參候之間、筋被食樣ニ候、次に、

一 御對面所へ御出候而、老中衆へ三献御寄合候、三肴也、當年者平田太郎左衛門尉・鎌田出雲守被有合被給候、

一 鹿兒嶋諸面々御太刀進上之衆、平田殿・鎌田殿・桂殿

・村田殿・上井殿・町田殿・伊勢兵部少輔・白濱次郎

左衛門尉・相良新右衛門尉、此等之衆也、

一 鹿兒嶋諸侍境飯進上、樽三十棹ニ懸り候、十二合海山

者不參候、椀飯之樽御簾中へも參り候、御祈念所へも

參り候、旧例には、元日之椀飯を伊地知家より調進被

申候へ共、當時者伊地知家衰微ニ付而、如右之伊地知

家より被調候時者、種々の儀式雖有之、近年者被略之、

椀飯の儀式左ニ委記スル也、晚景之御節供如前矣、

二日辛丑 大雪

一 夙ニ小板屋ニ被成御出、冠裝束有テ對面所へ御出、河

上上野入道出仕、例者式三献被給候得共、爲隱居故、

三肴ニ而御酒被給候、御礼錢百疋進上、次ニ阿蘇玄与

出仕右同、次ニ入道衆皆々被指出、人ニ寄三肴・削物

にて御酒被給候、當年者如右、

一 福昌寺へ御光儀、御劍年男被仕候、先客殿にて御三拜

を被成、次ニ菓子ニ而御茶上り候、次ニ鵝月へ御座を

被移御會尺、御相伴河上殿出座被申候、老中一人被出

候、當年者平田太郎左衛門尉出座候、御香典百疋被進

之候、寺よりも扇進上、老中へも扇子被進之候、次ニ

修正之御案内候へば、佛殿へ御參り有テ、大般若被成

頂戴候、大般若之箱をハ衣鉢侍者持而被參候、御疊を

ハ鎌田名字持來候而敷候、其より十文字之小路御歸駕

候砌、

一 町之別當罷出、定舞臺ニ而御目見え仕候、鳥目式百疋

進上、次ニ奥ニ御入候而御節供如常、晚景も前之日ニ

同シ、昔者此日伊地知館へ被成御光儀、種々の御遊興

すわう引なと候由、古キ日記ニ見え候、其外委儀式共

雖有之、是を不註候、

一 伊集院より御雜餉進上、三献目之時地頭被指出御かわ

らけ被下候、其より諸侍召出御酒御とをり給候、沙汰

人も罷出御酒被下候、昔者長命と申猿樂罷出音曲など

唄、樽筒拜領仕候由、古キ記シ物ニ有之矣、

三日壬寅 天晴

一 桃殿・颯娃殿出仕、三肴ニ而御酒被給候、

一 龍伯様より御使者、御太刀被成進献候、使節吉田美作

守三肴ニ而御酒給候、使者鳥目百疋進上、

一 御弓始有テ、御三献削物參候、諸侍何れも弓仕、御酒

被下候、

一 京都より般若院・本田助丞罷下候、伊勢兵部少輔殿より書札并御服五ツ被進之候、田邊屋道与茶壺一ツ、但宇治茶之つめ致進上候、

一 節分之椀飯又かたゝがへのわうはん共云、任旧例指宿より調進、當地頭

鎌田出雲守被相調候、地頭出座被申候、三献目之かわらけ地頭被始候、其より諸侍召出御酒給候、御唄初有テ御さかもり候、一和笛など仕種々御勸盃之興を被催候、椀飯のかきり如例、御座すぎ 御前もをくへ御入候へば、年男ニ三献地頭被寄合候、同朋衆も同座候、旧例にハ此日市來より之御雜餉參候、其時も御座之儀式如前矣、

一 維新様より御使者、御太刀被成進献候、使節本田源右衛門尉三肴にて御酒給候、

一 百次・隈之城・山田より御雜餉參候、

一 をくにて麦の御飯上り候、かたゝかへの儀式也、

四日癸卯 天霽

一 談儀所御參、對面所ニ而被成見參、談儀所ニ者菓子ニ而御茶上り候、次ニ御点心參候、御酒三返參候、諷方之座主も出座候、衆徒何れも召出御酒給候、諷方之大

夫御供持テ參候、大夫にはなけしの内にて御かわらけ被下候、内侍も罷出なけしの内にて御對面仕候、其より福昌寺へ 御光儀、老中鎌田出雲守出座被申候、少將様も礼問など御沙汰候、寺僧皆々新年頭之仏法被申合候、樽一ツ浴司へ被遣候、風呂ニ者御入候事も候、多分者無御入候、座頭など有合候へば、平家一節など申事も候、左候へば、折紙を被遣候、御歸駕を待居候而、御百姓衆庭上ニ而御見え仕、諸職人伊集院之町衆定舞臺ニ而御見え申候、此日山伏衆出仕候、向之嶋衆罷出候、伊集院源二郎出仕、太刀進上、三肴ニ而御酒被給候、

五日甲辰 天晴

一 福昌寺御參、威儀ニ而被成御對面候、先菓子ニ而御茶參候而、廣間ニ而威儀を被直候、其間ニ南林寺・興國寺被指出候、福昌寺掛落ニ而又出座有テ点心參候、天目ニ而御酒上り候、二献目を福昌寺御初候、當年者南林寺・興國寺同座ニ被參候、興國寺者無出之晩達にて候へ共、福昌寺御伴の僧一人必御座ニ被出候、其代として出座被申候、平僧者無其例候之間委註之、福昌寺御退出之時者、屋形様次之座ニ而一送被成候、御出

之時も次之座まで被出向被成招請候、年男者庭上まで罷出請被申候、御相伴ニ者老中一人被出座候、當年者平田太郎左衛門尉被出候、常者誰そ一兩人も出座候、入道衆などにも有之由候、

一御馬乗始被成候、口添ニ者御既之別當立申候、御鑑をば年男をさへ申候、御既別當御かわらけ給候、昔ハ此日御犬始有之由申傳候、御犬之時者、御三献ニ口傳共候欝、只御馬召初之時者、三肴ニ而御酒參候、

六日乙巳 天晴

一時宗衆被參候、淨光明寺ニ者菓子ニ而御茶參候、伊集院之道場不断光院などには御茶はかりも參候、

一藤次郎殿出仕、古躰三献ニ而御酒被給候、

一龍伯様より御使田代甚介被參候、鎌田出雲守・伊勢兵部少輔富隈へ御談合ニ被越候、

一南林寺へ御光儀、香典百疋被進之候、老中平田太郎左衛門尉出座候、其外紹佐など御供被申、午之刻ニ御出、酉之刻ニ御歸候、此日南林寺へ御出之事者、龍伯様御代より相始候由候也、

七日丙午 天晴

一御節供如常先糝參候、御對面之儀式如例、諸侍悉出仕、

一近衛殿より御書札到來、川上四郎兵衛尉持而下國候、

一帖佐より諸侍出仕、加世田金泉寺被參候、御茶被給候、日新寺被參候、菓子ニ而御茶被給候、北郷久次郎出仕、三肴ニ而御酒被給候、

一未之刻ニ鉄砲そろへなされ候、申之刻ニ弓揃候、鉄放之響天地を動、いかなる悪魔強敵も退散すへきと社聞へ、乗馬の蹄者穿沙逐風、粧孫具「本ノ、」か勇士も不可如之と見え候、

一戌之刻之末、平田殿椀飯進上、拾貳御合樽御座へ被直候、海山者御縁ニ被直候、竿者御庭ニ被懸候、平田殿御座に被出、式献目之盃被始、三献過候て諸面々諸侍召出御酒給候、御座へ紹佐罷出御媒芥共被申、御酒かさなり候砌、河野猪右衛門尉始、其後皆音曲被申、御酒宴長候、最前之式献目ニ同朋珎阿弥罷出、御縁より慶賀仕とか、御祝申せとか申聞せ候へば、中庭ニ而慶賀ゆわひ言をはやし候、御宴半の時分しゆん罷出御酌申候、御前より扇を被下候、其後老中すわうをぬかれ候へば、諸面々諸侍かたきぬをぬき候、御酒宴過をく江御入候へば、各も退出候、老中一人被殘年男ニ三献給候、御同朋も同座候、晩景之御節供如例矣、

一 鬼籠にて候、本者年男鬼を追候得共、近年者をとな敷人を多らび被追せ候、當年者猿渡九郎左衛門尉おひ申候、大豆ヲ鉢ニいれながら、御前へ持參候を御賞翫候て、御削物にて御三献參候、

八日丁未 天晴

一 廣濟寺被參候、菓子ニ而御茶參候、三光院被參候、御茶ばかり出候、伊集院より諏方之大夫中嶋の御花かえ持參仕候、伊作之源太夫大汝八幡の御花かえ持參仕候、早晚もをくにてあかり候、

一 圖書頭殿出仕、御太刀進上、古鉢三献參候、式献目者秘書被初候、

一 秋月殿より年頭之使者被參候、書狀兩通持參候、馬代三百疋進上、使較知与申者にて候、此日御簾中方より御振舞候、をくニ而の御會尺也、

九日戊申 天晴

一 吉利殿出仕、三肴ニ而御酒被給候、新納五郎右衛門尉入道出仕、三肴ニ而御酒被給候、いづれも太刀進上、川邊延慶寺被參候、御茶被給候、町田勝兵衛尉伊作之地頭被給候、御祝被申上、太刀・折紙進上、上井甚六小林之地頭被仰付、御礼太刀・折紙進上、市來大日寺

白麻進上、其外之聖家衆・禪家衆被參候、僧の位により御茶被給候、大日寺へは當年者御酒被給候、伊集院三郎五郎罷出、

十日己巳 天陰

一 又吉殿出仕、古鉢三献參候、三献目のかわらけ又吉殿被初候、談儀所へ如旧例御光儀、老中平田太郎左衛門尉供奉被仕、未之刻ニ御出、戌之刻ニ御歸、
一 太平寺・山内寺被參候、菓子ニ而御礼茶參候、御前へもあかり候、

一 御祈禱初可爲轉讀之由、年男前より老中へ申、老中より談儀所へ其由被遂案内候旧規也、

十一日庚戌 天晴

一 御祈禱初、南殿之間ニ而大般若轉讀三部、談儀所之法印・諏方之座主衆徒いづれも被參候、開關之時御前も被成指出候、

一 御吉書、老中平田太郎左衛門尉・御右筆者岩切雅樂助硯文臺を持參候而、御吉書を被仕、御判被遊、奉行よミあけを被承候、其文ニ曰、
一 可神社仏閣修造之事、
一 可專勸農之事、

一可徴納國々之年貢之事、

年号日付御判有之、次ニ御三献參候、御右筆も御座に被出候、老中衆・御右筆いづれも鳥目百足宛被拜領候、

一御鎧の祝初候、御三献參候、年男官仕被申候、兵具衆皆々御かわらけ被給候、御鎧の餅・酒肴諸侍不殘たまわり候、

一川上左近將監罷出、太刀・折紙進上、三ツ肴ニ而御酒給候、五代勝左衛門尉出仕、鳥目五十足進上、御酒給候、

一川邊神殿寺被參候、御茶給候、日高新四郎罷出、鳥目式百足進上、隈之城百次より猪進上、

一申之刻ニ御弓揃候、御前も被遊候、諸侍も仕候、的之代として削板を被立候、御前者もろ箭被遊中候、

諸侍も少く射あて候、鎌田三刀「本ノマ、」もろ矢仕候、御道具衆まで弓仕候、弓無器用之仁者鉄砲仕候、厥後御祝儀、

御酒御着參候、臺所より被調之候、諸侍へも御酒給候、

十二日辛亥 天晴

一右馬頭殿出仕、式三献參候、御太刀進上、馬代千足進上、村田雅樂助出仕、太刀・折紙進上、三肴ニ而御酒たまわり候、佐多殿出仕、古鉢三献ニ而御酒被給候、

太刀・折紙進上、龜山殿出仕、樽肴進上、三肴ニ而御酒被給候、片浦之かり屋罷出、樽肴・白麻進上仕、定舞臺ニ而御目見え仕候、

一此日富隈へ御出、天氣うらゝなるにより、御儀ニ而御出行候、御供之衆いづれも船にて被參候、

一富之隈ニ而山田民部少輔所へ被成御宿候、御三献進上被申候、御太刀并鳥目百足進上、續而御膳上り候、藤次郎殿・又吉殿御出座、かこしま御供衆召出御酒被下候、總而 龍伯様へ御出、樽六ツ・折四ツ・臺之物一ツ御進上、樽肴・臺之物一之臺へも被進之候、總而御

寄合右馬頭殿・藤次郎殿・又吉殿・老中衆出座候、御酒式返參り、御進上之御酒鹿兒嶋・富隈之諸侍召出給候、

十三日壬子 天晴

一富之隈ニ御逗留、佐土原より高崎越前守御使ニ參り候、樽肴荷めめこ進上、三肴ニ而御酒たまわり候、敷根仲兵衛尉出、太刀・樽・猪一丸進上仕候、三肴ニ而御酒たまわり候、

一京都の使者和久甚兵衛尉殿・加津五兵衛尉殿御案内被申候、青銅式百足宛進上、御肴ニ而御酒被成參會候、

伊集院下野入道出仕、樽着進上、三肴ニ而御酒たまわり候、

一求麻相良殿より年頭の御礼被申候、太刀一腰・馬一疋進上、

一京都之使節へ被成御礼候、加津五兵衛尉殿に鉄放一挺被進之候、但青貝之筒、酉之刻ニ冨之隈を御打立、帖佐へ亥之刻ニ御着、直に屋形へ御參、維新様へ御馬・太刀被成進覽候、をくにて御會尺、

十四日癸丑 天風吹

一帖佐ニ御逗留、御廣間ニ而御參會、御一家老中衆御座へ被參候、御供衆一人も不殘飯被下、いつれも被召出、御座にて御酒給候、御道具衆・御馬執までも御臺所ニ而飯酒飽滿仕候、般若寺之使僧・八幡の座主罷出〔被放〕白麻進上、伊勢平左衛門尉宿所へ御立寄、御三猷にて御酒進上、戌之刻ニ帖佐を御打立、脇本近き松原迄御立越、船にて御歸還あるへきを、浪風あらし故、厥夜者伊勢平左衛門尉宿所ニ被成御留候矣、

十五日甲寅 天雨降

一卯之刻ニ帖佐を御立出、午之刻ニ鹿兒嶋へ御着候、諸侍屋形まで御供被申、主君も奥へ御入候へば、ミナ

／＼退出候、

一抑 少將様高麗國へ數年御在陳、から嶋・かとく嶋与云所にいくそはくの星霜を被送、漸御歸朝と云ながら、直ニ御在京ニ而旅亭之春を過し被成、今茲初而御本國ニ而被成越年候へば、諸人成案堵之思、萬民開喜悅之肩、日向大隅薩摩之諸侍悉被遂出仕、剩 少將様朝鮮國全羅道泗川ニ而、中華國・朝鮮國之軍兵數十萬騎當家之御陳へ切懸、義弘・忠恒儀勢をはけまし、士卒与心を一にして即時切崩、敵八萬餘騎被捕執、其外打捨の殘黨數を不知、其粉骨ニより日域國之諸勢運を開歸朝候、爲此忠賞 天下より御褒美之書被成下、御太刀・刀御拜領なされ、旧邦不殘被成御還補、被揚其名於天下、遠領其譽於諸國威を振ひ、剩 忠恒様被任少將御昇殿之事者、當家希代之重職何事欵加焉哉、〔本ケマ、〕依之御旧例之模様少者雖相替、寺社之礼儀、侍之出仕優々敷美麗なる消息可爲後代之龜鏡候へば、是を書しるし留者也、

十六日乙卯 青天

一御旧例之千句之連歌御興行、此日御隙被入候へば、まつ百韻修行候、川上慰敗・阿蘇玄與其外連衆十五人、

酉之刻ニ成就、御前も名残の折之時分御指出、老中一人被出、御着ニ而御酒連衆へ被給候矣、

十七日丙辰 白日

一阿多の大年寺被參、味柑一折進上、御茶被給候、一乘院之代僧卷數・御茶・白麻進上、根占殿出仕、樽着進上、削物ニ而御酒被給候、猿渡與三出仕、白麻進上、坊之津假屋・同町人・山河之假屋・日州八ッ代之かり屋罷出、いづれも白麻進上、定舞臺ニ而御目見え仕候、伊作之初狩宍六まる進上、山野の初狩ニ猪一まる進上、一御前上之山へ御出、諸侍屋敷盛被御覽せ、其より遠矢なと被遊候、

一亥之刻ニ御祈禱之御護摩初り候、大乘院・安養院いづれも諸能化被參候、一七日の御勲行結跏趺坐にての行法也、

十八日丁巳 天霽

一東霧嶋之座主被參候、樽目籠進上、御酒被給候、伊勢平左衛門尉出仕、鳥目百疋進上、御酒被給候、山田民部少輔出仕、樽着進上、御酒被給候、念佛寺被參候、白麻進上、高城七右衛門尉出仕、鳥目百疋進上、松岡勝兵衛尉・同子千熊出仕、鳥目百疋勝兵衛尉進上、五

十疋千熊進上、伊作金藏院被參候、樽着進上、御酒被

給候、川崎兵右衛門尉出仕、鳥目百疋進上、巻絵屋彦

右衛門尉うつぼ一ッ進上、但なし地、猪六まる・鹿一

まる、田布施初狩進上、

一午之刻ニ平田太郎左衛門尉館へ御光儀、亥之刻ニ御歸、被催詩歌之興候、題者梅薰夜風と云とをり題也、此日上之山之御普請初り候、

十九日戊午 天陰

一御煩ニ依而無御指出候、小板屋にて老中衆御談合ある也、

廿日己未 天曇

一又五郎殿出仕、鳥目百疋進上、三肴ニ而御酒被給候、新納武藏入道殿出仕、太刀・折紙進上、三肴ニ而御酒被給候、續而菱刈之椀飯進上、儀式如常、例年者十三日ニ相定り候へ共、此年者御弓箭ニ付而、堺目たるにより延引候而、此日ニ被參候、紹佐など御座ニ罷出謠など被申御酒宴候、眞幸長禪寺被參候、白麻進上、御茶被給候、宗航院柴高被參候、白麻進上、馬越黒坂寺被參候、御茶被給候、白麻進上、清雲罷出ねり樽一ッ進上、小板屋ニ而光明院御寄合、

廿一日庚申 天雨降

一志布志大慈寺被參候、菓子ニ而御茶參候、鳥目百疋進上、龍伯様御書文箱一ツ參り候、小板屋ニ而又五郎殿御酒御寄合、

廿二日辛酉 天晴

一圖書頭殿館へ御光儀、式正之御振舞也、午之刻ニ御出、亥之刻ニ御歸、

廿三日壬戌 天晴

一北郷作左衛門尉出仕、太刀・折紙進上、古躰三献參候、平賀弥右衛門尉・西郷休右衛門尉出仕、太刀・折紙進上、御酒被給候、本田六右衛門尉出仕、鳥目百疋進上、御酒被給候、法花嶽寺被參候、修正之御札・鳥目百疋進上、菓子ニ而御茶被給候、隼一ツ進上、法花嶽寺領内之者とらへ候之間進上被仕候、石火矢二挺平賀弥右衛門尉進上、

廿四日癸亥 天陰

一御祈禱・御護廣成就、談儀所法印・諫方之座主御寄合、老中圖書頭殿・鎌田出雲守御賞件ニ被出候、小西作右衛門尉出仕、御酌など被申、御道服被拜領候、唐をり物也、太刀・折紙進上、御酒被給勸盃之興共催され候、

晩ニ者御旧例之ことく老中御振舞、日限者不相定候、御亂舞など候て御酒もり候、加世田五郎次郎ニ御小袖被下候、大鼓ミ仕候故如此欵、森喜右衛門尉御祈禱仕候、一七日之修法也、御簾中よりの御祈念也、

廿五日甲子 天陰

一御談合あり、未之刻に 御前普請場へ 御出駕、大雨ふり候へ共 御前も蓋をも不被召故、御供奉之衆も皆くぬれ候、是則三略ニ曰、雨不張蓋、是を將の礼と云々候へば、誠ニ神妙なる御おこなひに覚え候、此故に大に御普請はか行候、

廿六日乙丑 天陰

一霧嶋之座主御參、樽式ツ進上、白鳥之座司被參、白麻三束進上、普門院霧嶋之后座司職案堵被申、御祝被申上、鳥目五百疋進上、いづれも御酒被給候、岳之米良使者を被上候、鹿肢三ツ進上、冨之隈より御兩使本田與左衛門尉・田代甚介被參候、額娃御城取檢者として、鹿嶋右衛門尉・弟子丸右京亮被參候、伊勢弥次郎 龍伯様へ御使ニ被參候、申之刻ニ御普請場に御出駕候、

廿七日丙寅 大雨降

一宮内社家衆年頭之出仕、留主・桑幡・田口白麻三束ツ

、進上、古躰三献にて御酒被給候、井上孫二郎驚一ツ
・鳥目進上、八代之行司鳥目百足進上、伊集院肥前入
道出仕、太刀・折紙進上、押着ニ而御酒被給候、

廿八日丁卯 天霽

一圓乗坊中へ御使ニ上り候、田邊屋又左衛門尉船ニ乗
り候、御腰物拜領させられ候、帖佐より新納作右衛門
尉御使ニ被參候、巳之刻ニ普請場ニ御出候、辰之刻ニ
孟子被成御讀書候、讀師志布志大慈寺、又酉之刻に普
請場へ御出候、上之山ニ而遠矢被遊候、

廿九日戊辰 天晴

一川上三河入道年頭之出仕、鳥目百足進上、於小板屋ニ
孟子被成讀書候、午之刻に普請場ニ御出駕候、此日
龍伯様御越、船本まで少將様御迎ニ被成御參候、日
など悪候へば、屋形には無御出候、

晦日己巳 天晴

一坊之津一乘院被參候、菓子ニ而御茶參候、鳥目百足進
上、佐多殿被參候、猪一九・樽一荷進上、
一龍伯様御光儀、御對面所ニ而御三献參候、式三献也、
御太刀被成進献候、桂太郎兵衛尉披露被申候、少將
様より龍伯様へ被成進上候、龍伯様より御太刀被

成進献候、伊勢兵部少輔披露被申候、其より三献過候
て、奥ニ而御參會、森喜右衛門尉御祈禱成就申候、御
花から進上矣、

1441 『加治木桑畑氏藏』

天福和合樂

地徳皆圓滿

君か代の久しかるへき例には兼そ植しすよしのまつ

慶長六年一日 惟新(花押)

年徳神

1442 『本山氏藏書』「義久公御譜中ニ在リ」

御下向之由承候之間、用一書候、寒天之御辛勞不及是非
候、其元之様子等、何程相究候哉承度候、雖不及申候、
万事可然様御談合尤存候、猶重々可申入候、恐々謹言、

〔朱カキ〕 秋長門守

正月四日 種長(花押)

〔元規〕 本田助允殿

御宿所

1443 「本田助允案文」

(本文書八一四五二号文書ト同文ニノキ省略ス)

狩野介殿

1444

「御文庫廿三番箱十五卷中」「義弘公御譜中案文在新納仲左衛門忠雄トアリ」

今度申越候羽越州へ使者候、五三日中ニ罷立候様、御談合尤候、然者此度京都へ被仰上一儀共、大方不致首尾、切可申事治定ニ存候、然時者早越州へ被仰通候而、後日御無事調達之儀、可頼存事可在之候、從富隈使を被仰付之由候へ共、從是之意趣を申達、又彼方之儀をも可承來儀候条、川東善左衛門尉を被仰付候へかすと存候、恐く謹言、

「朱かき」
「慶長六年」正月八日

惟新

少將殿

まいる

1445

「佐多七郎兵衛家藏」

今度美濃國於関原戰場、盡身命而守護様之御供申、閉日候之故忠節不輕、殊ニ其身茂播面目候事、就當家前代未聞覚也、此儀依爲感情、田島五石當毛相添遣候、弥抽忠懇奉公別儀有間敷者也、仍狀如件、

慶長六年正月九日

「忠光」
長壽〇

1446

「本田助允案文」

起請文前書之事

てうさにて

一今度不慮ニ生捕ニ罷成、山口勘兵衛殿へ被召置、當國御暖之儀ニ付、御使者下向候、爲御案内者罷下候、然者於上方計策等之儀、曾以不被仰聞候、又ニ罷上候ハ、若計策之儀被仰聞候共、少も請付申間敷事、
一今度京都之往返仕候ニ付、竜伯様 維新様 少將様へ御奉公之外、別心を不可存候事、

一上方ニ逗留申候内、爰元自然弓箭ニ罷成、急ニ下向雖難成候、他之主人頼申ましき事、

慶長六

正月十三日

伊勢平左衛門尉殿

1447

『在官庫』

今度從上之兩使江返事之儀、いよ／＼別儀有ましく候、本助丞よく／＼とくしん候て尤候、くれ／＼如申盡候、内府様まへ／＼の忝儀無忘却候間、御しんしつの儀にて

被召出候ハ、八幡も御照覽、罷上梓家をも相續度儀候、重而ハ親類中成とも、おとな中成共可差上由申候處、

龍伯自身の上を此使いそきのよし候、心もとなく候、隣

國のやうをよく見きわめ候へてハ難成候、世上風聞候ハ、

たしかなる證文共にて被罷出候人も違變有之由候、さて

くさやうに候てハ、家之恥辱不及是非候、勿論百ニ一

も難叶弓箭、非沙汰之限候間、中く行ゑのたのミハ相

絶候、只ふだい相傳之家をむさと可成果事、無念之次

第たるへく候間、家中の各如一味可成程之遂防戦、可相

果儀本望候、此むね助丞へ申含肝要候、かしこ、

〔朱カキ〕
「慶長六年」正月十六日 忠恒(花押)

鎌田出雲守殿

「家久公御譜中ニ在リ、正文在本田助之丞トアリ」

「義久公御譜中」

「此本在御文書方」

慶長六年正月十六日の千句巻ぢく

神祇藤

龍伯

咲藤の花にやにはふ御しめ縄

1449

〔本文書ハ一四五〇号文書ト同文ニシキ省略ス〕

1450

『雜抄』「正文在御文庫拾六番箱四卷中」

一今度御使ニ付、奉對 御家毛頭別心不可有之候、拙子

事萬々無才覺之儀候間、何条も取合申候事不能成候、

此儀ハ可被成御芳免候、

一京都ニ知人中多々在之事共候、對此人衆、此地之様子

被仰聞之外、少も別儀申入間敷候、若於以後如此之儀

物沙汰共候者、被遂御糺明、何事も拙子ニ可被仰聞せ

候、

一伊源之衆ニ誰人も何事共被申候を、若承候ハ、其時

之様子ヲ直ニ可致言上候、先年々之懇と申候て、少も

偏頗不可有之候、

此等之条々、佛祖八幡も御照覽、抽丹誠書付進上候、

萬事く奉頼候、

慶長第六辛丑正月十七日 正興寺玄昌(花押)

抱節尊老

參御近侍中

埋安尊老

1451

『本田氏藏書』

1452

「御文庫拾六番箱十卷中」

敬白天罰靈社上卷起請文之事

一今度於上方不慮生捕ニ罷成、當國御暖之儀ニ付、度々
往返仕候、然者 御家之御爲可惡儀、内外共ニ曾以不
申候、向後も申間敷候、勿論京都にて計策之儀、少も
不被仰聞候、又々罷上候て計策之儀承候共、請付申ま
しく候事、

一爰元御弓箭ニ罷成、自然上方ニ被召留、急ニ下向雖不
罷成候、他之主人を頼申間敷候事、

年首吉兆環重々、仍其境之儀、當時何分候哉、爲可承
用使書候、倍無油斷賢慮尤候、隨而矢をいるゝ看經、到
上方金藏坊へ相傳仕申候由承候、於眞儀者、我等習度候
間、此方へ伺候之時分書を持參候へく、次其許にて打な
らし鑄させたく候、此方へ餘多候へ共音無之候、本を遣
候、是より今ちとおほきになり、そのことくたるへく
遷入候、乍去音是ニもおとり候へく候者、不入事候間、
其分ニ召置候へ、爲其本遣候、恐々謹言、

「慶五六比款」

正月十七日

龍伯御判

本田六右衛門殿

1453

「本田氏文書」

覺

一竜伯様 維新様 少將様へ御奉公之外、向後別心を不
可存候事、

右旨若於僞申上者、

「牛王神文略、別シテ長文ナリ」

慶長六年正月十九日

本田助允

元親(花押)

伊勢平左衛門尉殿

參

高百八拾石此内六十石脇元知行分、當時へ合而軍役仕候也、

右内七十七石六斗六舛八合八夕

永吉村給分門壹屋敷ニツ

七十二石五斗六舛九合九夕

入來裏名村給分門壹屋敷ニツ

廿石 帖佐舟津村給分門壹ツ

拾石 蒲生久とく村給分浮免

合百八十石此外餘分二斗三舛八合七夕

加増三十石

京都へ御無事之御使ニ度々罷上候ニ付
馬越徳邊村給分

右者勝二郎へ次男分ニ新地として被下候得共、脇元

知行御座候由申上候得者、助丞度々上洛仕、辛勞申候付被下候由、慶長六年正月十九日、帖佐殿中にて被仰聞候、御使新納全入道殿、

加増式百石可被下由御約束也、是も京都へ無事之御かけひきニ付、度々御使被仰付候間、難成由頻々御侘言申上候処、御三殿様御談合ヲ以加増可被下之由候、慶長六年正月十四日、少將様帖佐江御越之刻、平田太郎左衛門殿へ御承被成、相良新右衛門殿御使にて、太郎左衛門殿被仰聞候、急度目錄可被下之由堅被仰聞候、以上、右加増本地相捕候得者、四百十石之軍役たるへく候、但此内六十石脇元少二郎知行追而引退可申、

慶長六
正月十九日 助丞(花押)

1454 『水引執印文書』

八幡新田宮執印吉左衛門尉知行坪付

高貳百石但此内百石分者、於京都高麗抽忠節、仍被下訖、

慶長六年辛丑正月廿四日
修正田
上屯段五歩 一下々の荒屯段九せ十分

同所
上七畦廿分 一下々の荒屯段六せ十八分
櫻井
上屯段二畦廿四分 一下々の荒舟津田式せ

『欠ル』 『欠 欠同所』

1455 『新納氏藏書』

(本文書ハ一六〇六号文書ト同文ニツキ省略ス)

1456 「北郷三久譜中」

慶長六年辛丑正月二十八日、加賜采地千斛、意趣詳在干國老連判之證書、

「此證書、左ニ昔年載セ置ケリ、三久ノ譜中ニハ見ヘス、疑アリ」

1457 『北郷氏藏書』

加増目錄

日州諸縣之郡 志和知

水流村之内

高千石但千七百五石八斗五舛之内

去年雖御加増候、万方御心遣之時分候条、弥御頼被思召ニ付、今度庄内諸所、重而次郎殿へ被遣候、然者貴

老事、同前之以御意被成御加増候、可有知行者也、

慶長六年正月廿八日

比志嶋紀伊守
國貞判

鎌田出雲守

政近判

平田太郎左衛門

増宗判

圖書頭

忠長在判

北郷作左衛門殿(三久)

「義弘公御譜中」

「正文有之」

以上

好便之条令啓上候、誠今度者互不寄存、敵味方ニ罷成候事、不及是非次第候事、

一 関東表合戦之刻、御覚語之様子、擬々無比類被作様与内府様始而其外諸人、感申候事不成大形候、殊御下々迄無越度被召連、御退被成候事、前代未聞御手柄と各御取沙汰是已候事、

一 御身上如跡々無御別儀趣候間、早々相濟候様ニ御談合

尤存候、治少色立之刻、貴老伏見之城へ御籠可被成との首尾、立庵具御物語之通、即 内府様へ申上候、更以貴老逆意と不思召儀候、其上御礼儀候共、ぬき公事無之事、日本國大小神祇 愛宕 白山少も御身上御氣遣被成間敷候、弥事於相卜者、丈夫ニ御誓紙共可被遣候、其段者我等洵底存候間、乍指出申入候事、

一 先日牢人衆其元へ參候間、御前無御別儀誓紙仕候而、下申候つる、不相届候哉、無御心元候、又八郎殿弓相傳申付而、聊御身上惡不存故、内證申入事候、景勝身上之儀、高野へ罷登御侘言申ニ相定、路次まで罷出由候事、

一 増右事も我等御使申候、関東岩つきに御置被成、知行方追而可被下旨候、増右事者、自余之謀叛人方御存分深候つれ共、我等才覚申、御前濟申候事、

一 井兵少・本佐州父子・山勘兵何れへも、跡々不相替様ニ御取成候事、具ニ申入候、可御心安候、尚追而可申入候、恐惶謹言、

「朱力キ」

「慶長六年」

正月晦日

舟越景徳
舟五郎右

(花押)

羽兵様
(義弘)

參人、御中

近衛信尹公賜台翰、且復當家門族等數多丁濃州戰場鬪亂之時、別主人而雖逃出于京都、死生存亡未知之際、忽有信尹公之達台聽者、而憐之被加救助、裁謝禮之一翰進獻京都矣、

1460 「御文庫廿三番箱家久十六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

改年之御慶不易、幸甚々々、仍從御家門樣被成下御書忝拜見候、如尊意旧冬以使者申分之儀共候、然處從井伊兵・山口勘兵所兩使被相添、条々承子細候、就其又々從是使者差上候、以此上如何樣一途可事濟欵と存候、近比雖憚多申事候、當家可然之樣、寄々可被加御懇慮事奉仰候、殊當方之者共、依不慮之任合身躰及迷惑候処、種々被添御心、于今全御格護之由、誠恐悅難盡紙上候、此等之御礼等、早々雖可申上候、通路任不自由申後候、本意之外候、弥彼者共之儀、何と様ニも以御才覚早々可罷下御調儀、乍恐奉頼候趣、宜御取合所希候、恐々、

「朱力申」
「慶長六年」正月 日

進藤殿

「御案文也」

慶長六年辛丑二月、惟新尊君使中原圓乘房上伏見達旅庵、有命曰、御内書及本多佐渡守殿書 近衛殿玉札、本田助之丞共所帶來也、龍伯公・少將殿報書無遲引可帶上、須得其意、爲國爲家益廻調議、未經幾程之際、助之丞帶兩君之報書來、其書曰、去年石田治部少輔丁企謀叛之時、惟新不得已而所以與同非言語之得而可述、速龍伯欲遂上都謝其罪、而今也病痾惱老身不得赴京師、待平復之時可企上都矣、惟新抱罔赦之罪、以止兄弟之交且追舊宅、故逃去而屈隅州櫻島也、其書 内府之備 台覽、則催感涙曰、非當止兄弟親子之交、責其非追私宅者未嘗有比倫、由是附本多佐渡守殿・山口勘兵衛尉殿神文書簡於和久甚兵衛尉殿、所下于薩摩州、三月廿一日、正興寺・本田助允・旅庵賜暇、奉 高命、以爲和久氏指南、本田勝吉亦賜暇俱歸國也、

台命雖悉誠積度、國人未嘗散疑心、以不得決上京、而六月、使鎌田出雲守・旅庵差京師上方之窺眞僞、已上伏見候本多佐渡守殿旅宿達使之事、則佐渡守殿招座右有言曰、日本國中鎮西之島津殿、中國之赤松殿、北陸道之上杉殿、陸奥國之伊達殿、東海道之家康、共此五家者我朝無雙之

將也、先是朝鮮國征伐之時名護屋在陣之際、義久與家康有會盟之儀、以降其交不淺者殆乎十年許也、不計有兵革爲障導、雖然屬一統、則龍伯公乎少將殿乎一人有上京者、何有異意哉、既前通達畢、兩使急速下國、宜催上都、龍伯公老病未復本、少將殿壯年息災之身、有遂上都者可乎、兩界返書、海陸勿緩慢焉、丁此之時、兩輩共賜衣服矣、兩輩辭伏見、九月廿三日、解纜於大坂、十月、下我國達台命催上京、而國人未散其疑、所以猶豫也、

1462 『在官庫』「義久公御譜中正文在卷本トアリ」

以上

今度從少將様御使者被指上候、委曲御報申入候、然者旧冬如申達、此砌御上洛御尤存候、景勝儀も急度可罷上儀定候間、其以前ニ御上洛被成候へかして存儀候、雖不及申候、此節御分別專一ニ奉存候、猶於趣者、善才坊口上ニ申渡候条不能具候、恐惶謹言、

「慶長六年秋」
二月二日
山口勘兵衛尉
直友(花押)

龍伯様

人々御中

1463

『全』
(本文書ハ一四六五号文書ト同文ニノキ省略ス)

1464

「正文有之」

以上

從少將殿預使札候条、一書申達候、先度之御使者ニ委細申遣候、彼御返事を待申事候、先書ニも如申達、景勝近日出仕被申事候、其御分別候て御尤存候、恐惶謹言、

「六年」
二月二日
井伊兵部少輔
直政(墨印)

龍伯様

「此一通、義久公御譜中ニアリ」

1465

「家久公御譜中」
「正文在卷本」

以上

貴札拜見、本望至極候、仍旧冬被指上御兩使、參着之様子、爲無御心元重而預御使者候、最前之御使者、御口上之通承届、内府ニ申聞御返事具ニ彼御兩使へ申渡、山勘兵衛方拙子者、兩人指添下申候キ、定漸歸上可有之与存

待申事候、彼使者ニ如申達、景勝なども急速可罷上候、

御分別候て尤存候、次御兩使被入御念、重如此之通をも、

内々内府ニ申聞候条、可御心安候、恐惶謹言、

〔朱力平〕
〔慶長六年〕
二月二日 井伊兵部少輔 直政 ○〔墨印〕

薩广少將様
御報

〔正文有之〕

旧冬十一日之御狀拜見申候、被指上候眞連坊、井兵部殿・

山勘兵へ引合、御兩所被遂披露旨候、最前日向通被指上

候御使者ニも委細被仰入候、御返事定可被仰上候、御前

之儀も別条御座有間敷候条、急度御上洛之節、可得御意

候、恐惶謹言、

〔慶長六年〕
二月五日

寺志广守 正成(花押)

龍伯様
御報

〔此一通、義久公御譜中ニ在リ〕

1467 『全』「家久公御譜中ニ在リ」

舊冬十一日之御狀拜見申候、被指上候眞連坊、井兵部殿・

山勘兵へ引合、御兩所被遂披露旨候、最前日向通被指上

候御使者ニも委細被仰入候、御返事定可被仰上候、御前

之儀も別条御座有間敷候条、急度御上洛之節、可得御意

候、恐惶謹言、

〔朱力平〕
〔慶長六年〕
二月五日 寺志广守 正成(花押)

少將様
御報

1468 『年代記』

一此年、寺澤志摩守天草拜領之事、

1469 「家久公御譜中」
「寫在坊津廣大寺」

頃春雪之めつらかなるを、

龍伯様入御詠吟御歌被遊、

隨之各詠歌共從富限送給候、御返歌なくてハありかた

候間、當所衆へも少々申觸候、然者一兩詩相加候者、可

爲珎重候、則 龍伯様之尊詠書付進候、必和韻待入候、

不宣、

武士のこゝろひかるゝあつさ弓

春とはいはしけさのしら雪

〔慶長六年か〕
仲春初六日
忠恒判

廣濟寺玉扣下

1470
〔在雜抄〕

那答院・宮城之儀當時依爲明城、今度之御弓箭中、妻子爲可召置、御番可仕由申上候、内々又吉殿へ御約束有之由、承及候間、何時も御意次第、可致返上候、仍證狀如件、

慶長六年二月八日

圖書頭
忠長判

鎌田出雲守殿
〔政近〕

平田太郎左衛門殿
〔増孝〕

〔此書、又吉常久ノ譜中ニアリ〕

1471
〔家久公御譜中〕

〔正文在谷山之雨田勤之丞友幸〕

加増目錄

薩州那答院紫尾村

小市八重之門

高貳拾參斛貳斗五升三合

浮免

高拾七斛

惣合四拾斛二斗五升

此度從伊東方計策雖有之、不入其案、剩敵方之使搦候而取申上、依其忠節、右知行爲御褒美被宛行者也、

慶長六年
二月廿日

比志嶋紀伊守
國貞

鎌田出雲守

政近〔花押〕

平田太郎左衛門尉

増宗〔花押〕

圖書頭

忠長

雨田民部左衛門尉殿

〔卷裏ニ有之〕

〔きよしき衆〕

雨田民部左衛門尉殿

1472
〔義弘公御譜中〕

慶長六年辛丑二月、使中原圓乘房首途於帖佐越京都於伏見達旅庵、御内書及本多佐渡守殿書、近衛殿玉札、共本田助之丞之所帶來也、龍伯公・少將殿報書無遲引可帶上、須得其意爲國爲家廻調略云尔、

「御文庫廿三番箱十五卷中」義弘公御譜中ニ在リ 正文在新納仲左衛門忠雄トアリ

今度不慮之成立ニ付、其元へ滞留之儀、不及是非候、窮

屈之儀朝暮自是察存計、右之通于今在京之人衆各へも相

心得、余者口上ニ相含候、謹言、

〔朱カキ〕

「慶長六年」二月廿四日

惟新

旅庵

『安樂氏藏書』

薩州吉田本名之内 知行目録

大善坊先

一 白山屋敷

高參拾五石六斗四舛三合

隅州見次村ノ内

一 浮免

高四石二斗八舛四合

下財部ノ内

一 浮免

高廿石九舛一合

合六拾石

右之地、爲加増令配分者也、

慶長六年

二月廿六日

山田越前入

理安

伊集院下野入

抱節

安樂大炊助殿

『在官庫』

正月十五日之芳札慥來着、殊ニ白色卷物怡悅候、此度可

有一途之由尤珍重候、本助丞にも如申關候、於内府對貴

方御懇之躰、眞實と相見候間、井伊侍從・山勘兵など指

圖次第、御上國肝要候、川上久右衛門尉へ、我々使之分

ニして差下よし申候得者、道阿茂便狀之事候、新八郎・

喜入をはしめ徒在洛咲止候得共、内府御指圖候間、任其

旨候、委曲久右衛門可申候、かしこ、

猶々於内府無御如在躰、自我々も可申下候旨、内證

ニ候間、久右衛門便ニして差下事候、

〔慶長六年秋〕

三月四日

三木

龍伯老

『在官庫』

正月十二日之御報參着、令拜披候、并從竜伯公・少將殿

『在官庫』

「家久公御譜中、正文在卷本トアリ」

薩摩少將殿

人々御中

三月七日

井伊兵部少輔

直政〇〇〔墨印〕

御兩使被指上、御口上之通委細承届候、先書ニ具如申達候、竜伯公御上洛之上、何様ニも御馳走可申候、貴殿御事も其上者頓相濟可申候、御機遣被成間敷候、委曲御兩使へ申渡候条不具候、恐々謹言、

〔慶長六年〕

三月七日

井伊兵部少輔

直政〇〇〔墨印〕

羽柴兵庫頭殿

人々御中

『在官庫』

正月十五日之御報參着、致拜見候、并御兩使被指上候、御口上之通委細承届候、先書ニも具如申達候、竜伯御上洛之上、何様ニも御馳走可申候、於其儀者、被成御機遣間敷候、其上抜公事表裏少も有之間敷候、委曲以一ツ書御使者へ申渡候条、書中不能具候、恐惶謹言、

〔六年〕

三月七日

井伊兵部少輔

直政〇〇〔墨印〕

猶々仕藏たる弓二張下申候、是ハ今度東へ、雨露いとハすこたへよく不悪候間、御持弓御秘藏可忝候、今度弓にてハ何事もあいに不申候、乍去高名仕候間、可御心安候、以上、

御懇書拜見忝候、先日も度々以書狀申入候、不相届候哉、無御心元存候、隨而御身上之儀、内府様東ニ御座候刻ふ、細々御取成申上候、常々御親父我等へ之御物語ニ、内府様々様々御懇意、忝次第候間、折々御次ニハ頼由被仰付而、今度天下錯乱之砌も、只一人兵庫御味方与候事不成候而、存知不道乍覚悟、惣様一とうの爲躰候はん間、更於心底、對内府様逆意無之證據ニハ、薩州之人數一人もよひ不被上、軍役迄之仕合、都鄙可存候間、連々可相聞趣精誠申上候、大坂御無事之儀も我等御使申候故、御身上之儀も弓など相傳申通被成御聞、御あいさつにも罷成、御取成不存疎意候、景勝御事も去月當月中ニ相濟趣候ツ、然共未御使者衆不被上候間、ト首尾不存候、兎角連々さへハリ何の用ニも可立儀ニあらず候間、一刻も早々御佯言被差急、世見之御見合無之様ニ御分別尤存候、御氣遣成事も候ハ、かやうにハ申入間敷候へ共、御國が一人宛御在京指不成苦御事候間、如跡々早々被相濟御尤

存候、尚於様子者此兩人可被申候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長六年〕

三月十二日

〔舟越景通〕

舟五郎右

〔花押〕

嶋津又八様

参貴報

〔家久公御譜中ニ在リ〕

1479

〔御文庫四拾八番箱中〕〔義弘公御譜中正文進上市後崎長右衛門トアリ〕

御狀忝存候、如仰川内迄之道筋、かれこれ仕るへき事ニ
て候、然者新弥太少快氣のやうに申來候、左様候者、頻
大口へ可相越よし定不申來候哉、今少承合分別仕候へん
と存候、御念ことくこゝもとも出合申候、御尤候、猶こ
れより可申上候、恐惶敬白、

〔朱カキ〕

〔慶長六年〕三月十三日

忠恒〔花押〕

少將

〔上書〕
惟新様

参人々御中

忠恒

1480

〔在官庫〕

猶以此方之様子、具ニ被聞召届候様ニと存、旅庵差

下申候、猶和久甚兵衛可得御意候、以上、

先度御使者御下之節、和久甚兵衛相添差下申候處ニ、重
而以御兩使条々被仰越候、具承届、井兵少申談披露仕候、
此方之儀、弥無御別儀候間、被成其御心得、御上洛尤存
候、委細之段條數御使者申渡候、能々可被聞召届候、將
又爲御音信、襦子五卷被送下忝奉存候、猶期後音之時候、
恐惶謹言、

〔慶長六年〕

三月十四日

山口勘兵衛尉

直友〔花押〕

少將様

参人々御中

〔家久公御譜中、正文在卷本トアリ〕

1481

〔義久公御譜中〕

〔此本在御文書方〕

慶長六年三月十八日

龍伯

濱松に藤なミかくる岩ほ哉

1482

〔正文在文庫〕

尚以井伊兵少輔へ御入魂被成、御吳見次第ニ尤可然

候、於拙者相應之御用可承候、聊疎意不存候、以上、

正月廿四日之貴札、今月廿日ニ到來、忝拜見仕候、殊ニ紅之糸式斤被懸御意、是亦過分之至候、隨而旧冬預御狀本望之儀ニ候、次ニ御家之事、井伊兵部殿別而御馳走被申候条、兵少輔被任御吳見可然候、我等事先年々被懸御目候間、如在を不存候、相應之御用不被御心置可蒙仰候、恐惶謹言、

三月廿四日
羽左衛門太夫
正則(花押)

羽兵庫頭様
御報

1483 「御文庫四拾八番箱中」

態令啓候、仍雖無申迄候、諸津浦船留之儀、弥被仰付、堅可被相改事尤存候、其謂者東西共陸路之事稱被仰付候条、廻船之躰ニテ計策共可在之事、治定与存候、每篇從貴所被仰渡儀をも、老中衆被承置迄ニ而、被打延様ニ承及候、依事候て笑止成儀ニ候、猶以堅可被仰付候、爲御心得候、恐々謹言、

〔朱力半〕
慶長六年欣三月廿八日
惟新(花押)

少將殿

まへ

1484

『在『清水臺明寺』此正文旧御番所ニ番箱中臺明寺文書一番中在リ』

「義久公御補判」

山王領

隅州曾於郡山之路村之内
高四拾石

任 天下御下知、雖致勘落爲國家安全、右之知行、爲御祭礼并修造田令支配者也、

慶長六年
三月吉日

山田越前入道
理安(花押)

伊集院下野入道
抱節(花押)

大明寺

1485

「在吉松内小野寺」

日州眞幸院吉田村之内知行目錄

蒲生久徳之返地

下之水重門

慶長六

三月拾一日印

伊勢平左衛門

秀眞坊

(本文書ハ全文朱書ナリ)

『雜抄』
(本文書ハ一五一八号文書ト同文ニツキ省略ス)

『在曾於郡念佛寺』

隅州桑原郡西光村之内

一高拾三石六斗三升五合

上之藪屋敷内

一高六石三斗六升五合

見次村之内

合式拾石

慶長六年三月廿六日

山田越前入道
理安判

伊集院下野入道
抱節判

『在吉松般若寺』

目錄

隅州桑原之郡般若寺村之内

屋敷方

田屋敷貳畦廿步

一斗老升三合二夕

弥介

屋敷貳畦十二町

貳斗三升九合九夕

同人

屋敷廿四步

七升九合八夕

孫四郎

『兒玉氏家藏』

『引返シ裏ニ』

兒玉主水佑殿

屋敷廿五町 八升三合一夕 主計

屋敷二畦廿步 貳斗六升六合六夕 孫五左衛門

屋敷四畦廿步 四斗六升六合六夕 仲十郎

屋敷一畦二步 一斗六合六夕 三郎次郎

畠屋敷五畦十步 三斗貳升 大学介

合畠屋敷老石六斗七升五合老夕

慶長六

拾二月拾九日

伊勢平左衛門尉

般若寺

『兒玉氏譜中』

慶長六年辛丑、叛臣忠真之封邑悉入於官、公乃頒賜

群士、於是三月二十二日、加賜主水田^{黄金}祿佰斛於日州財部

・松山・志布志等之地、乃國老山田越前守有信入道理安

・伊集院下野守久治入道抱節以書授之、

五月二十一日、易所在河原^上、三斛於新講村及見次村内

以賜之、亦國老山田理安・伊集院抱節以書授之、

『全』

日州諸縣郡下財部之内

一土屋之門

高拾九石八斗貳舛四合

財部河畑之内

一浮免

高三拾石壹斗八舛八合八勺

松山尾野見之内

一有生野之門

高三拾七石八斗七合三勺貳才

志布志内之倉之内

一浮地

高拾貳石九斗

合百石

伊尻伴介先

右之知行、爲加増令配分者也、

慶長六年

三月廿二日

山田越前入道〔有世〕

理安〔花押〕

伊集院下野入道〔久造〕

抱節〔花押〕

兒玉主水佑殿

隅州諸村之内知行目錄

一浮免

しんかうノ内

中 上畠一反六畝十四分 一石六斗四舛六合 六官

地蔵ヶ原 下畠四畝廿四分 貳斗八舛八合

寺入前

下畠五畝十分 四斗二舛六合

同所

下畠八畦 六斗四舛

合三石

見次村之内 弓右衛門 甚左衛門 同村之内 藤二兵へ

右之地、河原村すゝき之知行爲返地令配分者也、

慶長六年

五月廿一日

山田越前入道〔有世〕

理安

伊集院下野入道〔久造〕

抱節

兒玉主水佑殿

1492

『加治木吉祥寺四世春岳和尚覺書』

一慶長六年辛丑、伊集院源次郎知行八萬斛被召上、三ヶ

國之諸侍に御加増被仰付之由、

〔忠甚〕

1493

「町田圖書頭久幸譜中」

慶長六年辛丑、被補伊作地頭職、爲市山返地賜本領石谷

村、且又爲一之宮返地賜與倉・中原兩村之内、同八年、
賜長羽村返地、

〔表紙〕

後 編	義 久 公	義 久 公	慶長六年 自四月 至十二月
舊 記 雜 錄	家 久 公		
			卷五十四

『雜抄』

尚く貴老、向之島のことく可有御越之由、尤存候、將又甚兵衛尉殿送賄彼是之儀、丁寧ニ候へてハ不可然候、いつもかこしま之御曖ゆきと、かす候、能く其方より心を添られへく候、自是も昨日以使鹿へ申越候へとも、猶く可被仰越候、

一輪之旨、委披見候、仍本田助丞無何事下向之由、近比目出候、殊和久甚兵衛尉殿下着ニ付、御談合可入之段承候間、來六日七日ニ可致歸宅候、根占へ新城ともとらせ候条、爲見廻罷越、置目等可申付と存立候つれ共、不輕

御返詞ニ候之間、隠居之躰とは申なから、國家之始末ニ候条、急度可罷歸候、御談合之儀ハ、定鹿兒島ニて可有之と存候間、以時分我等も可罷越候哉、とかく鹿へ細く被仰越、富隈のことく可預注進候、自諸所參上之人衆、一刻も無不用、早く祇候申候様ニかたく被仰付候へてハと存候、毎度鹿より被仰渡儀ゆるかせに御座候、於此時者、無油断之様ニ御催促尤候、枕山權左衛門尉・村田雅樂助事ハ、此方角ニ候之条、早速可參之通申付候、其外之諸方へハ、鹿より被仰渡候而可然之段、能くかこしまへ可被仰越候、恐く謹言、

卯月二日

〔義久〕
龍伯(花押)

〔義忍〕
惟新參

「此御書、御文庫四拾八番箱義久公卷中ニアリ、文字ノ異同アレトモ、其假組合スル也、又義弘公御譜中ニアリ」

「義弘公御譜中」

一慶長六年四月、屈居向之島藤野村、而送數月矣、丁此之時、山口勘兵衛尉殿使節和久甚兵衛尉再下着曰、内大臣家康卿能聞義弘之不得已而入逆徒之中負罔赦之罪曰、其然、不可敢疑也、由是及歸宅也、

「御文庫廿三番箱十五卷中」 「義弘公御譜中案文在新納仲左衛門忠雄」
 從黒田甲斐守殿又々先日之使者被差下、日向八代へ逗留
 候由、此方も相付候使申來候、就夫此方も之御使相待之
 由、被申通ニ候間、然々成一入早々被指越、意趣等をも
 御聞せ可在之事尤候、最前之首尾にて候条、從是も一人
 可申付候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
 「慶長六年」卯月三日

惟新

〔家久〕
 少將殿

まゐる

「御文庫四拾八番箱三十七通卷中」 「義弘公御譜中案文在新納仲左衛門
 忠雄トアリ」
 本田助允申越候趣共爲可申上、到志布志以書狀申入候処
 ニ、如此從 龍伯様之御返事にて候、被入御念たる御文
 牋之間、爲御心得則御狀を持せ進之候、就中上方之使、
 鹿兒嶋へ可被相越やうに思召御書面ニ候、於爲其分者、
 乍不申別而被入御念、諸篇被仰付肝要ニ存候、彼使者鹿
 兒嶋迄可被罷通事者、御用捨も可入欵と存候間、今少
 龍伯様へ被得御意、同者富隈へ鹿兒嶋之御造作にて逗留
 候やうニ有度候、旅庵も夜前此方へ致下着候、様子ニも
 明日邊も其方へ參上申候やうニ可申付候、仍新納新八郎

・喜入攝津守・川上助七等、已上五六人ほと罷下たる由
 候、就夫或人の申候者、京都にて暇之儀を不申究、走候
 而罷下候やうニ承付候、於事実者、上方ニ而最前道正宗

固・御家門様へ依爲申上、内府様へ被得御内證を、爲
 御抱被召置たる由候処に、如此之仕合者、跡ニ而 御家
 門様・宗固可及御迷惑儀治定たるへく候、然間能々御糺
 明候而、右之旨事実候者、可有見參事をも被指止、傍に
 令逼塞、自上方御尋候共、此方にハ無御存通可有御申覺
 悟尤ニ存候、但かやうニハ申なから、彼人々之口柄共を、
 我等者直ニ不承候間、先以他言なく御聞合有へく候、免
 角我等存候者、從上方御尋ある程之牋にて候者、以之外
 事六ヶしかるへく候間、いかに詞をたくミ申され候共、
 上方も之引付なと於無之者、能々下衆などの口をも被聞
 合、尤に存候、何も爲御納得候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
 「慶長六年」卯月四日 惟新(花押)

少將殿

まゐる

〔此御書、家久公御譜中ニモ在リ〕

〔御文庫四拾八番箱中〕

1499

「御文庫四拾八番箱義久卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

童伯様御書面、令拜見候、然者今度從上方之使者、當所へ可被差通やうニ思召御書面ニて候、我等存所も各申分も、當所へ被罷居候てハ、彼是不可然儀迄たるへく候由、申事候条、宿之儀をハ富隈へ被仰付候へ、造作之儀ハ此方より可申付由、はや一昨日申上候へとも、猶以よく爲可申分、只今又使者を進上仕候、旅庵も夜前致下着候哉、やうす念比ニ可被聞召届候、如何様此方へも可參候間、委可承候、次五六人罷下候衆之儀ニ付而、御内意之趣驚入候、不可存油断候、誠惶敬白、

卯月四日 少將 忠恒(花押)

維新様 參尊報

旅庵下着之由候間、定而上方之儀委被聞せ候覽与存候、仍和久甚兵衛尉殿事、此度者富隈へ宿之儀難成之通、先日達而申候処、頻被仰越候条、又々成間敷之段、爲可申達進一人候、鹿兒嶋へ逗留候てハ、可惡由候者、何方成共御分別次第第二候、とかく富隈へハ難成候、恐々謹言、

〔朱力申〕 〔慶長六年〕卯月六日 龍伯(花押)

1500

「御文庫四拾八番箱中」「義久公御譜中ニ在リ」

少將殿 參

猶々偶思召立、其堺被成御覽儀共、尤肝要之御事ニ候へ共、彼使者殊外いそき被申候間、先々御歸鞍可目出候、然者談合之儀も急可被申通申付候、さてハ利安・抱節事、早々御談合ニ罷出候様ニ可被仰付候、隨而おくへ參候御文之通、誠々御念之入たる御事ニ候、委細奉得 其意候、

尊札拜見仕候、仍上方之使就下向、御談合爲可聞召、從其地直鹿兒嶋へ可被成御越之由、最前已來數度申上候、右之使へ茂、尊老様鹿兒嶋へ御越候而、御返事之儀共御談合可申条、其間乍無心可被相待通申理候仕と申、今度之御談合一大事之始末欵と存候間、何共得 御意候へて不叶事ニ候、就夫今朝も御越奉待通、使者を以申上候、猶以同篇ニ存候間、早々 御光儀所希候、誠惶謹言、

〔慶六〕

卯月十三日

少將

忠恒(花押)

龍伯尊老様

尊報

1501 「義久公御譜中」

「此本在御文書方」

慶長六年六月廿三日、大中追膳に、

龍伯

夕立のやとりかにしの天つ空

1502 『在新納氏』

俄上京之由、霖雨之節御難儀察申事ニ候、然者御國御仕合結講ニて珎重候、將又目錄之通令進之候、遙不得思慮、近日參越憑存候、恐々謹言、

「慶長六カ」

卯月廿四日

新納旅庵老
(長生)
御宿所

本多佐渡守

正信花押

1503 「正文在土持孫兵衛家」

加増目錄

日州諸縣之郡 末吉

南鄉村之内

高五百斛

已上

右知行、爲加増被宛行者也、

慶長六年

卯月廿五日

比志嶋紀伊守
國貞判

鎌田出雲守
政近判

平田太郎左衛門尉
増宗判

圖書頭

忠長

土持次郎九郎殿

1504 「家久公御譜中」

「正文在了順」

爲端午之祝儀、帷子五、内生絹四送給、爲悦之至候、委

細石川左衛門大夫可申候之間、令省略候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長六年款」五月朔日

家康(花押)

薩摩少將殿

1505 「御文庫ニ番箱義弘公ニ卷中」

猶以源右、早々可被下候、急申儀ニ御座候、以上、
追而令啓上候、度々申入候へ共、御返事無是候、本田源
右事、定御用可有御座候へ共、是非共早々可被越置候、

書狀にて申達儀にて無御座候間、口上ニ申入候、然間具不及申候、可得御意候、恐惶謹言、

五月五日

安宅三河守
秀安(花押)

義弘様
參人御中

1506 「御文庫」番箱家久公拾卷中「家久公御譜ニ在リ」

以上

其後者不申通候、仍今度拙者罷下砌、從内府公被仰出者、其表御侘言之筋目在之条、堺目等之儀、可成其意之旨候、如何被調候哉、就其去朔日ニ御侘言相濟、此表人質可被差上由、其方堺目之番衆ノ預案内之由、水俣ノ申越候、然共其以後様子不相聞候、如何相滯候哉、無心元存候、御侘言筋目ニ付而、貴所御上洛之由候、此邊於御通者、以面可申承候、自然滯儀候者、相應之馳走可申候間、不被置御心可被仰越候、公儀少も疑敷儀無之候間、其心得候て聊無御疑心、御侘言之筋目可被仰調事肝要候、若又御侘言於被打捨者、上意次第堺目等之儀、可成其意候、猶追而可申述候、恐々謹言、

加主計

「朱カキ」
「慶長六年」五月廿三日

嶋津圖書頭殿
御宿所

清正

1507 「福昌寺文書」

一唯恕參様御石塔并御葬所爲洒箒、鵝目千疋号祠堂物被寄進候、以此旨、到後年拂除等無断絶之様、主務之僧衆へ堅固可被仰渡事、本懐候、抑恕參様御恩情不淺故、雖爲微少之法物、頭寸志奉營之者也、仍狀如件、

慶長六年五月廿三日
平田太郎左衛門尉
増宗(花押)

福昌寺
衣鉢閣下

1508 『飯野瀧足寺文書』

知行目録

隅州桑原之郡 栗野之内
北方村辻之門

高百拾石一斗一舛六合

同所 坂本屋敷

高四拾六石三斗三升四合六夕

同所 紙漉之門

高四拾三石五斗八升二合六夕

惣合貳百斛三升

右知行之儀、白鳥權現御宮作成就之間、可被付置之由依被仰出候、代官被仰付候、夫仕入目等、無吳儀代官江被仰談、御宮作不可有御油断候也、

慶長六年

五月九日

鎌田出雲守

政近判

比志島紀伊守

國貞判

平田太郎左衛門尉

増宗判

圖書頭

忠長

白鳥山
座主

1509 『在本田氏』

貴老上洛之刻、銀子貳百五十八文目程相渡候、此内主従六人之三ヶ月之飯米ニ何程、御内衆之衣裳分ニ一人ニ付何程、遣銀ニ何程と御書付候而可給候、盛之日記見申候間、如此候、右之銀子拂様之事、念比ニ書記可給候、恐

惶謹言、

「慶長六年」

五月廿五日

有川与左

貞政(花押)

本田助允殿

人々御中

1510

覺 「公儀へ指出候留 當書有川与左衛門殿へ」

一銀三拾四匁 米式石七斗

主従六人上下向七十四日分飯米也 此内かん米者斗式升

一同六拾匁五分七リ

宿質・駄質・淀舟質、其外種、隨之細遣方、

一同廿六匁八分 錢四貫文

井伊殿貳貫文、山口殿へ壹貫文、勝五兵衛殿へ壹貫文、

一同五十匁ハ

小者夫丸五人遣料

一同廿匁ハ

小者老人之身代

一同卅貳匁五分

右五人之衣裳調料 但布籠五、帷子五、

一同廿匁ハ

小袖之表卷ッ代

一同十匁五分

右之うら片色一代

一同式匁五分

右わた六十匁之代

合式百五十六匁八分七リ

此外かん卷匁者分三リ

慶長六

五月廿五日

本田助丞判

有川与左衛門尉殿

まいる

「大口家原氏藏」

領知目錄

馬越之内

前田 中田一反九畝廿分 二石三斗六升

ころの

中右衛門尉

坂本之内

石はし一反九畝五分之内
上田九せ廿分 一石三斗五升三合

別當

西の原 下島八畝廿四分 五斗二升八合

九兵衛尉

同所 下島四せ 二斗四升

助五郎

同所 下島一せ廿二分 一斗一升三合

善四郎

同所 下島二畝十二分 一斗四升四合

助兵衛尉

同所 下島三畝廿二分 二斗二升四合

与三左衛門尉

同所 下島廿歩 四升

甲斐

合五石一合

慶長六年五月廿九日

(新納忠元)
爲舟判

塚脇常陸守殿

「家久公御譜中」

備前中納言秀家卿、逃出於上方到著於薩州山川、通述情旨於惟新公、公忽使伊勢平左衛門尉・相良新右衛門尉赴

其地、不審、未知何故實者也、

「御文庫四拾八番箱義弘卷中」家久公御譜中ニ在リ

猶々相良新右相違申事候者、鹿嶋右衛門尉をと申遣候、龍伯様へも可申上候へ共、別之子細無之候間、

明日も被相心得候て、御申あるへく候、

山川へ着船候京衆之申分爲可承、伊勢平左衛門尉彼地へ可指越之由、龍伯様貴所御談合ニ而承候、尤ニ存候、

然共鹿兒島・富隈之間より今一人被仰付候而、兩人ニ而可承事、可然存之条、それより可被仰付之由、可申事ニ

て候へとも、左候て程移候へハ、何たる急用にても坎可

在之候哉らんと存、相良新右衛門尉鹿兒島に在之之由候

ま、從是申付候、爲御存候、就之我等存候者、此度被仰上京都への御意趣等、自然可相易儀も可在之哉と存候

間、龍伯様へ被得御意、御同心に思召候者、右之申分可相聞由を、いつかたへ成共、和久殿を御またせ候て者いかゞ可在之候哉、爲御心得如此候、恐々謹言、

少將殿

床下

「采カキ」
「慶長六年六月六日刻戌
惟新(花押)」

「御文庫四拾八番箱中」義弘公御譜中正文在吉田衆川田城介トアリ

猶々いそぎ申候間、よめ申ましく候、以上、

平左衛門尉山川へ御遣候哉、尤存候、然者相新右衛門尉被仰付候哉、一段尤ニ存候、爲何事共に候哉と、こゝもとも申事ニ候、いろくうらかた共申候へ、めてたき事と申候まゝ、早々承度との申事にて候、將又 龍伯様へも右之御狀之通可申上候、恐惶敬白、

〔殿六〕

六月六日

忠恒(花押)

少將

惟新様

人々御中

忠恒

1515 「御文庫拾六番箱十卷中」

起請文前書之事

一 今度福嶋左衛門大夫殿へ、御使として罷上候ニ付、御意趣共被仰聞候、勿論御意趣御存知之外之人數へハ、一言ももらし申ましく候事、

一 於福嶋殿 竜伯様 惟新様 少將様御爲、可悪やうニ申成間敷事、

一 御家中之物沙汰、御家國之御爲可悪儀、福嶋殿其外誰

人ニ到も申まじき事、

右之旨於爲申者、

奉始上〔牟志〕梵天帝釈四大天王、下堅牢地神五道冥官、惣而日本國中大小神祇、別而當國鎮守正八幡大菩薩并霧島六所大權現 新正八幡大菩薩 薩州之鎮守新田八幡大菩薩 開門正一位 諏方上下大明神 稻荷大明神、殊者愛宕山大權現 十二天狗 八天狗 天滿大自在天神御部類眷屬等、神罰冥罰〔ヨメス〕者也、今生而者武運冥加盡、後生而者墮无间獄不可出者也、仍起請如件、△

慶長六年六月廿三日

健軍猪右衛門尉

惟古(花押)

伊勢平左衛門尉殿

1516 「御文庫二番箱家久公拾卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々我等名之事、先度者成元と申候へとも、さしあい御座候間、休復とかへ申候、爲御心得如此候、以上、

今度者身上之儀奉頼罷下處、無別儀御許訟、誠以忝次第、申謝候、殊重疊御懇之段、更ニ難申伸候、頓以本札可得貴意処、却而如何ニ候、延引背本意候、猶伊勢平左衛門

尉殿申入候、恐惶謹言、
〔朱カキ〕
慶長六年六月廿九日

休復(花押)

羽少將様
人々御中
休復

1517

『在官庫』

(本文書ハ一五一六号文書ト同文ニツキ省略ス)

「家久公御譜中ニあり」

1518

「財部日光神社由緒」

隅州曾於郡財部日光神村内知行目錄

修理田
下田五段二畝
浮免
甚四郎

六石式斗四升
下田老段四畝拾二步
北俣谷門村之内
弥七

同所
下田三段二畝
谷門之内
三郎右衛門

二石五斗六升

同所
荒島廿步
右馬丞

五斗三合

分米斗代

合拾石者

親權祝子之事、庄内御弓箭之刻、度々御陳所へ祇候仕、
別而御奉公可申上之由、言上仕儀顯然之故、既罪科被處
之段、無其隱之間、彼爲忠節、右知行被宛行者也、

慶長六年

六月吉日

山田越入

理安判

伊集院下入
抱節判

權祝子太郎殿

1519

「家久公御譜中」

猶以井兵少々以書狀可被申入候へとも、関東下向之
儀候条、無其儀候、定而近日可被罷上候間、其剋可
被申入候、判形可仕候へ共、眼病散々之儀候条、無
其儀候、

先度者一成掃部兵衛方被差上、様子具承届、大慶奉存候、
然者先御同名圖書頭殿御上洛之旨、尤可然奉存候、雖然
順風如何御座候哉、到于今無其儀候、定而近日可爲御上

と相待申候、爰許様子相易儀無御座候条、御心安可被思召候、具ニ可申入候へ共、桑野如存眼以外相煩、無正躰仕合候間、不能濃筆候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長六年〕

七月四日

山口勘兵衛

直友 ○〔墨印〕

少將様

参人々御中

1520 「御文庫廿三番箱家久公十六卷中」

(本文書ハ一六五六号文書ト同文ニノキ省略ス)

1521 「御文庫廿三番箱十五卷中御案文」

〔義弘公御譜中案文在新納仲左衛門忠雄トアリ〕

不寄存時分、預御使札候、寔如遂面上満足仕候、殊天草郡御拜領ニ付而、其表へ御越之由候、近所与申、我々式迄別而目出度存候、隨者山口勘兵衛尉殿使者・旅庵同心申候而罷下、内府様御意之通承届、其御礼爲可申上、少將々茂鎌田出雲守爲使者指上申候、定而此比者可爲上着与存候、仍京都へ使者など被指上候ハ、船以下可有御馳走之由、是又御懇切之至、畏入存候、此比ハ使者を申付度存候へ共、通路難成候故、存絶候砌、幸ニ存、一

人可指上覚悟ニ而候、委曲少將方々可被申候間、御入魂

奉頼候、猶御使者へ申入候条、不具候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長六年〕七月十一日

惟新

寺澤志摩守殿

御報

1522 「御文庫四拾八番箱義久卷中」

猶々和甚より出雲めしよせ候て、早々談合定メ候へト、シイテ被申候間、出雲此方へ参候へト申て候へ共、御歸宅にて候条、先さしと々め申候、其方にて平さへもんなとめしよせ候て、御談合可被成事尤候、さてハ是ヨリモ抱節・利安ナントモめしよせ候するかと存候、御心得ため令申候、此状ハいつミへ参候するとして、きのふした々め申候狀にて候、態用飛札候、仍此狀従上方貴所へ参候を、便宜之刻、失念候て、只今進之候、將又和久甚兵下國之後、山勘兵衛尉殿より被差下候書狀、前日進覽候つる、彼一儀弥更并和甚被申候、其心得尤たるへく候、猶期後喜之時不具候、恐々謹言、

文月十三日

龍伯(花押)

1524

1523

少將殿

「御文庫二番箱家久公拾卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

貴札忝拜見仕候、如被仰下候、去時分兵庫頭殿ヨリ預御使者候刻、御内意之趣達 上聞、及貴報候処、爲御札以使者被仰上候、大御所様駿府ニ被成御座候間、御使者致同道可遂披露候處、當地御普請已下御用被 仰付、罷在儀候間、上野介かた迄委申遣候、前篇御前之様子、上野介存知之儀候条、御仕合能有御座与奉存候、度々如申上候、貴公様被仰談上者、兵庫頭様御事御同前ニ、少も御等閑無之儀候条、弥以其御心得肝心ニ奉存候、委曲爰元之様躰、御使者可爲演說候間、奉省略候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「慶長六年」

七月十七日

本多佐渡守

正信(花押)

羽柴陸奥守様

貴報

「御文庫二番箱家久公拾卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

去十一日御札、乍御報拜見申候、山口勘兵衛殿へ使者旅

1525

庵ニ被指副ニ付、爲御札御使者被指上候、就其直御使者

可被指上候条、舟以下之儀可申付候旨、得其意存候、則

牟岐八右衛門天草之内久玉まで指出申候条、可被仰付候、

龍伯・兵庫殿へ以書狀可申候へ共、別条無御座候条、無

其儀候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「慶長六年」

七月十九日

寺志广

正成(花押)

羽少將様

人々御中

「御文庫四拾八番箱義弘公三十卷中」「義久公御譜中ニ在リ」

猶々迎之儀、船を可指遣候まゝ、可安御心候、

尊書拜見、畏存候、如御意彼一儀之相談事濟、先以珍重

奉存候、誠最前以來、我等を被相頼躰ニ而被指越候処ニ、

無其甲斐儀共、笑止千萬ニ存候、併被任責命之条、非私

之謀候、就其一人此方へ可被相越日限之事、尤之御念遣

ニて候、御指圍之様「因ノ字也」に、來廿三日四日兩日をさして可申

遣候、然者於鹿兒嶋右之一人、爰元へ越着之砌者、抱節

被相越候様にと、談合相濟候由、伊平左申事候間、彼日

限ニ者必相待可申候、恐惶謹言、

兵庫入

〔朱カ半〕
一慶長六年七月廿一日

進上 龍伯尊老様

惟新(花押)

〔上包〕
進上 龍伯尊老様

兵庫入道

惟新

1526

〔御文庫拾七番箱十五卷中〕

敬白 起請文之事

今度就 御弓之儀、被 仰聞条々、曾以他言申間敷候、

右之旨於偽申上者、

▽奉始上梵天帝釋四大大王、下堅牢地神冥官冥衆、惣者日

本國中六十余州大小神祇、別者薩州鎮守新田八幡大菩薩

開門正一位 大隅正八幡宮 霧島白鳥兩大權現 日向妻

万五社大明神 鹿兒嶋鎮守諏方上下大明神 稻荷大明神

戸柱 若宮 春日大明神 愛岩大權現并大天狗 小天狗

天滿大自在天神御部類眷屬等、神討冥討可罷蒙身上者也、

仍起請如件、△

慶長六年 辛 七月吉日

國分拾右衛門尉

貞友(花押)

1527

〔御文庫拾七番箱十五卷中〕

敬白 起請文之事

就弓稽古被 仰聞候条々、曾以他言申間敷候事、

右之旨於偽申者、

市來八左衛門尉殿

顯娃主水佑 親知(花押)

本田弥六 親孝(花押)

平田新四郎 昌宗(花押)

鎌田長左衛門尉 政辰(花押)

平田作介 宗信(花押)

小嶋勝介 正綱(花押)

西之原次介 友次(花押)

敷祢三十郎 賴莫(花押)

顯娃弥一郎 忠富(花押)

『在小根占園林寺』

知行目錄

▽^(牛王)奉始上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神、惣而者日本六十

余州大小神祇、別者薩州鎮守新田八幡大菩薩 開門正一位 大隅正八幡宮 霧嶋白鳥兩大權現 日向妻万五社大明神、殊而者鹿兒嶋諏方大明神 稻荷 戸柱 若宮 春日大明神 愛岩山大權現并大天狗 小天狗 天滿大自在

天神御部類眷屬等、神爵冥爵可罷蒙身上、於現世者受白黒癩之大重病、於來世者可墮在無間地獄者也、仍起請如件、△

慶長六年

夷則吉祥 日

大貳(花押)

高崎弥六

能宗(花押)

白濱三四郎

重次(花押)

市成左介

秀武(花押)

川上源三郎

久□(花押)

三原太郎左衛門

重貞(花押)

小根占村之内

一 甚五郎屋敷

高式拾石

右之地、爲新知令支配者也、

慶長六年

七月廿五日

山田越前入道

理安判

伊集院下野入道

抱節判

園林寺

『雜抄』

態令啓入候、仍上着以後者未申通候、爰許之様子承定候て、可申下格護ニ御坐候而、只今迄延引ニ候、餘御心許なく被思食候はんと存候へへ、當時之分一条書申候、

一 去月二日ニ細島を致出船、同拾二日ニ室津へ致着船、翌日彼津迄參着候由、山勘兵衛殿迄以書狀申上由候事、一同十三日より拾九日迄順風惡候而、室之津江滞留候、餘迷惑ニ存、家島と申所迄、押船にて我々類船計罷出候、諸國よりの上船百艘余者、皆室之津江懸置候、然處不思議之順風ひる程より吹出、其夜大坂へ着船候、

是ハ御天道是非之外候事、

一同廿日之曉ニ、和久殿ニ我等使を相付、大坂迄着船候由、勘兵衛殿迄申上せ候事、

一薩广之御使差上せらるゝの由候て、兼日大坂之宿本共、伏見より御念を被入被仰付候事付、勘兵衛殿より御注進次第、伏見江可參候由候間、待居候處、明日三日ニ罷上候へとの承事ニ候条、其格護ニ候、然者伏見宿本之事も、町衆ニ私ニ而借候へとも、種々遠慮共仕候哉、宿本有かね候ツ、此由を聞食被通、直ニ内府様より本田佐渡守殿へ御承候て、伏見之町老町を被明、勘兵衛殿前より宿本被仰付候、是を以御方よりの御使と候て、御馳走之儀、萬端御分別可有候事、

一去廿四日ニ、長尾殿御自身上洛被成候、勿論尚井山城守御供被致候、其時分我等之使も有合候而、委見申候、景勝御手廻ハ、馬十騎計ニて候つるよし候、尚井山城守手廻ハ、馬三十騎余ニて候つる由申候、是をものはや京童之取沙汰、善悪ニ風聞候事、

一内府様江景勝御礼之事ハ、いつとなき由候、先大坂へ被差通、秀頼様へ御礼可有由相聞得候、是内府様よりの儀共申、又景勝其身之御好共申候、とり／＼の

沙汰ニて候、

一景勝御出仕ニ付、勘兵衛殿より我等所ニ仰下され候趣者、室津迄上着之一左右、又大坂へ上着之由、翌日申上せ候、兩度共ニ御上聞被成候間、前後之御沙汰有之之時者、景勝自身御上洛とは申なから、最前兩度被聞食候間、薩摩之御礼先御受取可有由候、此等之儀ニ付、入組共種々候事、御察ニ過候事、

一景勝御進物之儀、傳説候者、鷹八十もとすへ被上セ候、其内拾式もと・銀子千枚・さらしの布たるよし候、是ハ内府様江之御進物計之事ニて候事、

一薩州よりの御進物分量之儀、勘兵衛殿迄凡申入候処、内存共重疊承候条、爰許にて調替候題目、竜伯様少將様御連書、銘々之御書ニ罷成候、是ハかるからざる儀ニ候条、某存よる処種々申候へ共、伏見ハ被仰下旨、御理之様ニ承得候處、定而御兩殿様御別紙持參候らんとの儀ニて、銘々之御書ニ相きわまる儀ニて候、何共我等式之者老人之推量にてハ事餘る躰にて、致迷惑候事、

一圖書頭殿御上洛之儀ハ、御無用たるへきよし、はや被仰下候、併ちと承りとむる儀候条、我等罷在可得御意

覚悟ニ候間、御上洛之御用意御油断有ましく候事、

一 國本よりの御条書も、和久殿上之時、内々被達候、是も被仰替候、右ニ申ごとく、御書并御進物・御条書、

此三ツを被替候事、誠ニ格護之外ニ存候へ共、五日之内ニ和久殿兩度伏見へ上下候て、出入承候、道理ニ被押、其分ニ相定候事、

一 九州江御移之大名小名、御持共定まりたるよし申散候、とかくさのミ不入事ニ民之つかれ候事へ、何茂御用捨と聞得、并御遊山共も無之由、京都・大坂をはしめ皆其分ニ御坐候哉、四國・中國・東國迄も、大小共ニ城之御普請一方ニ候と聞得候、是を以御分別可入事候、大坂なども 大閣様御代ニ手廣被召成候、諸町皆引つほめらるゝ躰ニて候事、

一 頃京・大坂物沙汰候者、熊野々新宮殿薩广を頼候て、下向之由候、我々在國之砌ハ努々不承儀候条、無心元存候、備前之宰相殿ハ御はて候共申、又景勝・前田肥前守殿間を御頼候なとゞも申候、御はて候が治定ニ候哉と、過半沙汰にて候、何事も當代ハ廣太之御曖と諸人申候へ共、右之御兩人ハ 内府様御念不離と申事、一 武庫様去年爰許にて之御様子御別儀無之通、細々 内

府様聞召被通たるよし承及候、勿論終ニハ如此御坐候わんと存候つれ共、此節か様ニ思召まゝニ候事、御天道不淺儀ニ候、

一 三方之御役人江、銘々ニ如此之書狀進上任度候へ共、伏見江上前、御國本にてハ無格護事共多々承候付、取乱候間、先々聊尔ながら一札にて、御三人まで申候、向々御役人へも、細々御心得無申迄候付、我等上之路次、道具等百計ハ持せ候わてへと出合候間、是にて萬事を御校量有へく候、自今已後御調薄く候てハ、誰々御上洛被成候共、御大儀たるへく候、御物共させる御用なき事ニ散候わぬやうニ、御三方共ニ御役人中御念ニ可入事候、題目時分候間、くうさゐなから存する処申事候、猶期後音候、恐々謹言、

八月二日
〔慶長六年〕
〔鎌田出雲守〕
政近

伊勢兵部少輔殿
〔貞昌〕

本田源右衛門殿
〔親西〕

喜入大炊助殿
〔久正〕
御宿所

『本田氏藏書』

態用使書候、諸堺目普請之儀、此節別而可入念之通、皆
と申付候、其堺之儀も無油断可得其意候、猶山鹿弥助可
申候、恐く謹言、

〔慶長六年カ〕

八月三日

忠恒御判

本田六右衛門尉殿

〔正親〕

1531

〔御文庫廿三番箱十五卷中御案文〕〔義弘公御譜中案文在新納仲左衛門
忠雄トアリ〕

就御談合、富隈可被相越之由、御大儀ニ存候、自然風つ
よく候ハ、此方へ可有入御由、伊地知主計助を以承、
珍重存候、誠察候、不能面談□候間、本望存候、然ハ
旁く可申談儀共候条、必入御待入計候、恐く謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長六年カ〕八月六日

惟新

少將殿

1532

『榊山紹叙日記』

一慶長六年辛丑、鎌田出雲守上洛候而、山口方取次ニ而、
内府之内本田佐渡守江取合候、又ハ猪野侍從与云人江
取合候而、此弓箭今分ニ而候、嶋津殿江別而自今ハ仰
合せ候するにて候とて、御神文なども出候て、雲州歸
國候、京都之分如此候、早く御上洛專一候と頻ニ申候、

扱ハ 龍伯上洛候得、内府御用之子細候と被仰候也、
從爰元者 龍伯上洛候而、武庫之儀可被仰候、左様ニ
候ハ、我京ニ而御閉目可有候、國元之事ハ、又八郎
殿御分別と被仰候、武庫ハ又、我爰許ニ而も、又ハ京
都ニ而も、生害可仕候、可安御心候与仰候處ニ、國中
之者共者申候由有、何事も今迄ハ上意次第と計申候、
猶く其分ニ而社候半なれ共、乍憚申上候、先年石田ニ
被引入候而、國々乱出合候之事心外至也と思召候事、
京ニ而誰かハ申分、誰かハ聞分候半、唯ぬき手ニ合而、
處ニ而 上様何欵と御坐候半ハ、國許ニ而御家亡
候ハ、我々式之者迄も御目之前ニ而戰死仕候而社、
本望ニ而候はめ、是非爰元ニ而思召切候する事目出度
存候与、各々神水を吞、身之血出し、起證文を捧ケ一
身同心ニ申ける、就其大隅早人之城・蒲生之城取擡候、
此等之物音、京都へも聞得候哉、山口方色々被申候へ
共、諸侍日本國を何とも不存、死去不知之者共也、懸
處ニ又八郎様被仰候事ハ、龍伯・武庫被仰候事も理ニ
而候、唯我御上洛可有と頻ニ被仰候、諸人は又有間敷
御事也、御兩殿之御上せ申候も、唯若殿様の御爲也、
上意不可然候と各々申候、然處ニ御談合之内ハ、御當

家ハ御慮神迄之儀ニ候間、神慮を受御申候而、御上落可然と共に申候へハ、左も候半哉と出合候、御神慮可然候とて、御文度何かと候而、慶長七年壬寅秋ニも成候也、

一慶長五年の極月、御分國中風聞申候へ、上方勢薩州江罷下候様ニ取沙汰有之、扱又肥後熊本城主加藤主計頭清正近國の諸大名内意ニ而、同國水俣江をし寄候由、依之、惟新公御事ハ蒲生の城へ御籠可被遊由にて、夜白御普請有之、御普請差圖人松岡勝兵衛、井戸口北之方尾先ニ矢倉上げ、御城内ニ諸士被召移候、勝兵衛矢倉御番ニ被召移候、此時被召移候人數、和田圓覚坊・木脇刑部左衛門・押川郷兵衛・猿渡忠左衛門・大村市兵衛・井尻半兵衛・米良伊豫守・松下治右衛門・木原四郎左衛門・安藤權右衛門・家村李之允・山内傳右衛門、此時も諸士へ被仰渡候、

掟

一諸侍何篇申付儀、於相應之儀者、不可致難澁、若及異

旧記抄

儀者、可有其沙汰事、

一武器無油断可誘事、付百石付而具足一領つゝ可致用意事、

一出陣之時、廿五石取之衆者、可爲自賄事、付廿五石之内之衆も門屋敷持者可爲自夫事、

一殿役於不相勤者、門壹付而、領主之知行老石可被召上事、付百姓無之門屋敷たり共、領主前より殿役者可仕事、

一諸侍番普請狩等若懈怠於有之者、可爲曲事、自然三度におよハ、可没取所領事、

一上下によらず喧嘩可爲停止、縱無理非道をしかくる者ありとも、其場を致堪忍可遂言上、若私にて事を於破者、不及理非之沙汰、雙方可加成敗事、

一諸外城衆中、諸事地頭之下知不可相背、別而於戰場、地頭之手を離、他之手に付、いかやうの高名仕候共、不可爲忠節、曲事之段可申付、若又地頭無理之儀あらハ、可致披露事、付出陣之時、小給人衆者、從在所持具自身可持之事、

一於戰場無御免衆、乘馬可爲停止事、付へんたうの類、其外手おもき道具不可持之事、

一 百姓耕作、卯の時に、戌の刻に可歸事、付女ともさ
くに可出事、

一 悴者百姓已下によらず、はしりたらん時、互許容いた
すへからざる事、

一 諸侍めしつかふ者、男女によらず、日夜片時いたつら
に居ましき事、

一 就用段めしよする仁、遠近によらず、移時日へからず、
打立之儀、或ハ供、或者使飛脚等にいたるまで、差當
たる日限不可相違事、

一 縁者親類を催、一揆いたす事あらハ、本人之儀者不及
是非、同心之者ともに可成敗事、

一 つねの振舞二汁二菜、しほ・さんせうハ此外たるへき
事、付私之大酒可爲停止事、

一 毎度出物之儀、日限に過、無沙汰之ものあり、如此之
類、後日其科可有糺明事、

一 右條々、若違犯之輩有之者、到侍者、必可没取所領、
於凡下者、堅可加成敗者也、

慶長六年八月七日

忠恒(花押)

惟新(花押)

竜伯(花押)

1535

「此正文、三番箱卷二ノ中ニ在リ、誤ヲ糺ス」
「義久公御譜中ニ此捉書アリ」

『雜抄』

猶々其元御辛勞察存候、圖書頭殿事者少御快氣之様
ニ候間、可爲御上洛候、可御心安候、

幸便之条令啓入候、今度市來掃部兵衛尉前々申下候趣者、
龍伯様爲御迎、上方より色々之仁可有下向由、下説候、
自然 御家門様御下國候する坎与、御出合共在之由、注
進候、左様ニ候てハ、笑止千萬たるへく候、縦雖御下向

候、此節御上落之儀者、曾以罷成ましく候、貴所如御存
知、當國中衰微故、諸式不相調候間、何として可罷成候
之哉、此旨を以可被申調事尤ニ候、題目御下向ニ而、

龍伯様無上洛候へハ、弥々御當家之迷惑ニ候、爰元難成
条々者、洩底御存知ニ而候間、有様可被申達事肝要ニ候、
爲御心得候、恐惶謹言、

爲御心得候、恐惶謹言、

〔慶長六年カ〕

八月九日

山越入

理安判

伊下入

抱節判

鎌田出雲守殿

人々御中

「御文庫拾六番箱五卷中」義久公御譜中ニ在リ

態令啓達候、昨日拾日ニ内府様御前罷出候、爰許御仕合無殘所、御意無申計候、

一日州坂より下之事、無御別儀相濟候、所務等之事涯分念を入、可被仰付事、

一龍伯様御上洛之儀、急ニと被仰出候、就夫旅庵・我等事茂早ニ罷下、爰許之御仕合可申達由被仰出候、先書ニ申下候こととクニ、圖書頭殿御上洛之儀ハ爲御無用之由、早ニ大坂ニ罷着候ヘハ、京都より承事候、是茂龍伯様御上洛急ニと被思食儀欵与、于今存合候事、

一三河殿・景勝・前田肥前守殿出仕ニて候、肥前守殿ハ我々同日ニ御目見ニて候、其外関東衆も在伏見ニて候、諸人申候ヘ、大閣様御次代より、頃者御進物一段おひたしき由申候事、

一御國よりの御進物、何も一倍ニ罷成候間、代官兩人も仕かねられ候、借用有かね候て、迷惑御察ニ過候、

一爰許ハ日ニまし御靜謐ニ候、万端是を以御校量候者、可致首尾候、不入風説共ニ御かもひ候事ハ、勿論御座有間敷候、

一御自身御上洛不被成處ニ、御國本之儀共思食まニ相

濟候事ハ、嶋津殿御一人ニ限たるなと、上下沙汰ニ

て候、是を以御上洛之儀、彼是御分別可參事ニ候、

一佐土原之儀ハ無御納得由、唯今迄ハ承事候、何共笑止ニ存候、

一爰許御進物ハ唐物題目たるべく候、此度も御進物ハ白糸・紅糸などニ罷成候、京境も唐物拂底候て、以之外高直ニ候、金銀ハはへ不申候、其故ハ銀子千枚、二千枚ツ、黄金ハ二百枚、三百枚ツ、御進上有御人數多ク御座候間、此旨爲御存知候、

一山勘兵衛尉殿事者不及申、本多佐州今度始而被仰通候處ニ、別而被入念御國之御爲ニ成候、是又折節ニハ可被仰通事、御失念有間敷候、猶期後音時候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長六年」
八月十一日
鎌田出雲守
政近(花押)

山越前入道殿

伊平左衛門尉殿

比紀伊守殿

平太郎左衛門尉殿

伊下野入道殿

參人ニ御中

知行目錄

薩州加世田之内

小湊村

中の塩屋やしき

宮の後(一)
下田三反五畦廿分

助五郎

ぬいたう脇
山畑二畝廿分

同人

くぼり
下島二反十二分

同人

同所
下島一反二畝廿分

同人

屋敷一反一畝廿二分 一石一斗七升三合三夕 同人

ひかんでん五反六畝十二分之内
下田一反八畝廿四分 二石二斗五升二合 源兵衛尉

惣合拾石八升

已上

右知行之事、先年 日新様雖被成御寄進候、此間者任天

下御下知勘落候之處、今度可被相付之由、少將様被仰出

候間、全可有領知者也、

慶長六年

八月十六日

比志嶋紀伊守

國貞(花押)

鎌田出雲守

政近

平田太郎左衛門尉

増宗(花押)

圖書頭

忠長

熊嶽

寶福寺

「家久公御譜中、正文在川邊寶福寺トアリ」

1538

「義久公御譜中」

慶長六年、使鎌田出雲守政近報謝于本多佐渡守正信・井伊兵部少輔直政及山口勘兵衛尉直友曰、我無所犯之罪、忽被列于逆亂之徒、負岡赦之罪者、所以時運之令然乎、

雖然 内府之垂寬仁、我有上京則宥其罪、欲國家之無煩亂、是真所以昊天之恩難盡報也、且復正信・直友以誓文示其無疑、

1539

「世錄記」

一慶長六年、令鎌田出雲守政近禮謝於佐渡守正信・兵部少輔直政及勘兵衛尉直友曰、運逢艱難之時、得此不意之災、誤入逆亂之中、負此岡赦之罪、而天網恢廣許我上京、所以昊天之恩難盡報也、正信・直友以誓文示其無疑、

1540

〔本文書ハ一五四七号文書ト同文ニノキ省略ス〕

〔此起請文、義久公御譜中ニ在リ〕

1541

〔義久公御譜中〕

〔此本在御文書方〕

慶長六年八月廿五日、伊作天神法樂、

龍伯

たつ霧もうへにのほらぬ鳴ね哉

1542

『雜抄』

熊嶽江先年 日新様以御判、しほや壱間被相付候、其地

へ有之由候、近年雖被成奇破候、今度又被成御付候、被
相糺無吳儀可被引渡候、巨細へ御使僧可申候、恐く謹言、

三月四日

平太郎左

増宗判

本田助左衛門殿

御宿所

1543

『鎌田氏雜抄』

猶以先日へ爰許迄御上候て、萬事御懇志之段、過分

ニ存候、其已後可申通を何くと取紛、無沙汰ニ打過

候、何も後面候て申承へく候、以上、

急度令啓候、仍其地へ有之 竜伯様 少將様御屋敷并御

船、如前く御様本マ、にて候、然へ船之事帆敷・船敷格護之人、

細くニ付糺給へく候、御屋敷之事、何之町すちニ口何間、

入何間と相究、當時なたる人預にて罷居候哉、尋糺書

付可被遣候、我等其許迄罷下候わん刻、あらため可申と

存候處、依御急ニ如此候、隨分念を入候て書付可給候、

同名任齋御息弥三郎殿此方へ御越所希候、恐く謹言、

〔慶長六年〕

八月廿三日

〔鎌田出雲守〕
政近

宗也齋

任齋

御宿所

1544

『在鎌田氏』

幸便之条令啓達候、

一 御前様へ御書并早打兩人を以、爰許辛勞之由蒙仰候、

忝奉存候事、難盡紙面候、

一天下一統御靜謐之事、先書ニ申下候ことく、違儀無之

候、

一 去年被對 内府様ニ被敵候御人數、大名・小名・御馬

廻・御小姓衆ニ迄知行ハ被離ニ相濟候、併其内ニも能
ク聞得たる申分ニハ、安堵可有由申候、

一 島津様など御事ハ御父子御在國ニテ、逆乱之儀一圓ニ
無御存ニ相濟候故ニ、御國さのミ入組無之候、其さハ
武庫様御在陳之儀ニ付、卒度被仰分共候、

一 景勝事一人にて御勢を引請、存分之願候ヘ共、不叶ト
被見及降參被成候、是ハわうしやくも弓捕之有習ニテ
候間、御手ヲ可被付由候て、已此中之百万斛ハ、内府
様之御子御万申候ニ、尚井山城守子ヲ景勝養子ニさせ
られ縁中を組、むこ養子と号相續之由候、景勝知行未
被定と申者、隠居分之事ニテ候、是も一郡と候つれ共、
二郡相加三郡ニ成と申候、在所ハ今ニ不知候、

一 御知行賦之儀、如右以之外御穿鑿之上ニテ有之儀ニ候
条、佐土原之儀中ノノ罷ならずニ而、已ニ物主を御定
有ニ究候つるを種々申上、先當年之儀を申述、爲浮所
山勘兵衛殿之人數を被差下見舞被成、 竜伯様御上洛
迄を御待候ヘと申捕候、先々右之分ニ相定候、然間自
今已後ハ依御申様ニ、御利運ニ可罷成儀ニ候、佐土原
様子ハ相良豊前兵衛殿・河上六郎兵衛殿追々ニ下ニテ
候間、定可被申分候事、

一 先書ニ我等同心之人數、何も迎之儀申下候キ、然處ニ
其後近江伊井殿江參候ヘと、公儀より承候間、依夫
日數拾日余延引候、頃ハ病氣ニ被付候而過急ニ候ヘと

も、些取なをし候、今分ニ候ハ、廿日之前後ニハ出
船可致と存事候、其外同心之人衆下々ニ至まで無何事
候、御心安かるヘク候、必十日中ニ可得御意候、此由
長右衛門所へも可被仰聞候、

一 圖書頭殿御上洛之儀、最前ハ無用と候つるか、頃ハ拾
月中ニ上着可被成由被 仰出候、是ハ 竜伯様御上洛
年内と候つるか、正月迄もちと可述申かとかふき申候、
一 内府様ハ拾月拾日ニ關東江御下ニ相定候、已ニ御留主
之御番なども被仰出候、恐々謹言、

「右慶長六年八月比、政近案文歟」

1545
『執印文書』

右意趣者、於身上一世之間遁悪名災難、殊嶋津少將藤原
忠恒朝臣爲國家泰平、武運長久、息災延命、子孫繁栄、
諸願成就、太刀一振行吉、奉寄進之者也、仍願文如件、

慶長六年八月廿四日
嶋津兵庫入道
惟新(花押)

新田八幡宮社司〔御譜ニハ社内トアリ、非カ〕

〔上包〕 願文 敬白〔御譜ニ在リ〕

〔義弘公御譜中、正文在執印休左衛門トアリ〕

1546 〔義久公譜中〕

〔本文ハ一五三八号記事ト同文ニツキ省略ス〕

1547 〔在官庫〕

敬白起請文前書之事

一 龍白・同少將殿御身命〔イニ之儀トアリ〕 恙御座有間敷事、

一 御國之儀ハ、兼日如御約束相違儀御座有間敷事、

一 兵庫頭殿御事、右之御兩所〔イニ御字アリ〕 入魂之上者、無相違様御

取成〔イニ可申事トアリ〕

右之趣於違背者、

右梵天帝尺四大天王、惣而日本國中六十余州之大小之

神祇、別而伊豆箱根兩所之權現 三島大明神 八幡大

菩薩 天滿大自在天神部類眷屬、神爵冥爵各可罷蒙者

也、仍起請文如件、

慶長六年 八月廿四日

本多佐渡守 正信〔花押〕

山口勘兵衛 直友〔花押〕

嶋津修理太夫殿〔義久〕

羽柴少將殿〔家久〕

1548 〔宮之原越右衛門藏本〕

肥後表之人數芦北表江打渡候由、大口其表江申越ニ付、

拙齋被罷歸、又本田六右衛門尉も頼娃主水所迄、右之

趣申越たる由、富隈被仰聞候、萬無心元存候、然者

貴所爲御祈念、本田六右衛門尉へ矢入之祈念申付候、令

成就御札久富木掃部助へ持せて、夜前此元へ相越候而、

芦北表之様子相尋候へハ、少も替儀無御坐候、一昨日出

水を打立申候までハ、何たる子細も不承付之由申候、如

何在之事に候哉、又日州表之雜説も以之外之由其聞候、

是又如何候哉、彼是爲可承用一行候、其元之様子細々御

返事ニ可示給候、恐々謹言、

〔慶長六年カ〕 八月廿六日 惟新御判

少將殿 參

1549 〔御文庫拾七番箱十五卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶々御懇之儀共忝存候、次五明五本 照門様御歌被遊候間、進上之仕候、

從少將様預尊書、殊鹿皮三拾枚被贈下候、被思召寄御懇之儀、誠以忝奉存候、抑御無事之儀ニ付、被差上御使者候、無別義如御存分相調申由、尤以玆重存候、連々以御手柄故、急束相濟申事、御名譽之儀候、先々 照門様被成御音信候、一段御祝着候、以御書御礼被仰入候、御祈念之儀聊不可有御疎略之由、從拙者能々可申入旨候、於爰元御用等可被仰付候、委細鎌田出雲守方可被申入趣、可預御取合候、恐々謹言、

〔朱力キ〕

〔慶長六年カ〕

九月二日

伊勢(貞)兵部少輔殿

〔伊勢貞知〕
友枕齋

如貴(花押)

1550

『在官庫』

猶以貴國和談之儀、千万々々目出玆重存候、他事期後音不能詳候、於大峯、如例年御祈念之事、堅申付候、近日可爲出峯候間、追而可得芳意候、先便ニ者御急札數返令薰讀、即御返事申候キ、相達候哉、抑都鄙和談之儀ニ付而、爲御使鎌田出雲守上洛、

尤玆重候、然者早速無事之儀相調之由、千万々々目出候、殊諸事御勝手之様相聞候而、猶以玆重候、併御手柄候、向後万々如斯之儀、美譽芳聲不淺次第候、一白蓮種之儀被戴候由、先便承候〔一ニ段〕き、尤來年者可爲繁榮候、猶以於御用者、何時茂又可下進之候、

一秋蘭白并仙翁花之種、以後便之次申請度候、興國寺物語被申候ハ、四季ニ咲種、即興國寺有之由候き、普通之種者京都多候、

一先日者甘葛無御忘送給候、別而祝着申候、頓薰可調合申候、さか々此比可爲御調合与推量申候、京都ハ可然沈香無之候而、薰いづもより能もあるましきと存候、國々一段靜謐、諸人安堵此事候、内府之爲鷹、來月東國可被見廻由候、かしこ、

九月五日

〔昭高院如雪〕
(花押)

一羽柴兵庫頭殿

如雪

1551

〔在鎌田氏〕

昨日者從 龍伯法印爲使來臨、始而見參喜悅之至候、然者今日返事可相渡由、是非共今一度雜談申承度候へと、

明日下國之由候之条、無了簡候、殘多次第候、愚札共調遣之候、將亦此松茸一折任到來候、猶倉水主水佑可申候也、

〔慶長六〕

九月五日

〔龜山公〕
〔前久〕

〔花押〕

鎌田出雲守とのへ

山

〔義久公御譜中ニ在リ〕

1552

〔御文庫三番箱宝鑑中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶以鎌田出雲守別而口上無所殘由候、尤可有御褒美事候哉、

鎌田出雲守爲御使就上洛之儀、御懇札披閱本望至極候、仍 内府与御問之儀和睦之事、早速相調之段、誠大慶不可過之候、殊諸事貴國御勝手之由相聞候而、猶以珍重々目出候、武庫御問之儀、亦不可有吳儀之由、併御手柄候、行急不及申事候、先便ニも芳染槌相達候、將又爲御音信、生糸拾斤送給候、每々難申謝候、隨而御祈念之事槌承届候、隨分不可存疎意候、如例年大峯護摩之儀も堅申付候、八月下旬可爲成就候、未罷出日限候間、卷數等迫而可下進候、猶後音可申述候、穴賢々々、

〔朱力半〕
〔慶長六年〕九月五日

〔花押〕

羽柴少將殿

如雪

1553

〔御文庫三番箱宝鑑中〕「家久公御譜中ニ在リ」

今度無事相濟、被差上鎌田出雲守候事、尤珍重候、弥御國長久之基候、何様期後便候、將亦去年夏之比給候鳥犬、于今令秘藏候、男犬稀ニ候、從龍伯給候犬、中能候而子共令出來、一段重寶ニ候、馬鷹御數寄之趣承候、尤之事与存候、雖年寄候下國申、御伽ヲ申度念願候、天下靜謐之様候間、何篇不圖令下向可得御意候、不相替於無御疎意者、可爲本望候、急便之条令省略候、恐々謹言、

〔朱力半〕

〔慶長六年〕九月五日

〔花押〕

〔家久〕
四位少將殿

竜山

1554

〔御文庫御宝鑑中〕「家久公御譜中ニ在リ」

爲重陽之祝儀、小袖一重送給候、遠路之所祝着之至候、

猶伊那圖書頭可申候之間、不能具候、恐々謹言、

〔慶長六年秋〕〔慶長四年〕

九月六日 家康(花押)

薩摩少將殿

1555

〔御文庫廿三番箱十五卷中御案文〕「義弘公御譜中案文在新納仲左衛門忠雄トアリ」

ははん人いたミ屋助四郎事、可被行死罪儀定ニ候キ、弥可爲其分と存候、併頃者一向無其音間無心元存、爲可承如此候、各存之様ニははん御法度之事者、從 内府様依被仰付、我等御使申、曰少將殿以墨付ははん可爲禁制之旨、大明へ被仰遣候儀と云、出船之刻も不審成様子共聞付候間、 竜伯様へも及度々、彼いたミ屋事分明ははん之企仕候由承及候条、出船之儀御堅慮可入通申上候処、 竜伯様 少將殿を誑候事共、於條々曲事之子細ニ候、ケ様成儀者急ニ被唆候へて長引候へハ、逃走なと仕無念成儀共多々在之事、是非共早々最前相定如唆、急度可被相果事肝要ニ候、何共依返報可得其意候、恐々謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長六年〕九月十三日

惟新

平田太郎左衛門尉殿

比志嶋紀伊守殿

1556

〔御文庫拾七番箱十五卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

尚々書中恐多候へ共、御理可申上存如此候、以上、乍恐 少將様へ以御心得被仰上可被下候、今度 御書頂戴仕候、誠難有儀共候、殊御皮五十枚拜領、誠忝謹而拜見仕候、御礼申上様恐多候、可然様以御心得御申上候て可被下候、奉頼計候、仍鎌雲州爲御使御上ニ候、萬被任御意相調申由傳承、目出度儀共候、將亦賣來院御弓貳丁進上仕度候、不苦候者、被懸御目候而可被下候、猶鎌雲殿へ御取合奉頼由申入候、就中去年濃州表より御退候各之御事、 近衛様 内府様にも何之被仰子細無御座候、山口勘兵殿へ御無事調間敷事笑止之由承候、其後 少將様無御對面由被 仰上候、去進ハ御律儀之由御沙汰候、何之御罪も無御座候、大坂にて 近衛様被仰下にて調候共、自分之御才覚にて候共、御下候へと申入候ハ、京へ不及御届、早々御出舟候へと被仰出候、各其分可被仰分候、今度 御書ニ可食出候哉と被仰下由、御家門様へ申上候へハ無罪候間、我々能様ニ可申上由 御意候、又政近御伺候候、直ニ御意相違仕候、是ハ 少將様無御對面候事、 内府様も御褒美候、然者先 龍伯様計御對面と被仰事候、御下衆如此候子細候て出舟之由、京へも態

御申上せ候、其様子承候へと 御所様被仰、我等大坂へ

罷下、承届候て罷上候、りくつハ山勘兵殿までニ御座候、

此御衆逗留候者、早速御無事可相濟存候、此等趣御申上

候て可被下候、事々、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長六年秋〕九月十五日

宗古(花押)

伊勢兵部少輔殿

道正

伊勢兵部少輔殿

宗古

1557 「二番箱十卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尊書拜見仕候、如仰世上不慮之任合付而、何角冤取紛無

音背本意候、就其兵庫頭殿早速被成御下國、可爲御満足

奉察候、然者 内府様御前無吳儀相濟、御使者被差上、

日出度存候、將亦爲御音信銀子式十枚被懸御意候、遠路

之処被寄思召、忝次第ニ候、委旅庵へ申達候、猶追而可

得貴意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長六年秋〕

九月十六日

小出播磨守

秀政(花押)

羽少將様

御報

1558

〔御文庫四拾八番箱中〕「義弘公御譜中新納仲左衛門忠雄ニ
正文アリトアレトモ欠文甚多シ」

猶々我等養生氣之躰無替儀候、就中只今以外之ふる

い候間、判形不罷成用印候、爲御心得候、

菊屋宗可者罷下候便ニ、旅庵所より本田源右衛門尉迄書

狀指下候、書面ニ佐土原之儀一圓ニ無御納得候つる、然

處旅庵使いたし、鎌出雲々本田佐州へ理共申分候へハ、

御爲可然様ニ可罷成欤と聞申候通申下候、依之我等存候

ハ、弥以佐土原之儀手堅格護候而、京都之一左右可被相

待事肝要ニ存候、此段 龍伯様へも以使者申上候、就其

佐土原之儀先日如申候、番手之人數丈夫ニ被指遣、無緩

相護候様ニ、猶以可被仰越事肝心存候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長六年〕九月十七日

惟新 〔墨印〕

少將殿
まいる

〔此御書、家久公御譜ニ在リ〕

1559

〔御文庫四拾八番箱中〕「義弘公御譜中ニ在リ」

尚以御ふるひ未止申之由承候、笑止ニ奉存候、涯分

御養生可目出候、自是上井甚六唯今差上申候、御氣

相之様子共可被仰聞候、

貴札令拜見候、從旅庵所書狀下申候哉、佐土原之儀御仕

合可然之由候、先以目出候、然者番手之事蒙仰候、尤ニ

奉存候、昨日以使者右馬入道殿急佐土原へ被差越候而、

見舞候様にと申渡候、無吳儀可被越之段返事にて候之間、

能様ニ可被申付与存事候、猶追而可得貴意候、恐惶頓首、

九月十八日 忠恒(花押)

惟新様 參貴報

1560

「義弘公御譜中」

「正文在入佐勝左衛門」

尚以須田佐渡父子別而被懸御目之由、忝存儀共ニ候、

殊ニ傳吉事身上可然様子ニ被仰付候由、忝仕合被申

候、

如仰去年已來不申通無音之至候、仍御手前之儀無別儀早

速御前相濟、目出度存候、定而近日可爲御上洛候之間、

万事御雜談可申上候、將又伏見・美濃表御働之様躰、御

書中并旅庵口上之趣具承候、爰元衆へも懇ニ申候、御心

中御紛無之候故、早々相濟珍重ニ存候、隨而 秀頼様一

段御成人御息災ニ御座候間、可御心易候、市正方へも被

仰越之通申聞候、上方弥靜謐ニ御座候間、不可有御氣遣

候、市正我等仕合之儀、旅庵可被申上候、相應之御用可

致御馳走候、兼又むりやう二端被懸御意候、被思召寄之

處忝候、就中山本太郎右衛門好連御言傳忝之由ニ候、則

乍慮外以愚札被申候、委曲者使者へ申入候間、不能詳候、

恐惶謹言、

九月廿一日

羽兵入様

貴報

片桐主膳正

貞隆(花押)

1561

「御文庫廿三番箱十五卷中御案文」

急度申越候、仍はん人之事、いたゞ屋之儀者於此方成

敗被成、其外之者共ハ今度吉右衛門尉船ニ被乗候而□

可被相渡之由、兼日相定候キ、然彼船來朔日ニハ出船仕

候間、はや被□相濟申候哉、承度存候、若於油断可爲笑

止候、とかく貴所御肝煎ならてハ、迎致首尾間敷と聞及

候、御心懸肝要ニ候、様子御報ニ細々可示給候、恐々謹

言、

「朱カキ」
「慶長六年」九月廿七日

少將殿

まじり

「惟新公御名ナシ」

「義弘公御譜中、案文在新納仲左衛門忠雄トアリ」

1562

「雜抄」

猶々委曲、此圓乘□可有御物語候、

其後相過不得尊意候、仍今度奉行衆對 内府様逆心候間、
武庫様も難遁御同意之儀ニ候、雖然 龍伯様・少將様者
御別儀有間敷之由、 内府様も被思召候、然者早々被指
上御使節、於被成御理者可相濟候、殊更 近衛御家門様
種々御精入申候、去月ニも御使之差下分之内談ニ候、
一應被成御窺候て□□近日常出軍之躰候間、先々如
此、早速御郎徒衆被成御入魂尤奉存候、恐惶謹言、

十月五日

文珠院

成正院

1563

「義久公御譜中」

「此本在御文書方」

慶長六年十月七日、到時節、其利自露と云句の心を追膳
詠之、

龍伯

冬のたつ今朝へ見よくをのつから

あらしふかねと木葉ちるなり

1564

「御文庫四拾八番箱義久卷中」義弘公御譜中ニ在リ」

猶々和甚モ鎌雲同心にて此方へ越と候、明日欵明後

日欵、可爲着かと存候、

鎌田出雲守下着之由、昨日到來候、其飛脚則如鹿兒嶋之
指通候、然者和久甚兵衛方へ使者之事承候、從此方先日
眞連坊へ申置候間、其返答一昨日相聞得候、其方之御使
者早々御遣候て可然候、恐惶謹言、

「朱カキ」
慶長六年「拾月十一日

龍伯(花押)

惟新老

御返報

1565

「伊東氏文書」

加増目錄

薩州 那答院之内 大村

楠原之弥七左衛門尉屋敷

高三拾石二斗三舁

右知行、爲加増被宛行候也、

慶長六年
十月廿一日

平田太郎左衛門尉
増宗(花押)

鎌田出雲守
政近

比志嶋紀伊守
國貞(花押)

圖書頭
忠長(花押)

〔裏次印〕

井尻傳次殿

1566

〔在御文庫二番箱他家文書卷中〕

〔端裏書〕

川内山田衆
滿尾越中守殿

加増目錄

薩州 川内 山田村

庵地之門

高二拾斛五舛

右知行、爲加増被宛行者也、

慶長六年
十月廿四日

平田太郎左衛門尉
増宗(花押)
鎌田出雲守
政近

1567

〔正文在文庫〕「義弘公御譜中ニ在リ」

比志嶋紀伊守
國貞

圖書頭
忠長(花押)

滿尾越中守殿

尚以度々被仰下候趣一と披露仕候處ニ、菟角御氣遣
無御座、如何ニも緩々御座可被成旨被仰出候条、
其御心得可被成候、以上、

如尊書去時分者御使者被進候処、大御所様駿府ニ被成御
座候間、^{〔正趣〕}上野介かた迄申遣候キ、何も御進物以下被爲入

御念候段、御祝着ニ被思召、以御内書被仰達之由候、然
者度々如申上候、^{〔家久〕}陸奥守殿へ御入魂被成候上者、貴公御

事聊御等閑無御座之旨ニ候、縦爲御見物御上洛被成候^{〔共〕}、
又ハ関東奥州迄御下向被成候共、少も御機遣御座有間敷

候、最前鎌田出雲守殿旅庵へ申談候通、今以相替儀無御
座候、隨而爲御音信段子式端送被下候、遠路御芳情之至、

書中ニ難申上候、爰元之様躰御兩使可爲言上候間、不能
詳候、恐惶謹言、

本多佐渡守

『難旧記』

掟

〔朱カキ〕
慶長六年十月廿六日

正信(花押)

羽柴兵庫頭様
貴報

1568 「正文在文庫」義久公御譜中ニ在リ

已上

幸便之条令啓上候、先度御兩使御下着候哉、承度存候、仍上方之儀弥御靜謐之御事候、内府様去月十二日ニ関東へ御下向被成候、雖然御越年之儀者、伏見にて可被成之由候条、御上洛不可有程候、然者御身上之儀共先度具如申、内府御前之儀、猶以別条無御座候条、御心易可被思召候、猶於趣者鎌出・旅庵迄申達候間、可被仰上候、恐惶謹言、

〔御譜ニ朱カキ〕
〔慶長六年〕
十一月朔日

山勘兵衛
直友(花押)

薩广少將様

龍伯様

參人、御中

「正文在文庫」

(本文書ハ二二二号文書ト同文ニシキ省略ス)

『在鎌田氏』

御狀拜見申候、仍而 龍伯様 少將様より預御尋、外聞忝次第ニ候、萬々可然様ニ御取成奉頼存候、隨而爰元儀未相究候、御兩使へ申入候、何様以貴面得御意度候条、期後音候、恐惶謹言、

〔慶長五年関ヶ原亂後ノコトニテ六年ノコトニモアルヘシ、御和談ノ央ニ當リ一平佐御城普請ニ付而者、普請衆兵糧渡方之儀、一日ニ山御城又ハ蒲生城ナト修築ノ時、平佐モ同シク修セラレシニヤ、本田助丞カ忠言三度、老人ニ付七合五夕ツ、ノ事、
二應セラレ、和平ノ使者和久氏ナドノ氣ヲクシガシカ爲ノ謀ナルベシ、其故功夫一就右之儀ニ而御藏入より可罷出御用物並、普請並之事、
ハ多ク費レトモ、成就ヘ見ヘカナル乎、可秘ト也
右兩條之事、北郷作左衛門殿・相良新右衛門殿より可被仰付候間、いるかせなく可相納也、
〔貞成〕
〔慶長六年〕
十一月十一日 伊勢平左衛門

鬼塚主税介殿
宮路三之丞殿

〔慶長六年〕

霜月廿日

吉武三太入

本聲(花押)

鎌田出雲守様

新納旅庵様
御報

1572

「山川熊野權現文書」

加増目錄

薩州指宿之内拾町村 浮免

塩入二町六反六畝廿分之内

下田二反八畦 三斛 弥七郎

右知行、爲加増被宛行者也、

慶長六年

十一月廿日

比志嶋紀伊守 國貞判

鎌田出雲守 政近

平田太郎左衛門 増宗判

圖書頭

忠長

山川 座主

「家久公御譜中」

「正文有之」

（本文書ハ一五七八号文書ト同文ニノキ省略ス）

1574

「御文庫三番箱宝鑑中」「家久公御譜中ニ在リ」

掃部兵衛下國申候折節、以一封申候、下着候哉、此邊之

取沙汰、龍伯御上を待申衆有之由候、將又責鞍一口、誠

輕薄之躰雖非無斟酌、寸志迄候、次長十郎事文旨迄具申

越候、被添哀詞候者、可爲喜悅候、事々期來音之時候、

かしこ、

「朱力半」 慶長六年閏十一月六日

鹿兒嶋少將殿

（近衛） 信尹

1575

「御文庫廿三番箱十五卷中御案文」

從は無音ニ罷過候処、御使札預本望之至候、然者此中京

都へ御逗留候て、御仕合能御下向、殊宮崎之儀如前々被

任御下知之由、尤目出度候、猶御使者へ申入候、恐々謹

言、

「朱力半」 慶長六年後霜月八日

惟新

高橋右近殿

御報

「義弘公御譜中、案文在新納仲左衛門忠雄トアリ」

1576

〔義久公御譜中〕

〔正文在大乘院〕

先年在洛之刻、於因幡堂頼眞房灌頂之儀就被執行、眞珠院双俊・栄存・甚堯・正圓・俊宗遂開壇候處、爲一流之法度、他所他國ニ而之灌頂、從前々不被用之段、雖度々承候、我等證人ニ罷成致成就儀、依爲前代未聞被相用之由、令満足候、曾而不可混前後之法例者歟、仍狀如件、

慶長六年辛丑潤霜月廿四日 龍伯(花押)

大乘院

〔上包〕
大乘院

法印龍伯

1577

〔高原佐野宮棟札〕

奉造立霧島六所大權現下宮寶殿一字云々、

大檀那藤原朝臣忠恒公云々、

慶長六年辛巳十一月廿六日

御名代正行院法印看信

大願主權大僧都法印淳有

遷宮導師法印有賢

大工 白尾常陸守國有

1578

〔正文在文庫〕

已上

先度鎌出・旅庵下向之已後、御左右不承候条、無御心元存令啓上候、然者爰元之儀、弥御靜謐之御事候、内府様去月五日ニ江戸へ御着被成候、日々ニ御鷹野にて御機嫌よく御座候由候、就中先度段々御兩人へ申談候、定而様子可被仰上候、雖不及申候、此御龍伯様御上洛、無御油断やうに御熟談、乍恐尤ニ奉存候、誠か様之申事、憚多儀候へ共、不混自余御目を被下事候間、不殘心底令言上候、尚鎌出・旅庵老迄申入候条、疎筆之式候、恐惶謹言、

(慶長六年)

十一月廿六日

山勘兵衛

直友(花押)

薩广少將様

參人、御中

1579

〔羽嶋氏文書序〕

加増

屋敷三畦 三斗

鍛冶 逆瀬川新助安次

法樂寺三反式敵八分内

法樂寺

助左衛門尉

中田 七睦拾五歩 九斗

「三行略」

合田畠三斛者

慶ノ六

拾二月三日

村田雅樂助判

羽嶋藤右衛門尉殿

「右羽島氏、川内山田ヨリ高山へ移リ、慶長五年ニ末吉ニ移リ、地頭

村田雅樂助へ相付奉公云々、末吉衆中根元記ニミヘタリ」

1580 慶長六年辛丑

十一月廿五日、井尻早左衛門祐雪加世田ニ於て戰死とあり、此軍追考して記すへし、

1581 「御文庫廿三番箱十五卷中御案文」

猶々去秋者御茶しからき□□送給候、爰元拂底之

砌、被思召寄御懇□□満足仕候、

久敷無音罷過候處、御使札殊切付力皮・障泥三通被懸御意候、誠遠路御懇志之至、畏入存候、仍先年龍伯へ御入魂之筋目を以、高島新藏殿口上之趣、從竜伯被申聞、無別儀之旨申達候、將亦今度 内府様江戶へ御下向ニ付、爲御見廻御上洛候之哉、早々御下國玆重候、然者京都与

當國和睦之様子、伏見被聞召届之由、満足仕候、猶上方

にて去年以來之始末、新藏殿へ□□申入候間不詳候、恐

惶、

「朱カキ」
「慶長六年十二月三日」
惟新

寺澤志广守殿

御報

「義弘公御譜中、案文在新納仲左衛門忠雄トアリ」

1582

「御文庫二番箱義弘公卷中」
「家久公御譜中ニ在リ」

返々御家之始末能々吟味候而、萬事ニ付而身体を御忘ある間敷候、先度も三原重種諸右衛門尉所ニ而鹿兒嶋之衆中寄合、此度圖書殿上洛之儀ニ付而、ひとへに弓箭ニ而候ハ而はと申談たる由、分明承傳候、とにかくに由断あるへき時儀ニ而者無之候間、能々可有御分別候、

明日平同所へ貴所就御出、中山早右衛門入道可參之由候而、平左衛門尉迄迎船を被指越之間、不及力參上いたさせ候、彼者よひこされ候事者、能を可相企との内存かとかふき申候、其謂者今度圖書殿上洛之儀并船之儀等、其外各油断之躰ニもてなし、于今不相調事曲事之由被仰渡

候き、さやう成をたぶらかし、貴所連と數寄之道たるまゝ、能をと申候者飛付やうに可爲御同心候条、幸和久殿こそ逗留候へ、各者由断を不存候へ共、如此能をさせられ、京儀を大事に不被思召故、下々に至り何事も不相調之由、和久殿にもしらせへきの覚悟たるへく候坎、連々申候やうに酒なとも久敷候て、長座者無用たるへく候、治定惡敷儀共出合可申候間、我等存る者申請候は、御出候而あるかゝりにもてなされ、酒五返ほと過候者、座を御立候而可然存候、さやうに候者京儀を大事に思召、何事も御心に染候へぬやうに、世上よりも存候へハこそ被仰出たる、最前之御存分も無相違事候、惣而者中山をもまいらす間敷と存候へとも、乗船迄被申付被指越候き、如此候、菟角此度之各所行之曲なき事者、ねても覺ても難志次第共ニて候、かやうに申も別之子細ならず、分別惡敷候へハ、當家破滅之儀一定ニ候之故、さてかやうに氣遣申事ニ候、乍重言大事之始末を御思案候而、他事を御忘候やうに、人々見知候へて候、相構而く御數寄之事ニ候へ共、於此度者御能思召とまらるへく候、我等も歳之功ニ而申之間、餘申ちかへ間敷と存候、萬事不可有由断候、恐々謹言、

1583

「朱力キ」
慶長六年十二月五日
惟新(花押)

少將殿
床下

「義久公御譜中」

「御南戸方ヨリ出」

追而申落候間、端書ニ申候、五字六字ノ題短冊ノ上ニ書申事候也、タトへハ、

庭松有春色 如此書申候也、是ハ短冊之上ノ事候、

寄源氏物語戀 同是も短冊ナルヘシ、

四文字題ヲハムスピ題トモ申候、

開路早春 如此書申候、

一トモ寄神祇祝ナトハ、如仰二字ツ、カキワケ候へ

ハキレ申候間、寄神祇祝 如此一字ワキニ可然候、委

注可申候へ共、急便候間此中ニ申候、猶追而可申候、

閏霜月二日之御札、今日十二月八日桑名持參申、具令

披見候、然者明日便宜候条相届申候趣、先一筆之返事

与申候条、不取敢申候、

一鹿皮三枚又々給候、殊更可然皮にて祝着申候、

一御鷹共逸物仕候之由、扱々令下向見物申度候、自余て

も餘多大鷹御入候様ニ承候、後便ニ委御鷹共之様子承度候、

一拙者も只今弟鷹・兄鷹・鶴以下十居計令所持候、若鷹ハ一居も無之候、諸鳥屋又何之鳥屋、三鳥屋、四鳥屋之鷹共候、時々山をも仕申候人數も無之、やう／＼被飼之躰迄にて、物數なと不成候、

一御馬之儀、河原毛之様様一段可然趣、御心にくき御書中ニ候、鞍之内あしく御覚候由、あし立のわろき所を被仰付、細く御のせ候へく候、若馬ハなをるものにて候、付、足立悪所高ビクナル所ノ事候、ケミチヲ御ノセアルヘク候、直可申候、

一鶴毛駿二歳之駒ニ四き計長上たる馬候由、二歳なとて不承及候、後ニハ扱く大馬ニ可成申候、殊ニ馬形も氣もよく相見申候由、別而可有御秘藏事尤候、左様のハ稀なる事候、

一牧之駒千疋計ニ成申候由、扱く澤山なる物數にて候、是又大切之狼多食申候由、咲止なる事候、狼之つきたるハ何とも無了簡由申觸候、就其二歳之駒御取候欵、尤之御分別候、

一拙者も馬數ハ分限ニ過申候、只今も七疋候へ共、いづれもちいさく候、早道ニ三疋候、懸御目度候、乍去た

くひたる馬一疋も候ハす候、

一膏藥之事、則嶋与兵ニ申届進之候、大山平七馬乗申候事あかりたるよし、重寶にて馬責申候本マツなまれなる物にて痔相煩之由、御馬責申候事ハ可爲不自由候、よく被作養生可然候、

一此一册之事、可令披見之由、心靜ニ見申愚意候ハ、自是可申候、此便宜既明日之由申候間、只今之儀無是非候、

一歌之題ニモジトロミ申候、シモジ題トハ不申候、四文字題書様之事、短册之上ニ書申候ハ、勿論二字ハ脇ニ書物にて候へ共、如仰題ニ可申候、寄神祇祝ハ短册之上ニハ、

寄神祇祝 如此書たるかよく候やうに申候欵、

又はしつくりなとにて候ハ、同前ながらそれハ書合次第二候、猶後便ニ御不審可承候、愚拙覚申候分ハ、何様ニも可申候、

一夢想之連歌ニもし下旬を見申候へハ、付句第三の心にて候間、てとまりはね字にて候、如仰おもてハ九句にて候、

一夢想ニ夢と云字句ニ不仕事、既夢想之上ハ夢と云字除不仕候、百韻之中ニ夢一句も不仕候、

一夢想之はしつくりの事、

二様候はたとへハ、

夢相之連歌 又ハ、

賦夢想連歌

兩様にて候、

懐旧之連歌も

賦懐旧連歌とも書申候、

是も兩様候欵、

一武庫入被官之者共下國申候刻、歌の御不審共拙者覚申候趣、具注下申候処ニ、不相届候間、重而可申由桑名

申候、注申候事共失念申候、御書付もひとつに卷入下

申候間、跡書も無之候、重而可承候、注候て可下候、

覚申候通ハ、何やうても可申候、乍勿論不覚不申候趣

ハ不可及了簡候、やかて／＼便宜候ハんと桑名申候間、

猶跡も可申候、いそぎいら申候哉、かしこ、

〔朱カキ〕慶長六年極月八日 山

伯老

御返報

〔上書〕

伯老

御返事

山

1584

〔義弘公御譜中案文在新納仲左衛門忠雄トアリ〕

無御別儀被仰出之由、從佐渡守殿・井伊兵部少輔殿・山

口勘兵衛殿被仰下候、殊本多佐州ハ以神文、拙者進退

迄も別儀御座有間敷之由被仰下候、誠々喜悅不淺存候、

少將事尤早々致上洛御礼雖可申上候、爰許餘不如意極

自身罷上事、今少延引仕度之通、同名圖書頭を指上、御

理申上候、猶追々可得御意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕慶長六年十二月

羽柴兵庫入道 惟新

中性院

御同宿御中

1585

〔上書〕

其已後不得御意候処、御懇狀拜見本望之至ニ存候、然者

先度旅庵老被指上候砌、段々様子申入候、内府様御前之

儀彌無御別条候、於趣者旅菴江申談候間、龍伯様御上洛

之儀、無御油断様ニ被仰談尤ニ存候、將又本多佐渡守へ

ハ御狀相届、從是御報進上可申候、我等事伏見之御番被

仰付、關東江御供不申候、於此方御用之儀御坐候へ、可蒙仰候、尚追而可申述候条、令省略候、恐惶謹言、

極月十日

山口勘兵衛 直友判

惟新様

参貴報

1586 「正文在卷本」家久公御譜中ニ在リ 宛書直シ付ノ通也」

御懇書致拜見候、先度鎌出御上之剋段ニ申談、龍伯様御上洛被成可然通申上候、然者龍伯様御先へ圖書頭殿被差上之由尤ニ存候、雖然龍伯様御上洛被成御延引候てへ、如何と存候条、早速御上洛候やうに御相談、乍恐可然奉存候、將亦本多佐渡守方へ之御書拙者ノ相届、急度御報進上可申候、尚追而可得御意候、恐惶謹言、

〔慶長六年〕

極月十日

山口勘兵衛 直友(花押)

薩

少將様

参貴報

1587 『在官庫』

尚申上候、御上洛之儀被成御急候て可然存候、恐多

申事、慮外千万之儀候へ共、我等儀者被懸御目事候間、申上候條、尚追而得御意可申候、以上、

御懇書忝拜見仕候、先度鎌出・旅庵老爲御使被差上せ候砌、委細御報ニ申入候、御上洛已前ニ先圖書頭殿被成御上せ之由蒙仰候、尤ニ存候、雖然御上洛之儀も被成御急可然存候、御油断被成候てへ、乍恐如何ニ奉存候、先書にも如申上、拙者式儀者被懸御目事ニ候間、存寄通不願御心底申上事候、圖書頭殿於御上洛者申談、尚追而可得御意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長六年〕

極月十日

山口勘兵衛 直友(花押)

龍伯様

参貴報

〔義久公御譜中ニ在リ〕

『全』

〔本文書ハ一四二〇号文書ト同文ニツキ省略ス〕

〔此一書、義久公御譜中ニ無之〕

1589 『御文庫拾七番箱十六卷中』家久公御譜中ニ在リ

猶々少將様へ之御取合共奉頼計候、爰元之様子相替

儀無御座候、内府様江戸ニ御越年之由候、委細御使之衆可被申候間、能々可被聞召届候、

去十一月廿日之御狀令拜見候、從少將様御門跡様へ之尊書令披露候、只今可被成御返事處、此御使俄ニ下向之由夜中ニ承候条、無其儀候、近日圖書頭殿御上洛由被仰上候、奉待候、先々龍伯様御上洛來春迄御延引之由候、寒天之時分候条尤ニ存候、申度儀共萬々御座候へ共、右如申急候間、不能詳候、吉事以後信可申述候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕

〔慶長六年〕

十二月十一日

友枕齋

如貴(花押)

伊勢兵部少輔殿
回鱗

1590 「正文在文庫」

(本文書ハ、一三三九号文書ト同文ニソキ省略ス)

1591 『雜抄』

敬白起請文之事

今度以使者愚意之趣申上付而、忝被仰出安堵仕候、從先年別而御厚恩之所、去年不慮之依仕合雖氣遣候、其旨をも被指捨、國家可被立置之由蒙仰候、御禮難申盡候、勿

論向後不可存別心候、此等之儀爲可申上、先同名圖書頭差上候、因茲猶々申上候条々御坐候、誠憚多申上様、公

義雖難計候、且世上之風聞、且家頼之者之歎息難休候条、
迎之御哀憐ニ不被殘御心底御誼承届、必以上洛、彌忝家相續之儀可奉頼候、右之旨僞於申上者、罰文云々、

慶長六年辛丑雪月二十二日

羽柴少將

忠恒血判

島津修理太夫入道

龍伯血判

本多佐渡守殿
(正色)

1592 「義久公譜中」

一島津圖書頭忠長上洛之時、與少將忠恒俱、對當御代、未嘗有違心之旨、裁血判之誓紙、所以進獻也、

1593 『雜抄』

以先札如申候、圖書頭差上候、然者鎌田出雲守罷上候砌、御兩所御入魂之通被仰下候、就其猶々申上子細候、可相調様亦可被添御心事所希候、依雖些少候、被相尋由候間、砂糖壺一致進上候、宜御取成憑存候、委曲者圖書頭相含

候間、不能細筆候、恐々、

慶長六年

十二月廿二日

龍伯

本多佐渡守殿

山口勘兵衛殿

御宿所

〔此御案文、義久公御譜中ニ在リ〕

1594

〔御文庫四拾八番箱義久卷中〕〔義久公御譜中ニ在リ〕

先日者御返書忝令致拜見候、仍猫之事承候、今度六疋差上候、并ふくろ之儀田舎之細工雖見苦候、二ツ進上之申候、右之兩種へ何方へも可有御進上候哉、尊慮次第候、兼又愚拙此比者弥老衰仕無正躰候へ共、頗可致上洛之由被仰下候之間、來年へ罷上へき覚語ニ候、其時節相積儀共申上へく候、此旨宜預御披露候、恐々謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長六年秋〕

十二月廿三日

嶋津修理入道

竜伯(花押)

倉光主水佑殿

1595

『飯野満足寺文書』

白鳥山御造栄(一)ニ付而、御知行式百石被付置候、彼御知行

者御造栄中相付候条、其間之得分ハ諸公役不可有候、仍如件、

慶長六年

十二月廿六日

平田太郎左衛門

増宗印

比志嶋紀伊守

國貞印

白鳥山

座主御同宿中

1596

〔御文庫廿三番箱十五卷中御案文〕

先度高島新藏殿へ申入候趣、具被聞召届之通預御懇書候、本望之至候、仍内府様於江戸被成御越年、正月者早々被成御上洛之由被仰知候、是又御懇之儀候、いづれも近日以使者可得御意候条、不能詳候、恐々謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長六年〕十二月廿九日

〔義弘公ノ御名ナン〕

寺澤志摩守殿

御報

〔義弘公御譜中、案文在新納仲左衛門忠雄トアリ〕

1597

猶々今朝惟新様より被仰越候、來十二日より福昌寺被相越、於帖佐大中様爲御志、法華千部讀誦候間、出水への御越難成思召候間、我等も從此方罷歸、重

而出水へハ見廻申候て可然候由候条、明日邪容院のやうニ罷越、圖書頭へ一札申、先此節ハ出水への事者存留候、猶鹿より可申上候、

新田社參之儀、兼日者一昨日四日ニ相定候処、依大雨以之外洪水故、通路不罷成市來湊へ三日逗留仕、昨日五日天氣晴、日からもよく御座候間、湊より罷出、いかにも心靜社參仕候、先々御宮作結構ニ出來候而満足仕候、仍先日相良吉右衛門へ大方申聞候休復之儀ニ付而、こまかなる書狀のほせ候ハ、もし用にもか可罷立と存候、從此方如此したゝめ申候て御判をも被遊候へと申上儀者、誠恐多候へとも、吉右衛門定打立可申候間、何角申候へハ延引ニ罷成候間如此候、但かやうなる書狀ハ結句ハつらひにも可罷成候哉、被入御念被成御覽、不入儀候ハ、先被召置尤候、何やうにも候て彼身上被相助候へハ大慶存候、猶可得尊意候、誠惶敬白、

卯月六日

少將

忠恒御花押

進上

龍伯様

「得能某記録」

慶長六年丑

此秋、寺領三千石ヲ叡山ニ寄附シ、社領一万石ヲ豊國ノ廟ニ寄附シ玉フ、且 禁裏供給ノ地并ニ公家ノ食邑ヲ洛陽ノ四邊ニ定ラル、板倉四郎左衛門尉勝重後改伊賀守ヲシテ京都所司代トナシ、加藤喜左衛門ヲシテ是ニ副シメ玉フ、

家康公御下向関東事、

十月十二日、家康公東國御下向トシテ、今日伏見城御發駕、米津清右衛門尉・稻垣平右衛門尉・岡田竹右衛門尉ヲ伏見城ニ殘シ置ル、同十三日佐和山、十四日大垣、十五日岐阜、十六日濃州加納ニ着御、城地ヲ御巡見ナリ、十一月五日、家康公江戸城ニ還御シ玉フ、

(本文ハ底本ニ欠ク、鹿兒島県立図書館本ニヨリ補フ)

1599

「新納忠元勲功記」

一同六丑七月廿八日、忠元此以前大口地頭相勤居候時分、元龜年間より彼地諏訪神事ニ付頭屋相初置、領地老町以上之衆中替ルく頭屋申付、毎年不怠神事執行、此年ハ忠元頭屋ニ爲相成古帳今以大口ニ御座候、當分者

三拾石以上之郷士より、此人數に相加里申由御座候、

一同年八月此時分迄茂忠元事鹿兒嶋江相詰罷在候処、加

藤清正人衆芦北表ニ爲討入事大口留守之者共承付、早

々忠元江申越、忠元直ニ爲罷歸由、此等之事ニ付、松

齡様別而無御心元被思召上、同廿六日、琴月様江御

書被進、此比之事ニ候半、伊集院忠眞清正ニ致内通、

御家を石田一味ニ事寄せ、清正も薩摩を可分取与之企

ニ而、玖麻山ニ人を登せ御國之兵氣を伺ひ、或ハ霧嶋

參詣と名付、案内を被見候躰を忠元見取、霧嶋逼路之

道橋普請申付、其時爲謠候歌之由、庄内軍記等ニ御座

候、

肥後の加藤か來るならば、塩焔着に團子會釈、夫て

も聞すにくるならハ、首に刀を引手物、

此歌ハかそへ歌にて、一ツとや肥後の云々、二ツとや

ナニくくと迄爲有之由申事候得共、外之詞ハ相知不

申候、

一右通肥後口よりハ加藤清正、日州口よりハ稻津掃部、

双方之堺目より御領内之隙を伺置致侵伐事、早竟、權

現様御前未相濟ニ付、空事ニ御座候、然處其比者御和

睦之御往返最中御座候得共、御内密ニ而不相知、右次

第諸方より御國を相伺候半、於関ヶ原筑前中納言秀秋

裏切にて、此御方様御備江被切掛、乱軍罷成候時分、

喜入攝津守忠政・入來院又六重時・新納旅庵・本田助

允親貞・同子少吉・押川強兵衛公近・五代舍人友利以

下三百計、松齡様御備取離れ、何方ニ可切向哉、何

れも可自殺哉、伊吹山之麓ニ寄集致評議折柄、忽一騎

馳來、長曾我部使番之由にて、兵庫頭殿者先剋伊勢路

ニ御向被爲退候、各方も御退去可然と申捨馳去、夫よ

り右人數ハ案内を頼、北近江を相通、同十八日、鞍馬

山ニ隱入、二人三人ツ、相忍候而致上京筈ニ被致示談

砌、同十九日夜中、山口勘兵衛尉直友野瀬某と人衆五

百計召來り、忠政・旅庵宿所被取圍、其節旅庵并本

田助丞父子三人生捕相成、餘者皆遁落、夫より三人大

坂御奉行所ニ被召出、段々御推問、何れも前件通無是

非石田ニ被爲與、同日成行正道申披候故、權現様御

疑も被爲晴候間、旅庵・少吉ハ爲人質被留置、助丞罷

下り、必御和睦可奉勸旨被仰付、右付同廿八日、寺沢

志摩守正成・山口勘兵衛直友より、貫明様、琴月様江

以書狀、惟新様御逆意不及是非、御兩所も御同意歎、

各別坎、可預示旨申上、同十月十日、井伊兵部少輔直

政も 琴月様江以書札右同様被仰談、御國之儀御理被仰上、早可有御出仕旨被申上、同日直友より中途御切手迄被相渡、助丞同廿五日御國江罷着成行申上、然共助允却而被爲疑候ニ付神文差上、同十一月四日、又々上洛被仰付、則右之御返翰等差上候處、從 權現様此上者 龍伯様御上洛ニテ御断可被仰上旨被仰出、同十二月十三日、直政・直友より 御兩殿様江御書被差上、其節ハ直友與力勝五兵衛・直友與力和久甚兵衛を助允ニ被差添、同十六日、大坂出帆ニテ罷下、中途より右之成行前廣内密ニ申上、薩隅者有別儀間敷、諸縣一郡之儀ニ付入組有之、是ハ稻津掃部伊東家ニ被下度、黒田如水ニ相付段、爲訴出由御座候、何れ此御方より御和陸被爲好候而者決而御和談者相成間敷、早竟此節兩使被添下候も、御國之武威旁爲見聞ニ可有之被爲推量候間、折角御弓箭之勢ニ被爲張立候方可然、左候ハ、自然与御和平可相成与爲申上由、左候而同六丑正月、又々助允上洛被仰付、 松齡様御事者隅州櫻嶋江御蟄居、御兄弟之御交も被爲絶置候間、御快氣次第御上洛ニ而、御断可被仰上旨助允奉承知、和久氏同伴罷登、本多正信・山口直友等ニ取次申上候処、同三月廿一日、正信・直友神文和久甚兵衛ニ持せ

被差下、右ニ付、此節者旅庵并文之和尚・助允父子も被差下、同六月、鎌田出雲守政近ニ御使被仰付、旅庵又者和久甚兵衛同道上洛、同七月二日、細嶋出船、十二日室津ニ着船、風波不宜、同十九日、押船ニ而夜中大坂罷着、同廿日曉、政近使者差添候而、和久氏ニ而着之届申遣、同八月三日、伏見江罷登、旅庵同様本多正信等ニ相付御使被相勤候處、正信より、日本國中ニ九州之嶋津、中國之赤松、北陸之上杉、陸奥之伊達、東海道之徳川、此五家者爲無双之上、名護屋以來 龍伯様と被仰談置候御訳合も候間、 竜伯様 少將様御間御一人御上洛候而も全無別儀ニ付、早々罷下可奉勸旨御達ニ而、兩人共御衣服等被成下、其時薩隅并諸縣迄者御別儀無之御模様候得共、佐土原之儀迎も難申叶、既ニ物主をも可被爲定向ニ政近等承及種々奉訴、左候ハ、先當年中者浮地にして被差置、山口直友人衆御番被仰付置、 竜伯様御上洛迄者御待被下度、乍漸爲申取趣、同九月初方、政近より申上、左候而、嶋津圖書頭忠長十月中ニ可有上着旨被仰出、同九月廿三日、大坂出船ニ而政近・旅庵十月罷下り、此節も正信・直友神文被差上候得共、御疑ニ而不被爲登、同七寅正月、

忠長・旅庵上洛御使被相勤、依之四月十八日、權現
様御神文ニ而、兩度使者祝着候、薩隅諸縣之儀、此間
被相拘候分有相違間敷趣之御判物、貫明様江被爲賜、
正信より内府へ始終御吳心無之候得共、上洛延引候間、
此上者子息上野介ニ而も可差下与、旁懇意ニ而、皆拜
領物等有之、旅庵和久同道罷下、自其、琴月様御上洛
ニ御治定被爲在候得共、其比右通伊集院源次郎加藤清
正致内通段々、反間之浮説を以、御三殿様御間ニ不謂
事共申込、既可及内乱躰ニ成立候得共、左様之御疑も
被爲解、同八月朔日、鹿兒嶋御出立、野尻ニ御滞在、
同十七日、伊集院源次郎忠眞を狩場ニ而被爲誅戮、其
外弟并母も谷山・阿多等ニ而、同日御誅伐被爲在、左
候而御上洛、十二月、御目見等無殘所御仕合ニ而、同
八卯二月廿八日、鹿兒嶋江御着城、誠ニ是迄年數四年
ニ相掛御和平ニ被爲調、其間者段々隣國も稻津・加
藤等諸所ニ押寄、御領内ニ者源次郎兄弟雜説旁御心遣
之御砌ニ而、忠元儀者乍老躰も、鹿兒嶋又者地頭所大
口ニ相掛辛勞爲仕由御座候、
一右御和談之事ニ付、山口直友與力和久甚兵衛抔度々罷
下候時分、當御城又者平佐城・蒲生城等御修築被仰付、

其内ニ而、同六丑年平佐城御普請ニ付、相良新右衛門
長泰奉行ニ而召仕候式拾ヶ村之人數、又北郷作左衛門
三久内衆、合而一日三千人ツ、にして、日數式拾五日
分之普請衆合六萬五千人、同七寅春、竹内織部助実住
奉行ニ而、拾四ヶ村之人數一日千人ツ、にして、日數
三拾日分之普請人數三萬人、二口合拾萬五千人被召仕
候得共成就無之、又同年冬忠増ニ奉行被仰付、此時之
普請人數未相知、過分之人數にて何之印も不見得事突
止ニ存、同十月五日、忠増より忠元江爲遣狀有之、是
ハ早竟御和談ハ次にして、第一薩摩ハ專籠城之手當有
之与、和久氏抔罷登咄散候様ニ与之厚御計策ニ而、其
比現在奉行爲仕人ニさへ御趣意ハ不存、右様多人數召
仕普請爲仕与被考申事御座候、右次第之御武威御座候
故、諸縣郡之入組も伊東家等之御内訴者御取揚無之、
佐土原迄右馬頭以久殿江拜領被仰付向ニ、爲成立ニ可
有御座与存候、

(本文ハ底本ニ欠ク、鹿兒嶋県立図書館本ニヨリ補フ)

〔表紙〕

義久公
 義弘公
 家久公
 慶長七年 自正月
 至八月

後編
 舊記雜錄
 卷五十五

1600 「正文在文庫」

已上

新春之御吉慶珠重々、逐日不可有休期候、抑天下弥静
 謚之儀ニ御座候、然者 内府様當月十三日ニ江戸被成御
 立、御上洛之儀候条、粗如申上候、此節龍伯様御上洛被
 成、尤可然儀と存候、將又御同名圖書頭殿、旧冬可被差
 上せ之由被仰越候条、相待申候處ニ、到今日ニ無御上候、
 定而近日可有上着と存候間、於伏見申談、則從是様子可
 申入候、
〔本々、〕
 奉猶後音之時候、恐惶謹言、

山口勘兵衛

〔慶長七年〕

正月十五日

薩广少將様
〔家久〕
 参人ニ御中

直友〔花押〕

1601

「義久公御譜中」

「正文在御文書方」

伊呂波歌

龍伯法印

いつまでも久しかるへき君か代を

猶よろつ代と守れ神かき

ろかいたて袖も綱手も打はへて

なきき漕かふ船ののとけさ

春の花しける梢も秋の色に

うつれはやかて雪のふるさと

俄にはなにの稽古もならぬそと

こゝろをかけよ朝に日ことに

ほしきとてしめて所望ハ無益哉

いたすとなれハおしき物なり

謙るこゝろのうちにつよけをは

さしはさみたる人そ床しき

徒然なるおり／＼ことに古草子

見てことハりに心つくへし

千早振神の恵にたかハすは

いのらすととも隔やハある

利根たてする人ことにあやまちの

身につもるをはしらぬなりけり

主からをよくたしなみて主人にハ

忠を盡して奉公をせよ

瑠璃の壺不老あかたの薬さへ

すくれは後ハ毒のちやう上

教をはそむかしかへしたらちねの

さためをきたる弓筆のあと

わたつミの底よりふかき心をも

よみあらハすや大和ことの葉

風のをと波のひゝきもこと／＼に

こゝろつくればたゝ法の道

餘所にみてうらめしかりし老らくの

我いたゝきにつもるしら雪

たれも身は主人次第と打任せ

理たてを捨てつかへてもかな

連歌をはしハしか隙も忘るなよ

こと葉つゝきもこの道にあり

そのかミの名たゝる人も今の世の

人も五臓に六腑なりけり

つく／＼と世のうき事をあんすれば

わかなす科の酬とそしる

ねたしとてさのミりんぎの過ぬれば

妻にあかるゝはしめとをしれ

南方のむくの世界にゆかんとて

ねかふつとめは償もくるしや

らん拍子ふミそんしたるさるかくの

はちハ一期のあま夜とそなる

むかしよりつたハリきたる道／＼を

絶すつゝけよすゑの世の人

歌のみち亂舞茶の湯もたゆむなよ

かたらふ人のあいさつのため

井をはほる日ハありとてもふさくひは

あらしものをと人そかたれる

のむ酒の正躰なきもせうし哉

あまりのまぬも人のかけみち

おく山の柴のいほりとおもへとも

月よ花よは捨ぬはかなき

國持は四書や五經を学ふへし

その他の事は第二第三

夜半まで學文してもおこたらす

起いてまほししのゝめの空

魔法をは修しかなへたる人はたゞ

身の行すゑの用心をせよ

賢人は聖人よりハおとれとも

それも前果のわざと知へし

ふようなは生れつきとは云ながら

はけますこゝろなき故としれ

心には善をはおもひあしきをは

捨よわか身にあらしあやまち

ゑらふにはよきそ稀なる取所

ひとつもあらはそれをそたてよ

天道はふたりの親に孝あるを

まもるへきとのちかひとそきく

朝に日に看經するといひくゝて

おこたるときそ罰はあたれる

妨のあるましといふひとはいさ

しやかの時さへ提婆とやらん

君をしもかろしめてさへ科なきハ

月花雪のたハふれるとき

ゆふなるをむかしハほめし今の世ハ

うつけたるとてわらハれやせん

面目をほとこすほとの高名は

たのむ神慮のわざならてやは

みる事も又きくことも耳と目に

とまらぬ人やたハけなるらむ

しらま弓やたけこゝろを持ってこそ

いつれの道のをくもしるへき

会尺には客のこゝろをうかゝひて

おもきかろきは時によるへし

人のよき人のあしきをみてハわか

身のみかくへき鏡ともせよ

文字もわかぬ我はさなから盲目に

おなし物とやひとのみるらん

誓紙をはかるゝとする人ハたゞ

三とせのうちの罰とするへし

推量ハおほかたあふとおもへとも

ときととからぬ心にそある

經陀羅尼よみてもよしや大空の

月まつ夜半ハ御はらひそよき

一としもいふよりかすのはしまりて

百億までもくからぬなり

二なき命もきみかためならば

すゝしくかろく捨よものゝふ

三従に五障をくハハ八をしも

いかにのかれんあハれ女房

四天狗の内證まではしらねとも

たふとくハかりおかむ日所作

五躰をはやふりすてゝも六地藏

いまひとつをそ見付わつらふ

六十にあまらはたれもこゝろせよ

時にあふまし今のよの中

七馬鹿といハるゝ人の上になを

こゝろの底はようしんをせよ

八歳になれる龍女か成佛も

妙法華經の功德ならすや

九重に八重のさくらハ十成を

いむこゝろにや花も咲らん

十年をなゝつかさねてけふもはや

む月の二十三夜なりけり

此いろは歌五十八首は、慶長七年正月廿三夜月待の目

さましに詠之、頓作と云、老耄といひ、ひかことあら

ん所、みゆるし給ふへきもの也、

1602 「家久公御譜中」

去年孟冬中旬、鎌田出雲守政近下國之時、本多佐渡守正

信・井伊兵部少輔直政・山口勘兵衛尉直友、和諧契約不

可有少變違之旨裁誓紙、贈 法印龍伯與我、然而非疑之

有絶無、再爲聞眞誠故、使島津圖書頭忠長當春赴京都、

未上著之際、各贈書簡矣、

1603 「家久公御譜中」

「正文有之」

(本文書ハ一六〇〇号文書ト同文ニノキ省略ス)

1604 「家久公御譜中」

「正文有之」

猶以此方聊相違無御座候条、弥其御心得可被成候、
以上、

如貴札去年鎌田出雲守殿ニ被仰下候趣、奉得其意、様子
自是具ニ申進候キ、今以其通ニ御座候、然者今日十九日
ニ内府上洛之事ニ候、子ニ候上野介供仕候間、似合敷御
用等可被仰付候、隨而近日圖書頭殿を以可被仰達候旨候
条、委曲其節可被得貴意候、猶山口勘兵可被申上候、恐
惶謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長七年〕

正月十九日

本多佐渡守

正信(花押)

羽柴少將様

貴報

1605 〔新納旅庵譜中〕

奉 太守之命、今春又將上京、于時非雷賜感牘、界三百
石之地、其 高書記左方矣、

1606 今度和睦就調達度々上洛、感悅之至候、爲其忠節知行三

百石宛行候、弥可抽奉公事可爲神妙候也、謹言、

正月廿四日

忠恒(花押)

旅庵

1607 〔新納旅庵譜中〕

慶長七年壬寅之春、使島津圖書頭忠長差京師、而窺知

内府之信偽、旅庵亦隨之、已夏之孟上著、而候本多佐渡
守正信之館、達太守之旨趣矣、正信曰、自最初至當今無
内府之有異意、故催上京者非翅再三、雖然僞心未散、遲
引至今日矣、此上亦懷僞心不訣上京、息男上野介可下薩
摩州、福島左衛門大夫殿與少將殿金石交也、請以無異意
之故、語薩摩之兩使、由是左衛門大夫殿語細密惡志事義、
信其言依其義矣、 内大臣家康卿、四月十八日裁神文以
賜之、隨身之欲赴薩摩、于時賜寶刀及高麗茶碗、珍戴百
拜退矣、與和久甚兵衛尉殿俱六月下著薩摩、獻 誓書於
太守也、

1608 〔義弘公御譜中〕

〔正文在田中善兵衛榮綱〕

尚以向後、爰元似合敷御用等可被仰付候、以上、

一書申入候、仍去年ハ御下向御造作御苦勞申計無御座候、
乍去先年已來之儀申承、本望之至ニ奉存候、其段龍伯様

・陸奥守殿各御一類中へ被仰達ニ付て、兵庫頭殿ハ御祝
着之旨被仰下候、殊 公儀憚多被思食、御國之端へ蟄居

被成之段、御父子様へ申上候處、竜伯・陸奥守殿へ御

入魂之上へ、御機遣被成間敷由 御詫ニ候間、御祝着之

旨、爲御礼御使者被遣可然之由、兵庫頭殿へ申入候条、
能様ニ御相談可被成候、恐々謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長七年〕

二月二日

本多佐渡守

正信〔花押〕

田中伊豆守殿

人、御中

1609

『在官庫』「義久公御譜中ニ在リ」

以上

其日後不得御意候處ニ、去年十二月二十六日之尊書、二

月二日ニ令拜見候、然者御同名圖書頭殿被指上之旨、先

以珍重存候、粗如申上候、圖書頭殿於御上着者、内府

御前之様子猶以申談、自是以使者可得御意候、内府様

一兩日中ニ御上洛之儀候間、此砌被成御上、御入魂乍恐

尤ニ奉存候、尚追而可申上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長七年〕

二月四日

山口勘兵衛

直友〔花押〕

龍伯様

薩广少將様

參御報

1610

『案文野添氏藏』

其後無音背本意存候、仍和久甚兵衛尉殿下向之刻、預御

状候間、御報相認候處、兎角可申承と存候處、佐土原よ

り直ニ和久殿上洛在之ニ付而申後候、殊懸御目、上方之

様子共可承と存旁殘多候、然者爲呂宋渡海、京衆宗香と

申入可爲下向候哉、貴所就御入魂之儀、馳走似合之儀た

やすき御事にて候、將又比志嶋紀伊守罷下刻、爰元にて

かたつきやかせ候而、上せ可申之由候而、形を被差下候

間、斟酌ニハ存候へ共、適爲被仰下儀与存、散々不出来

候へ共、二ツ差上候、則右きりかたも相添上せ申候、可

被御覽合候、尚似合敷御用之儀共被仰下候者、疎意を存

間敷候、恐惶謹言、

三月二日

羽兵衛入

惟新

山口勘兵衛尉殿

御報

〔右頁本、野添氏ニ有之、右ノ如ク御直し等入り、改而御下書ナルベ

シ〕

(右ノ注記ハ朱ニテ抹消シアリ)

1611

〔義久公譜中〕

一慶長七年壬寅之春、遣島津圖書頭忠長及旅庵、到於京師告愚意於 内府、忠長到于京師者孟夏、依大老告旨趣、内府見忠長而後曰、龍伯不催上京者以我言爲僞乎、胡爲兩舌以欺人、而神得而不可欺、遂書誓文賜之、

記左、四月十一日御誓書也、然而六月上旬到著、故記于此矣、

兩度使者云々、「左ニアリ」

1612

「御文庫廿二番箱九卷中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

其後令無音候、心外候、仍去々年、上方就不慮之出合、當方之衷心遣千萬候、然共無事之儀被仰下候、依其今度圖書頭差上候、定事能相調候欵、此等之儀共爲可承合用飛札候、拙者致老衰、弥無正躰候、今一度遂對面度心中迄候、次實所事從 秀賴様被召寄、當時至大坂堪忍之由其聞候、尤可然仕合候、自然於 御前御出合之時者、能様取合所希候、將又黑絹一端進之候、補書面計候、謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長七年カ〕三月

澁谷對馬入殿

「御譜中ニ左ノ猶々書アリ」

「義久公御案文なり」

猶々奉對 秀賴様へ、レイ社之起請文共上置申候条、

于今少モ別儀無之候由、自然之時ハ取合頼入候、ヲンミツ可有之候、又うたいの事ハ齒かけ辨舌不叶候へ者、近年ハチャウジタル分ニ候、何共老衰口惜候、

1613

「義弘公御譜中」
「正文在之」
(本文書ハ一四七六号文書ト同文ニツキ省略ス)

1614

「御文庫廿二番箱九卷中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

去年亨徳院下國之刻預御狀候、細々披覽本悦候、然者彼方無事ニ上京候条、爲拙者令満足候、次我等就上洛之儀、以同名圖書頭様子申上候、其御返事次第、必可罷上用意候、於御前出合之節者、可然様取合頼入候、將又度々預御音信候キ、御懇志之儀難謝次第候、猶期後音候、恐々、

〔慶長七年ト朱カキ〕
四月十日

山岡道阿弥

「義久公御案文なり、慶長七年なるへし」

1615

『在官庫』『義久公御譜中ニ在リ』

兩度使者祝着候、然者薩广大隅諸縣之儀、此間被相拘候

分、相違有間敷候、少將事其□跡被相讓事候間、不可有別儀候、兵庫頭儀者、竜伯ニ無等閑候間、吳儀有間敷候、日本國大小神祇、別而八幡大菩薩、毛頭不可有表裏者也、

〔朱力キ〕
〔慶長七年〕

卯月十一日

内大臣

御在判

竜伯

1616
〔義久譜中〕

一乃授其誓書於忠長、則忠長受之、敬屈百拜奉持珍戴而退、欲使家臣圖師太兵衛尉堅封 台書、從和久甚兵衛尉下薩摩獻 太守、于時誠圖師氏曰、爲此書也價倍於趙璧、不可敢忽、汝專血氣而勿急、任意惰而勿滯、海陸共慎往以宜獻府君也、圖師氏等聞其誠言、丁赴海西之時、順風少寡而逆風衆多也、由是六月上旬、到着薩摩、則龍伯已受其書、開緘奉讀再三、而後欣欣然決參洛矣、

〔頭也〕是日以下六月/陽二獻へ之

既決參觀欲企首途之際、逆臣伊集院源次郎之黨徒再起國中、難分黑白、群疑滿腹、然則吾決參洛如之何乎、無社稷宗廟之老正直明智之臣者、苟且不有國家之得平安乎、於茲伊集院下野入道抱節・比志島紀伊守國貞・

1617

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶々巨細之儀者、彼五次右衛門尉へ申合候条、不能一二候、

昨日者土持大膳を以被仰越候趣とも承届、御返事申候、定而可申達候、仍而川原毛之馬之事被仰越候条、只今ひかせ進之候、手に合候而御用に立候者、可爲本望候、土大膳にても申候やうに、當分者法花千部最中にて承紛候間、御方就御馬追當所人數之事、如例年罷出る儀者罷成間敷候、併勿論大方如形者申付候、隨而者むれおとされ候事、一向不入事にて候まゝ、弥以可被停事肝要に存候、恐々謹言、

〔朱力キ〕

〔慶長七年〕卯月十五日

惟新(花押)

少將殿

床下

「御文庫拾七番箱十六卷中」家久公御譜中ニ在リ

猶々被入御心御見廻、一段被成御満足候、委曲以

御書被仰入候、從拙者猶能々可申入之由候、具東郷

藤兵衛方可被申入候、

去三月十日之尊書拜見仕候、御門跡様御煩被聞召付、

爲御見廻態被仰上候、遠路之御尋、御外聞実儀被成御祝

着候、正月十日より以外之御煩にて御座候つる、然共道

三之以御藥早速御本服候間、可御心易候、次圖書頭殿被

成御上洛、内府様へ之御札相濟申候、御無事之儀も大

方相調申様承候、珍重奉存、先々鹿皮十枚被下候、毎度

之御音信忝存候、旁迫而可申入之由、可然之様可被申入

候、恐々謹言、

「朱カキ」

「慶長七年か」

卯月十五日

友枕齋

如貴(花押)

伊勢兵部少輔殿

(貞息)

「御文庫廿三番箱十五卷中御案文」

乍御返事細々拜見仕、祝着至極候、抑我等事者不及是非

候、龍伯・少將内存之儀共、ひたすら貴所を御頼母敷存、

同名圖書頭を以申上る之処、此度者無御供之由御書面ニ

候キ、扱々迷惑仕候、併御息上野介殿御供之由、以御同

前之儀候条、最前以來拙者申分之段々、野州へ能々被成

御熟談、始末爲能様、御助成頼存之外無他事候、恐惶、

「朱カキ」
「慶長七年」卯月十六日

惟新

本多佐渡守殿

「義弘公御譜中、案文在新納伴左衛門忠雄トアリ」

「國分澤氏藏」

「口切ル、」

一ひろさ八寸二分ノ餅六ツ 入物ゆかふた
三ツ

一ひろさ四寸二分ノ餅六拾 入物ふちたる
六十

一花米 三斗ハ

一鱸之魚 三懸但臺三ツ、

一名吉之魚 三懸但臺三ツ、

一御水かゑ 桶 九ツ但まけ物、

一てうし 銚子 三ツ但檢物、

一ひさけ 提 三ツ右同、

一ほうわうの鳥形 鳳凰之 一番

一白布 三拾ハ

一小袖厚板薄板二間 拾四疋

一織物 五疋

大ぬさノ料

一 扇あし 三本但金薄、

一 ミかき付ノ扇子 五正但青黄赤白黒、

一 色々ノ絹 十二

一 麻ノにこぎ 十二さけ

一 女中方ノ御手くさの物、是ハ

くし・たたる紙・へに・しろい物・

はこに入たる鏡一面・かもしまき

などノ類手箱つゝら、

一 壇鏡 四面

一 つはめの鳥形 四ツ

一 各作ノ刀 一腰但金作、

一 具足 三兩

一 甲 勿

一 太刀 一對

一 長刀 一對

一 鎧 一對

一 張弓 二張

一 征矢 二腰

一 掛錢 三百貫文

一 雜紙 老束

一 麻苧かうそ但あうそ 拾ラ一め

一 長木 拾ラ

一 竹 老束

一 薦 四枚

御引物

一 御太刀金ぶくりん 一腰

一 御馬 二疋

一 鞍置馬 老疋

一 鳥目 百疋

御一家中・御老中・國々ヨリ、馬・太刀被下候、

慶ノ七 卯月拾七日 大工大夫(花押)

公文所 參

1621

「家久公御譜中」 「正文在島津安藝守久雄」

去正月之旁(考)札具披閱、尤欣悦之至候、仍從龍伯任承之旨、
去年袈裟之儀下進之候之処、御礼狀却而令迷惑候、殊太
刀一腰・銀子三枚御隔心之至候、抑都鄙和与之儀、御勝

手ニ相濟之由、尤目出珍重候、此度者先龍伯可爲御在洛
之由尤候、惣別御祈禱之儀、猶以不存疎意候、此中者大
津所用故之滯留、旅庵下向之儀も俄承知候故、書中不能
巨細候、去比者就所勞之儀、遠路御使御懇意難申謝次第
候、諸事後跡可得芳意候、穴賢々々、

「朱力キ」
「慶長七年」四月廿五日
「如雪ノ御判也」
（花押）

羽柴少將殿

夏日同詠卯花盛久

和歌

大膳亮忠俊

よろつ世もへぬへきものかあまてらす月にまかひてさけ
る卯の花

夏日同詠卯花盛久

和歌

左衛門尉久高

いやつきにさきこそにほへ卯のはなのかきねをとをミし
けり相つゝ

詠卯花盛久

和歌

沙弥抱節

松か枝にたちまじりたる卯の花のさかりは千とせふへき
とそおもふ

詠卯花盛久

和歌

少將忠恒

うのはなのさけるさかりも久かたの月のひかりやいろを
そゆらむ

卯のはなのかきほつたひはさやかなり空にしられぬ月の
夜な〜

夏日詠卯花盛久

和歌

紀伊守國貞

種をたれなにとうへけむとくをそく咲てかきねにつゝく
うの花

夏日同詠卯花盛久

倭歌

夏日同詠卯花盛久

倭歌

大炊助久正

兵衛尉宗親

一へより八重にさきそふ卯のはなのえたもたハ、の雪と
見るまで

いつ迄のなかめならまし白妙に卯の花さける里のけしき
は

夏日同詠卯花盛久

和歌

詠卯花盛久

和歌

左衛門尉忠通

沙弥宗察

いくたひかゆふへの色をよそならむ卯の花さける陰の宿
りは

しけりそふかきほに見ゆる卯のはなかハらぬ色をとし
くにして

夏日同詠卯花盛久

和歌

夏日同詠卯花盛久

倭歌

左兵衛尉道武

左衛門尉友知

さむからて雪とそ見ゆる卯のはなのさかりになるゝ暮こ
とのそて

にほひきてさかりしらする卯のはなの色より明るけふこ
とのそら

詠卯花盛久

夏日同詠卯花盛久

倭歌

倭歌

沙弥休心

右衛門尉豊信

やまさとをなくさめとてや卯のはなのさかりのかけのひ
さしかるらむ

日かすふる雪かとそみるうの花の咲てかきほもうつむは
かりに

詠卯花盛久

倭歌

沙弥與進

ときしらぬゆきとそ見ゆる卯のはなのさきて日かすのつ
もる牆ほは

1623 「正文在恒吉八幡」

首夏風

誰か〔短冊〕ために夏かへるまで一もとの

はなをしかせの吹残すらん 忠恒

郭公

ほととぎすいつちゆくとも暮ことの

やとは軒はの松を忘るな 國貞

早苗

村雨のはるゝ行ゑに里みへて

なひく早苗や露こほすらむ 宗察

夏月

しはしたゝ惜に月はやすらへて

明やすき夜はうらみならずや 休心

鶉川

山きはの蟹とみえて河をゆく

ひかりやともす鶉ふね成らん 抱節

夕立

遠山や入日のかけへさしなから

かたへにかゝる夕立の雲 忠俊

祈空戀

ゆふしての神に祈をかけてたに

浅きえにしハはかなかりけり 宗親

古寺

おりいつゝ雲のそなる古寺ハ

思ひやるたにさひしかりけり 豊信

旅戀

打そひてある時たにもあかなくに

たひにしあれば猶そ戀しき 友知

海路

興津なミわくるまにくなかめやる

雲こそふねのよすかなりけれ 与進

後朝戀

かへるさのあしたハ身をも分る哉

馴ぬる人に心のこして 忠通

納涼

くれことに涼しきかせをもよほして

友とこそなれ窓のなよ竹

久高

寄神祇祝

岩清水なかれたえせぬ神慮

ゆくゑを守れわか國の人

龍伯

慶長七年卯月廿六日

八幡當座
法樂當座

〔左に写置といへ共、参照ノ爲御譜中にて写せり〕

1624 『在旧記』

慶長七年卯月廿六日

投谷八幡御法樂和歌

(本歌草ハ一六二三号・一六二三号詠草ト同文ニシテ省略ス)

初戀

道武

み初つる人に心を尽すこそ猶さかり行思ひ也けり

逢戀

久正

黒かミのとけてねし夜の名残こそ猶ミたれ行物おもひな

れ

夏日同詠松間郭公和歌

圖書頭忠長

岡野辺の松より松は明る夜の梢をつたふ郭公かな

貞昌

靈地到時心自眞 昔年出頭垂因 國家長久弥堅護 萬古

名高住吉神

理心

未卜先生何宿辰 降來凡世古今論 白雲遂處宮香霽 千

載流名住吉神

1625 『在官庫』

追而申上候、御太刀一腰・御馬一疋・硫磺千斤・砂

糖一桶御進上、披露仕候、御心安可被思召候、尚和

久甚兵衛可申上候、以上、

御同名圖書頭殿被着、蒙仰旨、本多上野介申談、披露申

上相濟、則 御直書被進之候間、圖書頭殿へ相渡申候、

然者竜伯様御上洛之儀、一日も被成御急、御尤ニ存候、

内府様八月二日ニ關東へ御下向之儀候、竜伯様御上洛、

六月廿日巳前ニ御出船被成、可然存候、其子細者、八月

内府様關東へ御下向被成候へハ、是にて御對談間も御座

有間敷候間、万端被差置御急被成候而、内府様御在洛

中、切々被成御對談、弥御入魂候やうに、御分別尤と存

候、委細者從圖書頭殿可被仰入候、尚以旅庵口上ニ申談

候間、能く被届聞召候へく候、何ヶ度申候ても、御上洛無御油断やうにと、存儀迄ニ候、万嘉拜願之節、可得御意候、恐惶謹言、

五月一日

山口勘兵衛

直友(花押)

薩广少將様

参人、御中

1626

『在官庫』

尚く於趣者、旅庵申談候条、可被申入候、此度も和甚兵へ相添差下申候間、具ニ可得御意候、以上、

先度御同名圖書殿御上洛之砌、御狀拜見、本望之至存候、然者御兩殿より蒙仰候通、則申上候処ニ、御前無別相濟、御直書被之進候、御満足と存候、左候へハ、龍伯様御上洛之儀、一日も被成御急候様ニ、被相談最と奉存候、八月 内府様関東へ御下向之事情間、龍伯様御上洛六月廿日以前ニ御出船被成、可然存候、此節無御油断様ニ、御分別專一と存候、將又沈香壱斤贈被下候、御懇意難申盡存候、猶爰元之様子、旅庵へ具ニ申入候間、可被仰上候、万嘉追而可得御意候、恐惶謹言、

山勘兵衛

1627

〔朱力キ〕
「慶長七年」五月一日

直友(花押)

惟新様
御報

「家久公御譜中」

島津圖書頭忠長於京都決和諧、則 内大臣家康卿賜誓紙於龍伯、其文曰、薩摩大隅諸縣此間、領知之分不可相違、少將者受其讓、則非別儀也、兵庫頭亦以無等閑于龍伯、不可及異儀焉、詳記義久譜中、

1628

「正文在之」

今度圖書頭被成御上、何も相濟、内府様御神文内見仕候、然者龍伯急度可被成御上洛事、御油断無之様ニ尤奉存候、八月ニハ爲御鷹野、内府様関東へ可被成御下向旨候間、龍伯六月ニ被成御上洛候様ニ、尤奉存候、我等式も八月まで伏見ニ打詰申候間、龍伯御上洛可得御意と存知、大慶此事ニ候、猶爰許之儀、りよあん可被申候間、委不申入候、恐惶謹言、

「慶長七年」

五月朔日

寺志广守

正成(花押)

羽少將様
人、御中

「家久公御譜中ニ在リ」

1629

「義弘公御譜中」

「正文」

以上

御札本望之至候、殊爲御音信、巻物一端送給候、御懇意爲悦此事候、然者竜伯様・少將様を被仰上通相濟环重候、此節急度竜伯様御上洛、無御油断様御相談尤候、次佐渡守所へ巻物二端、拙者請取候、頓而申届、自是御報可被申入候、向後相應之御用、不可有疎意候、猶旅庵へ申渡候条、不能具候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「慶長七年」

五月朔日

本多上野介

正純(花押)

羽兵入様

貴報

「家久公御譜中」

「正文」

(本文書ハ一六二五号文書ト同文ニツキ省略ス)

1631

『在鎌田氏』

芳札具令披見候、去年者早々申談、御殘多存候、然者

竜伯様 少將様を被仰上通、御前相濟目出环重候、定而可爲御同意候、此節無御油断、竜伯様御上洛之儀、急度尤存候、次佐渡守所へ硫黄五十斤御音信候、我等請取候間、近日申届、自是御報可被申候、向後相當之御用於蒙仰者、可爲本望候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

「慶七カ」

五月朔日

本多上野介

正勝判
「本多正純トテリ」

鎌田出雲守様

1632

紹巴法眼わかかりし時より、ならの京ハはなれ、此京に移住て、いたく敷島の道にふけり、果して宗祇法師ハ遺塵をつき、古いまの間に、只ひとり歩かことく、世挙て詞の華の色にあて、香をうつさんことをこひねかひぬ、あら玉の春の朝、過行秋の夕には、世間の盛衰を觀し、年月を送りむかへて、八十年に一とせたらぬ卯月の比、おもき病の床はなれかたく、終に生者不衰のことへりを、のかれあへさりし御事をきくより、愁袂をひたし、くれまとふ心に、牌前の手向もおさく過ぎ、日數に立をくるゝほとに、いつしかきえにし、けふにめぐりきぬれば、

彼法眼世に希有なりしを、唯一乘法のことへりにならず
らへ、句のかしらにすへ、おろかなり、素懐を筆に仕る
事になりぬ、

夢路にもかへりとまらぬ別より理あるよの例なるらん
今よりハ昔にならの里人ととふ手向にはやまとことの
葉

空蟬の世の人ことの袖にかけて名残忍ふの木の下露

いかにしていつ忘れまし秋の哀春の情とくみ馴しよを
契りあらハよしや先立「本ノマ、」いくるとも蓮の花の縁にしまか

せぬ

せきかねて袖行水も三瀬川かへらぬ浪とさわく別路

うき世そと思ひけるにもなきをしたふこと「ヨメズ」ハり「ヨメズ」す我

泪哉

時鳥啼や五月のけふよりは別し跡「本ノマ、」を尚初めなれ

うへもなき道に入ぬるしるへとも雲間の月の行ゑをや

ミン

慶七年

中夏十二日

「右、本田助之丞藏文書也」

1633

『雜抄』

尚々惟新此看經之次第、依失却今度中性院へ次第之
儀、被仰上由候ニ付、承及候、是者徒ニ而候哉、左
様成事も然々不存知候、何れ委相傳專要候矣、

到本寺長々逗留、苦勞之儀察存候、仍初夏已來、腫物相
煩散々式候、種々雖令療治候、無其驗于今迷惑之躰候、

其元大方隙明候者、我等病中之儀候間、先可被致下國候、

次中性院へ招魂之看經、惟新傳受之由候、我等も此看經
望候、俗躰ニ而仕通有之者、頼心坊へ得御意可罷下候、

爰元にて我等相傳可仕候、并金藏坊へ本田六右衛門矢入

之看經相傳候、又鶴飼被傳候者、矢入之通と聞得候、于

今金藏坊於堅固者、此兩条之差別具相尋、下國肝心候、

恐々謹言、

五月廿日

龍伯



「御朱印也」

甚堯坊

1634

「家久公御譜中」

「正文有之」

爲御迎一書申入候、今度之御上、餘遅く御座候間、御舟
中いかゞと無御心元存、如此ニ候、我等之待かね申儀、

御推量之外候、御噂をハ山口勘兵衛殿と度々申出義候、被成御急御上り尤存候、何も面上を以可得貴意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長七年〕
五月廿二日
羽左衛門大夫
正則(花押)

薩摩少將様
人々御中

1635

〔本文書ハ一五〇六号文書ト同文ニツキ省略ス〕

〔雜抄〕

1636

〔家久公御譜中〕

〔正文〕

爲年頭之祝儀、太刀一腰・馬一疋到來、喜悅候也、

〔朱カキ〕
〔慶長七年カ〕五月廿七日
○〔家康朱印〕

薩摩少將とのへ

1637

『本田氏藏』

加増目錄うつし

薩州川邊之郡田部田村

高七拾石

大柴原之門

高四拾八石八斗九升五合二勺
鹿籠村
西田澤水之門

高七拾石六斗九升六合
指復拾九丁村
多羅之門

高二石八斗七升二合
同所
甚左衛門屋敷

高七石九斗三升貳合
鹿籠村
浮免

合式百斛三斗九升

右知行、爲加増被宛行者也、

慶長七年

六月三日

鎌田出雲守

政近判

比志嶋紀伊守

國貞判

椋山權左衛門尉

久高判

圖書頭

忠長

〔宛書無之、本田助丞欵〕

1638

〔御譜抄〕

一和久甚兵衛鎌田出雲守同心(道力)ニ、慶長七年六月三日下着

也、

1639

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

今日者其地へ可爲御越之由示給候、尤存候、然ハ龍伯

様より被仰出儀共御座候とも、具承置候者、先々御返事申させられへく候、貴所御覚悟可在之儀共御座候間、巨細従是臆而可申越候、其内ニ一着之儀共、御申有間敷候、比紀州へも、早々其地へ可被參之由申遣候、爲御心得令啓候、恐々謹言、

〔朱力半〕
慶長七年六月五日

惟新(花押)

少將殿
參

1640
「義久公御譜中」

「正文有之」

以上

亨徳院被罷上付而、預貴札候、畏存候、仍御同名圖書頭殿被差上候、内府様御前之儀、弥對貴殿別儀無御座候間、頓而御上洛奉待候、此表相替儀無御座候、於様鉢へ、山口勘兵衛方へ可被申越候、恐惶謹言、

六月十日

山岡法印

(花押)

龍伯老

人々御中

1641
「圖書頭忠長譜中」

慶長七年壬寅之春、法印龍伯遣忠長與新納法師旅庵赴京師、而去歲政近所持來之窮誓約、于時 惟新齋告井伊兵部少輔直政・本多佐渡守正信曰、素與 内府家康卿情同親戚、恩重丘山、且復慶長四年夏之孟、互爲誓約堅如金石、以欲守伏見城者迄再往、而鳥井氏・内藤氏無應諾之言、不得已而不能賊徒之遁其中抱罔赦之罪、雖然惟新素非立論之首者、上下神祇所共明也、謹以冀垂慈愛上達聖耳、忠長到于伏見達件旨趣、而後見于 内大臣家康卿、乃賜大鷹一連・龍蹄栗毛置鞍一疋矣、且復 内府曰、龍伯不催上京者、令我言爲欺乎、神不享非禮胡爲有兩舌哉、遂書誓文以賜焉、忠長受之頂戴百拜、而後先我使家臣圖書大兵衛尉堅封台書、從和久甚兵衛尉殿、下薩摩獻太守、于時誠圖書曰、爲此書也價倍於趙璧、海陸共以勿敢忽焉、圖書等丁赴薩陽之時、不幸而天無順風送數日於海浦、至乎六月上旬著乎薩州、獻件書於 太守矣、龍伯尊君老病未平復、而欣然乃決上都矣、丁此之時、 太守賜金簡玉字、記左、

1642
「正文在島津圖書久通」

急度令申候、

一今度和久甚兵衛尉殿下向候而、内府様御前無殘所、

大慶至極候、殊御書物致頂戴之段不淺候、併其方辛勞之驗候、

一龍伯様來月者早々可爲御上洛之由候、每事之國形儀ニ候へハ、諸篇難調故、延引之様ニ候、其間之儀、萬端被入念簡要候、

一貴所同心之衆、何茂辛勞仕之由可被申候、就其下々之者共氣任之様ニ承付候、何篇可相嗜之旨、堅可被申付候、先々此等之段爲可相達、態用使書候、猶期後音省筆候、恐々謹言、

六月十日

忠恒(花押)

圖書頭殿
御宿所

1643 『雜抄』「義弘公御譜中正文在加治木衆竹内八右衛門トアリ」

尚々愚判ニ點を少加申候、爲心得候、以上、

和久甚兵衛尉殿今月三日下着候、然者上方御仕合如何可有之歟と、令氣遣候之處、内府様御前無吳儀、剩御神裁之条々、殊拙者身軀迄も忝被仰出候、誠ニ外聞実儀此

元之満足、可有推量候、就夫 竜伯様急度可被成御上洛

之由候条、弥其元之儀無油断可有御才覚候、扱々 竜伯様御上洛迄貴所可有在京之由候、御辛勞之至無申事候、

眞連坊・市織江以別紙可申上候得共、辛勞之通相心得、

可有傳達候、尚追々可申候、恐々謹言、

〔朱力半〕
〔慶長七年〕六月十一日 惟新(花押)

圖書頭殿

1644 「古御文書三番箱中」

起請文

一世上物沙汰承付候儘申出候處、被成靈社之起請候、先々神妙令存候、雖然惟新・忠恒企与者不承候、乍勿論左様申候共不覚候、自然申候者、可爲所致老耄候、此儀度々雖申分候、無御納得候、咲止千万候、猶々此旨申事候、可被聞置候、如斯物沙汰之儀共、無腹藏申候上者、從其方茂被聞付儀共於有之者、不差置可被仰候、自是茂自今以後別儀有聞敷事、
一京儀相調、貴所へ示達之上者、向後爲我等不可存別儀事、
一息女事、弥不相替様憑入候事、

右之旨若於有偽者、

奉始上梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神冥官冥衆、惣日本國中大小神祇、別當國鎮守正八幡大菩薩 霧嶋六所大權現 富隈稻荷大明神、殊薩州擁護新田八幡大菩薩 開門正一位并麿島諏方上下大明神 稻荷 戸柱 春日 若宮勸請諸神、取分氏神 伊作大汝八幡大菩薩 妙見大菩薩、其上愛岩大權現 大天狗 小天狗 山々峯々居住給諸天狗、加之軍神摩利支尊天 九万八千軍天童 天滿大自在天神御部類眷屬等、神冥爵身上深重可罷蒙者也、仍起請如件、

慶長七年六月十三日 龍伯(花押)

少將殿

1645 「古御文書三番箱中」「義久公御譜中ニ在リ」

此間者不申通、非本意候、仍拙者上洛之儀、自京都御急之条、來月者必可罷立覚悟候、於有透者、近々越着之儀可待入候、猶從年寄前可申候、恐々謹言、

又四郎殿

龍伯

1646 『在時任氏』

猶丑刁之氣ハかふ氣と見申候、是又御坐候哉、承度候、以上、

昨日入日前ニ亥子丑刁卯迄氣立申候、如何御覽候之哉、我等見申候分ハ、夏秋冬之死火と見申候、乍去夏ハ過申候間、秋冬たるへく候哉、巨細之儀者面談を以可申承候か、先書ニ申候やうニ、其方弟子衆之かふきも承度候、何共兩日之氣之様子、委敷御報ニ可示給候、恐々謹言、

「慶長七カ」 六月廿九日 羽兵入 維新御花押

金藏坊 床下

1647 『全』

猶々弟子衆之かふき承度存候、御返事待申候、以上、夜前七ツ時分ニ、巳之方ろうし之方へ氣一筋立申候、此氣ハまちひきなどにてハ御坐候へん哉、貴所御覽候て、様子可承候、度々申候ことく、其方弟子衆之沙汰をも承度候、委御報ニ可示給候、恐々謹言、

「慶長七年款」 七月朔日 羽兵入 維新御花押

金藏坊
床下

1648

〔右ノ考〕
時任金藏坊義高

初源左衛門 後号明学坊又金藏坊、或作義俊、
天文七年戌十一月生、天正四年高原城攻・同六年大友
軍ニ軍功アリ、慶長十年二月死、年六十八、法名勝山
永久居士、

1649

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

返々乍重言明日之御越、萬一御相違之儀も候は、
御爲いか敷候ま、是非共諸事を被指止、明
日早天御越あるへく候、當世之人の所存ニ者、何
たる由をもかな、我々父子之違目ニ申なすへきと、
被相工鉢と見及聞及事候間、事くとく候へとも如此
候、此到來ニ付而 龍伯様御事も、明後日者早々必
可被成御越通、只今使を以申上候、是又爲御存候、
從我等前貴所へ申渡、貴所此方ニ於被相越者、 龍伯様
も可被成御越之由被仰越候条、令申候処に、今日者難去

隙入ニ付而、明日早天此方へ可被相越之由、只今使を以

承候、尤珍重候、乍不申せめて明朝早々可有越着事肝心
候、相構而不可有御相違候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長七年七月四日〕
惟新(花押)

少將殿
進之候
より
惟新

1650

〔和田氏譜中〕

慶長七年壬寅初、 公歸自關原、東西未平神祖、乃使山
口勘兵衛尉直友等飛檄和 竜伯公於關東、往復歷年、至
是和成、 忠恒公遂將朝之、當是時也、内外動搖危如果
卵、要皆歸 公、於是七月、秋覺及親密臣松本覺右衛門
尉武秀・市來治右衛門尉家鎮・鎌田與兵衛尉政益・白坂
宮内入道爲安盟于帖佐、五日、同就御家老伊勢平左衛門
尉貞成上盟、載其文曰、

1651

敬白起請文之事

一上方御弓箭以來、 内府様へ被仰隔ニ付而、 惟新様

1652

〔御文庫四拾八番箱中〕

寺澤志广守殿を使者、あくね堺西方と申在所ニ留置たる由、本田六右衛門尉所を申越候、其御方へも申上たる由

伊勢平左衛門尉殿

(貞成)

白坂宮内入道
為安

鎌田与兵衛尉
政益

市來治右衛門尉
家鎮

和田右京亮
秋覚

松本覚右衛門尉
武秀

慶長七年七月五日

神名
右條々於令違犯者、

御一人之御氣遣最中候、就夫縦世上之人逆心雖有之、惟新様迄不奉見捨、抛身命無二之御奉公可仕之事、一計策之儀、從何方申來候共不入其案、則可致言上之事、一御爲ニ可罷成儀承付候者、善惡共不寄実否可申上之事、付御隱密之儀被仰聞候共、曾以口外仕間敷候事、

1654

〔此正文御文庫拾六番箱十卷中ニ有之 文面異同ナシ 年月日姓名在之 如シ〕

1653

『本田氏藏書』

敬白起請文之事てうさにて、但御上洛ニ付而富
限と御かけひき御使共有之刻、

(本文書ハ一六五四号文書ト同文ニシキ省略ス、但シ日付ハ七月七日トアリ)

候条、定可被聞食候、此使者其方へ早々被食寄、意趣等をも被聞食候て可然存候、左様ニ候へ、舟本も可被參、送馬以下あまり見くるしく候へぬやうニ被仰付、肝要ニ候、勿論まかない等之儀も可被仰付候、此跡參候寺志の使者、みなと鹿へ被食寄候ニ、送馬荷鞍之躰にて候つる由申候、就中鹿ニ滞留中、私之まかない不相續故、所望之躰にて候つれ共、不被出之由承及候、内々事之なりかね候儀者、公界には不相知、如此候儀にて遺恨ニなり候事、都鄙有習に候間、念を入られ尤候、又肥後表之様子承及候とて、本六右申越候書面之躰、爲御心得進之候、恐々謹言、

七月六日

惟新(花押)

少將殿

▽敬白起請文之事

一上方御弓箭以來 内府様へ被仰隔ニ付而、 惟新様御一人之御氣遣最中候、就夫縱世上人逆心雖有之、 惟新様を不奉見捨、抛身命無ニ之御奉公可仕事、

一計策之儀、從何方申來候共不入其案、則可致言上之事、
一御爲ニ可罷成儀承付候者、不寄善惡実否可申上之事、
付御隱密之儀被仰聞候共、曾以口外仕間敷之事、

右條々若令違犯者、
(年主)奉始上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神五道冥官等、惣而日本六十余州大小神祇、別(者)當國鎮守正八幡大菩薩 霧

嶋六所大權現 當所擁護新正八幡大菩薩 薩摩新田八幡大菩薩 開闢正一位 愛宕大權現 稻荷大明神 諏方上下大明神 天満大自在天神御部類眷屬、神罰冥罰各罷蒙身上、於今生者受白黒頼之重病、於後世者可墮阿鼻無間地獄也、仍起請文如件、△

慶長七年
七月五日

本田助丞
元親(花押)

同勝吉
親次(花押)

伊勢平左衛門尉殿
參

1655

「御文庫三番箱玉鑑中」「義弘公御譜中ニ在リ」

便宜之由候間、一筆申候、其以來者久々不申承、御床敷存計候、去四月廿一日之芳輪相逢候、去春我等所勞之儀就有其聞、度々御懇之儀難申述候、於于今者最前之返書可届申候間、不能拜上候、抑御同名圖書頭上着、於伏見一段可然候と承及満足申候、近日者龍伯御上之由、各此段被待入候、内府者來月至東國御見廻之由申候、同者此以前御上着候へかしと申計候、

一羽林御祈禱之儀、時々御懇承候、聊以不存油断候、隨分勵精誠候、乍恐可御心易候、

一漸涼風、定燒物可爲御調合与御床敷存候、他事期後音

令省略候、穴賢々々、
「朱カキ」

慶長七年七月八日

「如雪ノ判也」
(花押)

羽柴兵庫入道殿

1656

『在官庫』『義久公御譜中ニ在リ』

以上

重而之尊書具ニ拜見仕候、隨而御家之儀、御別儀御座有間敷との、從 内府様御神文被遣候之旨、弥以目出度存候、此上ハ、竜伯御上洛之儀、御急被成尤ニ存候、兼而

御報ニ如申入、我等事任御書中可罷上候間、於様子者可

御心安候、委細者兵庫頭殿之御使者、健軍猪右衛門方

へ口上ニ申渡候間、兵庫頭殿御雜談可有之候、恐惶謹言、

〔慶長七年〕
七月九日

羽柴廣嶋少將
正則判

龍伯様

羽少將様

御報

1657 「御文庫四拾八番箱中」〔家久公御譜中ニ在リ〕

御上洛延引之儀、先以珍重存候、將又有方上洛之儀、御

談合最中候、然者彼子細洩候而者可爲笑止之条、此談合

被承候人衆、三原諸右衛門尉なとへ口外申間敷旨、神文

をさせられ候而可然候へん哉、又上洛之途中可致供者無

退出様、覚悟專一ニ存候、能く御談合候而可然存候、恐

く謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長七年〕七月十一日

惟新(花押)

少將殿

まいる

惟新

1658 『在官庫』

六月十二日之御書中、當月九日令拜見候、抑先度御同姓

圖書頭殿被仰合被指上候、御内存之趣得御意、御直書被

成下候条、旅庵江相渡差下候、御前御仕合無殘所候、於

趣者旅庵老和久甚兵衛申含候条、只今不及申候、兼而如

申上候、御上洛可被成御急儀專一ニ存候、來月者關東へ

御下向弥相定候条、路次中之儀も無御油断可被成御急事、

申上度心底迄ニ候、猶御上洛の御可得御意候、恐惶謹言、

〔慶長七年〕
七月十五日

山口勘兵衛
直友判

龍伯様

參御報

1659 「義弘公御譜中」

〔正文〕

已上

御札忝拜見仕候、仍而旅庵下着ニ付而、爰許之儀、聊無

御別条之趣、被申上候旨、聞召御届被成、急度電伯尊老

御上洛之段蒙仰候、近比目出度奉存知候、將亦御手前様

之御儀、最前申述候通、是又御心易可思召候、何茂此方

之儀、全以毛頭御相違無御座候、每事上方之儀、御同圖

書頭殿可被仰越候間、一々不能申達候、委曲追々可申入候間、不能具候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長七年〕

七月十五日

本多上野介

正純(花押)

羽柴兵庫頭入様

貴報

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

今度上之山の城普請之様子見申候ニ付而、存分共候假兵部少輔へ具申合、仕合次第可申達之通申さかせ候キ、定可有御聞候、乍不申能々御思案候て、以來之儀ともを分別あるへく候、

一うへの山の様子我等見申分者、いかほとせいを入られ候共、御存分ニハ可難成と存候、

一時分柄諸侍屋敷移なと候ても、其身大形ならぬ儀共にて候、諸侍私之普請を専ニ仕候者、公儀之御普請者可難調候、屋形迄を前々御うつし候ても、見かけいか々敷存候、又諸侍御供申、一度ニ可罷移事ハ、とても急ニ可難成候欵、

一諸侍屋敷之地あまり海近過候、先年寢占より兵船參候而、既いまの屋形ニ矢を射籠候、

一竜伯様鹿兒嶋へ無御移ニ付而も、清水へ御移候へハ、第一諸口つまり候間、向後之御きつかいあるまじきと存候、

一以前我等も鹿兒嶋へ可罷移なと存候て、屋敷を見せ候時も、清水之事ハ一段可然在所之由、もりはかせ申候、

一萬一被仰出候儀共、其ことく首尾なき事、無念なるなと申人も多分在之物にて候、尤さやうニあるへき事共にて候、乍去物ニより悪をはいく度も改られ候事、往昔以來在之事ニ候、殊更或屋形を過半被造候、或者諸侍之家居等をも仕廻候なと申ニハ、各別之事にて候間、其遠慮も有間敷事と存候、勿論相捨候へと申儀にてハ無之候、上之山之城者出城ニさせられ候て、當分も似合之人衆召移され、ぜん／＼に御普請可被仰付候、左候而清水之事者屋形之地ニさせられ、東福之城を居城ニ取構候てハ、可有如何候之哉、此儀御同心おいてハ、竜伯様へ御談合申、竜伯様御指南ニより、うへの山移之儀、相違之やうニ候て可然候はん哉、又それ迄ニも及はず、貴所爲分別清水へ可被相定候哉、誠右之段々之申事、あまり指出過たる儀共、他之存へ

1661

「本田助之丞藏」

證文

此銀子六拾八匁之事者、財部傳内殿・中馬甚右衛門尉殿・我等三人相中ニ、菊屋宗可老々京ニて小袖買申候代物未進分にて候、然者慶長七匁之年、菊屋次郎三郎殿帖佐江下向ニ而候間、右之銀子返弁仕度候、去ながら兩人上方ニ而被相終候条、同前ニ返弁申儀難成候、我等手前之分御算用被召分、書物給候ハ、返弁可仕之由申候得者、彼書物給候而追付返弁仕、請取状態ニ請取置候、如此相濟申たる儀候条、後日少も入組あるましく候、爲其墨付如件、

慶長七年匁

七月十七日

助丞(花押)

少將殿

まいる

「朱カキ」
「慶長七年」七月十六日

惟新(花押)

1662

「本田氏藏」

證文

此銀子式百四匁之事ハ、曾木五兵衛殿・中馬甚右衛門尉殿・我等三人相中ニ、菊屋宗可老々京ニ而小袖買申候代物未進分ニ而、我等慶長七匁之年、菊屋次郎三郎殿帖佐へ下向候之間、右銀子返弁仕度候、去ながら甚右衛門尉関ヶ原戰場より今ニ無下向之間、同前返濟難成候、我等手前之分算用被召分、書物給候ハ、返弁可仕之由申候得者、彼書物給候間、追付返弁仕、請取状態取置候、如此相濟申たる始末候条、後日少も入組有ましく候、爲其墨付仕置物也、

慶長七年匁

七月十七日

助丞(花押)

本田勝吉殿

まいる

本田勝吉殿

まいる

1663

「安藤氏藏」

加増目録

薩州日置之郡伊集院下神殿村

浮免

高五斛式斗五升

右知行、先年川内江 大閣様御下向之刻、龍伯様被

成御指出候處、於中途御輿被昇候爲褒美被宛行者也、

慶長七年

七月廿二日

鎌田出雲守

政近(花押)

比志嶋紀伊守

國貞(花押)

桃山權左衛門尉

久高(花押)

圖書頭

忠長

安藤左近允殿

「義久公御譜中、在安藤仲左衛門トアリ」

1664

「御文庫四拾八番箱義久公卷中」家久公御譜中ニ在リ」

尚々翌日ニハ必々可罷立候間、少茂御油断有ましく

候、

彼一儀御談合之様子承届候、就夫抱節・喜入大炊助明日

如帖佐差越候、定而無別儀可相濟存候、さてハ上方へ持

參之人、其元にて出合候つれとも、未定之由其聞得候、

早々彼使被仰定候て尤存候、急度可罷登事にて候間、御
油断有ましく候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
慶長七年七月廿二日

龍伯(花押)

少將殿

參

1665

「雜抄御案文」

度々上洛之儀被仰下候、愚老も今一度之上洛念望ニ付、
當春既に其催候處、去年以來之煩、就中此節散々爲躰候、
種々雖養生候任無其驗、俄ニ又八郎上京候、右之仕合故、
上着可爲遅々事、心遣千萬候、然ハ 將軍様名護屋御在
陣已後、別而御懇意之儀、于今聊不致忘却候、向後到又
八郎不相易可被加尊意事、乍憚念願候、勿論忝家事、奉
對 公義永々不可有別心、殊更可遂御礼条々有之事候、
彼是以致上洛雖申入度候、弥氣合無然々候、於當時之躰
者、迎も難叶其意、殘多次第候、誠御厚恩之所相似忘失
歎敷存候、雖此姿候、依遠國難致顯然候、若世上之物沙
汰、作病に被取成候而者、迷惑深重之儀候、八幡大菩薩
愛岩山大權現 天滿天神茂御照覽、此等之旨少も偽不申
候、以此趣無疎意候通御取合所仰候、恐惶謹言、

慶長七年
七月 日

龍伯

山口勘兵衛殿

1666

〔家久公御譜中〕

〔正文在入來院石見重頼〕

敬白起請文之事

一被顯眞志以神文不可有別儀候由、感悦之到候、其方兩

人於無違變者、爲我等惡心之企有之まじき事、

一各於被抽忠節者、別而可令人魂候事、

一若不審之子細可有之時者、可遂糺明候事、

右条々於僞者、

▽^{〔牛王〕}奉始上者梵天帝釈四大天王、下者堅牢地神、惣者日本六

十余州大小權實神祇、別者王城鎮守八幡大菩薩 稻荷

祇園 賀茂 日吉 山王 愛宕山大權現、殊者九州惣社

彦山大權現 薩州崇廟新田八幡大菩薩 同開門正一位

金峯山藏王權現 大汝八幡大菩薩 鹿島崇廟諏方上下大

明神 戸柱 稻荷 春日 若宮 大隅正八幡大菩薩 霧

島六所大權現 天滿大自在天神、各御部類眷屬等之御神

爵可罷蒙者也、仍起請文(伏)赴如件、△

慶長七年壬寅七月晦日 忠恒(花押)

穎娃弥一郎殿

大膳亮殿

1667

〔旧記〕

一貞昌被書記置候内ニ、関ヶ原御退陣已後、龍伯様ハ是

非共御弓戰ニ可及之由、頻ニ被仰候へとも、惟新様中

々御弓戰ニ而者一たまりもたり存ましく候由、達而御

仰付、御國ニ罷成、惣別弓戰ニ成候様ニと諸人申候

処、鹿兒島へ老中比志島紀伊守・鎌田出雲江御文ニ參、

是非共 黃門御差出被成可然由被申、已ニ鹿兒嶋与國

分与弓戰ニ可罷成躰ニ御座候つる事、

一抱節儀者、龍伯様御家老ニ而國分へ被罷居候得共、

惟新様御同意ニ被罷成、龍伯様被違御意候様成行候

得共、御家之續候様ニ被申、本筋を能被存、少も迷

不被申被遂忠節候事、新納右衛門佐入道遊浦・相良日

向守なとへ、高麗以來諸事御談合被承候筋を以、鎌

田出雲・比志島紀伊守なと同意ニ被遂忠節事、

一權現様 龍伯様へ御上り被成候様ニと被仰下候得共、

先爲御使鎌田出雲守被差上候處、權現様被成御對面、

別而忝御誕共ニ而、出雲守罷下候而、其趣被申候処、ぬかれ候而被罷下候由諸人被申、猶又御疑不相果候付、御別儀有ましき由、起證文を御給候様ニと被仰上、税所越前・竹内六府被差上、無異儀權現様御誓詞被成、少も僞無之御家可被相立候、惟新御事ハ於闕ケ原御敵被成候得共、吳儀御座有ましき由、慥成御誓紙御給候間、此上ハ天下之御誓紙を御背候儀御果候間、縱御弓戰ニ而御果候共、跡々迄之御名をくたされへく候間、必御上り可被成由、從此方も御誓紙之御返文被成御差上候事、

一如此之上ニ而も、御上之儀御無用之由、從國分達而被仰、黃門様御上洛御打立ニて、惟新様も御送として國分迄御越處、國分之衆中惣別々、是非共御留り被成候様ニと被申候間、從天下も誓紙を御給り被成、此方も可有御上由誓紙御上候間、御相違候ハ、誓紙之御罰も如何思召候、其上御家御果候而、後代御名までくたされへき儀、道ニあらず候間、各被申儀無御同心由被仰候得者、又被申候ハ、誓紙之罰ハ國分之衆中衆かふり可申候間、是非共御留り候様ニと支て被申候得共、無御同心 黃門様御上り候而、御誓紙之表ことく

少も無別儀相濟候而、御家如此相續之事、

1668

『樺山紹敏日記』

『慶長七年』

一少將様御上洛、八月富隈を御打立也、野尻江御逗留候而同十七日、伊集院源次郎生害、弟小典次者富隈ニ而、其第三郎五郎・千次ハ谷山ニ而、母儀ハ阿多ニ而是も生害也、如斯候而御上洛御仕合者可然候云々、

1669

『日記』

一慶長七年八月朔日、忠恒公首途鹿兒島、北郷加賀守三久・比志島紀伊守國貞・伊勢兵部少輔貞昌・川上源三郎久好・敷根三十郎頼幸・三原諸右衛門尉重種以下扈從、往日州野尻留滞數日、十七日、誅伊集院源次郎於當地、同日殺其母於阿多、斬次弟小傳次於濱市、斬三四第三郎五郎及千次於谷山中村、渠之黨徒盡以戮焉、以有此事消多日於領國、遂自細島到攝州兵庫浦、家康公徵忠恒於大城、欣然上伏見、十二月廿八日、爲正則於先道登伏見城、

1670

『新納旅庵譜中』

慶長七年壬寅八月朔日、少將忠恒主發於虜島、留滯日
 州野尻、誅亂臣伊集院源次郎已下黨類、是以送於多日、
 遂解纜於細島赴京師之路、到于攝州兵庫海上之際、會福
 島左衛門太夫殿下領國安藝矣、實十月十四日也、大夫殿
 欣然曰、吾逢子幸也、當為忠恒主之指南、遂返乘船以共
 到于大坂之際、家康卿還于關東、故、忠恒主寄宿於棚
 部屋又左衛門、告上著旨於關東俟返言也、同月廿五夜、
 旅庵忽罹病痾孔急也、忠恒主聞之、則臨旅宿矣、加療
 養而不幸不得驗氣、翌日廿六與夜半鐘聲俱卒、享年五十、
 法號天譽昌運居士、

〔御文庫拾六番箱十卷中〕「義弘公御譜中ニ在リ」

上卷前書案文

一雖為不新言上、奉對 龍伯樣 惟新樣 少將樣永々無
 二心御奉公可申上候、就中 惟新樣御高恩無忘却候之
 条、敷通之以神名如申上候、向後も亦々可抽忠節覺悟
 候之事、

一奉對 御三殿樣、於企不忠惡逆輩者、縱雖為骨肉同胞、
 曾以同心中間敷候、連々如申上候、勿論右惡心之儀承
 付候者、則可令言上候事、

一度々御暖ニ付而、為御使罷上候、然者於上方計策之案
 ニ入、賄賂一紙半錢も不取申候事、付各より為御音信
 被下候之物者、銘々以書立令言上候之間、不及口能候
 之事、

一上方へ被仰上候御意趣之外、一言も私ニ御為惡敷儀不
 申上事、付從上方被仰下候御意趣者、圖書頭殿・鎌田
 出雲守殿御兩人御同前ニ承候外、一口も私之虚言不申
 上事、

一於上方 御三殿樣御為惡敷儀毛頭も承付候儀を、隱置
 不申候之事、

一去々年御弓箭之砌、内府樣御人衆より被召執、雖及
 迷惑候、拙者身命之侘一言も不申候、惟新樣御出陳
 并伏見以來之御弓箭之成立者、數度有様ニ令披露候事、
 一雖不及申上候、拙者身軀之儀、被聞召掠儀御座候者、
 有様ニ可被仰聞儀偏奉賴候之事、

右偽於申上者、

〔牛王〕
 敬白天罰靈社上卷起請文事

▽謹請散供、再拜々々、夫惟年身慶長七季壬戌、月並者十
 二箇月、日數者三百五十余々日、撰吉日良辰而、致信心
 請白、大施主等謹奉勸請、掛忝上者梵天帝釋四大天王

豹尾 黃幡 歲德 釋迦善逝 釋提桓因 奉宿劫、四天
八天 十二天 二十大天 三十三天 十二神將 七千夜
刃^(文) 二十八部第六天魔王 聖主 天地之卅六禽^(會) 百億須
弥 百億梵天釋帝 百億鐵圍山 百億閻魔法王 諸天
百億天衆 百億天人 百億天女 百億童子 百億大力夜
刃 百億惡鬼 百億天上 百億閻浮提中所顯現之大小神
祇、上者有頂天、下者到金輪在佛神、皆悉敬白言、堅牢
地神 八海所接龍王龍衆 十王十牀俱生神 太山府君
司命司祿 冥官冥衆 有情無情 辰星 南斗 北斗星
日曜星 破軍星 羅喉星 計都星 巨文星 明星 七夕
星 八葉星 本命星 四方四佛 五方五佛 大聖摩利支
尊天 太白神 太歲神 八諸神 十二月將神 天葬神
地葬大神 阿豆知神 天神 地神 海神 木神 火神
金神 水神 風神 諸佛諸菩薩 諸善神 東方降三世明
王 南方軍荼利夜刃明王 西方大威德夜刃明王 北方金
剛夜刃明王 中央不動明王 大黑尊天 毘沙門天王 大
弁財天女 宇賀神 十五童子 三寶荒神 多婆羅天王
武容天神 頗梨榮女^(采) 蛇毒氣神王 八王子 八萬四千六
百五十余神 金剛界七百余尊 胎藏界五百余尊 金剛藏
王 見蛇帝主 大聖金剛童子 普天率土愛染明王 妙見

菩薩 過去現在未來三世諸佛 一萬八千軍神 二萬八千
軍神 三萬八千軍神 四萬八千軍神 五萬八千軍神 六
萬八千軍神 七萬八千軍神 八萬八千軍神 九萬八千軍
神 十萬八千軍神 二千八百師天童子 一萬燈明佛 二
萬燈明佛 三萬燈明佛 藥師如來 寶生如來 無量壽佛
微妙身如來 文殊 普賢 觀音 勢至 十六善神 八万
四千夜刃神、忝日城崇廟天照皇太神宮四十末社 內宮
外宮 風宮 諸末社 八幡大菩薩 春日大明神 王城鎮
守山王廿一社 根本中堂本尊 立塔諸堂諸坊之諸本尊薩
埵 祇園牛頭天王 松尾大明神 平野大明神 吉田 立
田 熱田大明神 大原大明神^(野郎) 稻荷大明神 賀茂上下大
明神 貴布祢大明神 北野天滿天神 三輪大明神 住吉
大明神 三十番神 愛宕四所大權現 熊野三所大權現
十二所權現 九十九所權現 廣田大明神 金峯山權現
吉備宮大明神 對馬天王 羽黑山大權現 葛城大權現
峯々藏王權現 子守勝手大明神 樞宮大明神^(樞) 法花廿八
品 三藏法師 鞍馬毘沙門天 吉祥天女 雨寶童子 閔
東守護神 伊豆箱根兩所權現 三嶋大明神 鹿嶋大明神
富士大權現 白山妙理大權現 立山大菩薩 諏方上下大
明神 出雲大社大明神 多賀大明神 御靈八所大明神、

「義久公御譜中」

殊者氏神、搃者大日本國中六十六箇國大社 二千小社

五百九十二所大小神祇等、地藏菩薩 陀羅尼菩薩 龍樹

菩薩 虚空藏菩薩 栴檀香菩薩 大病神 八万四千鬼神

大恩神 歲破神 天蘇神 大疫神 大歲神 夜氣夜刃神

妙鬼神 六百五十余神 金山六十万鬼神 刀八毘沙門天

王 父天狗太郎房眷屬 九億四万三千四百九十余神 善

貳師童子 八所大明神 善害坊 次郎坊 八万四千眷屬

飯繩大明神 四十四万一千眷屬 大天魔三万三千眷屬

智羅天狗 十二天狗等、日域中山々峯々嶽々所居住之

大天狗 小天狗等、各作群集而正路之旨照鑑給、若偽心

於在之者、立處受白癩黑癩之死病、八万四千毛孔、四十

二之骨節、日々夜々苦病無止、深厚蒙御罰、弓矢冥加永

盡、佛神三寶雖作祈願不可叶、於後世者、墮八寒八熱阿

鼻無間大地獄、到未來永劫不可浮期者也、仍靈社上卷起

請文如件、△ 慶長七季

八月三日

(新納長住) 旅庵(花押)

伊勢平左衛門尉殿

「正文」

乍恐捧愚札候、仍一僧祇補任之儀被仰出候之間、從中取

令進上候、御目出存候、然者爲御祝儀銀子被下候、忝頂

戴仕候、并御錫杖御寄進被成候、爲國寶未代迄可令相續

候、尚存力坊・大泉坊可被申上候、恐惶敬白、

「朱力字」慶長七年八月八日

良盛(花押)

進上

龍伯尊公様

參人々御中尊下

「上包」

進上

龍伯尊公様

參人々御中尊下

三輪先達

良盛

1673 「御文庫」一番箱家久公拾卷中「家久公御譜中ニ在リ」

御書忝令拜受候、仍於峯中大護摩被仰付候、即以吉日良

辰被致執行候、銀子貳貫四百目請取令申候、札卷敷并御

守矢違令進上候、國家安全、御武運長久、御子孫繁昌、

抽丹精懇祈計候、猶般若院可被仰上候、恐惶謹言、

「朱力字」慶長七年八月八日

良盛(花押)

進上

嶋津少將様
參人々御中尊報

「上包」
進上

嶋津少將様
參人々御中尊報

良盛

三輪先達

1674

「御文庫拾六番箱五卷中」「義久公御譜中ニ在リ」

敬白 起請文之事

一 今度御談合之一儀不事濟間、毛頭もらし申ましき事、

一 從肥後表之書狀、無別儀指出申候上者、向後如此成計

策同心不申、可致忠節候事、

一 去年佐土原御侘ニ付而、上方へ使者差上候刻、少も

御三殿御家之御ため、あしき儀を申のほせず候、向後

可爲其分候事、

右之旨於僞申者、

▽^(牛王)奉始上梵天帝釈四大天王、下者堅牢地神冥官冥衆、惣日

本六十餘州大小神祇、別當國鎮守正八幡大菩薩并霧嶋六

所大權現 富隈稻荷大明神、殊薩州擁護新田八幡大菩薩

開門正二位 魔嶋諷方上下大明神 稻荷 戸柱 春日

若宮勸請諸神、取分愛宕大權現 大天狗 小天狗 山々

峯々⁽⁴⁾ 居住給所有天狗 天滿大自在天神御部類眷屬等、
神冥爵身上可罷蒙者也、仍起請如件、△

慶長七年^壬八月九日

山田越前入道殿

右馬頭入道
宗恕(花押)

「宗恕ハ右馬頭忠將ノ子以久ノコトナリ、関ケ原後宗恕佐土原城ニ在
リ、慶長八年ヨリ昵近ト爲リ佐土原ニ居レリ、十五年死ス」

1675

「御文庫拾六番箱十卷中」「義弘公御譜中案文在新納仲左衛門忠雄トア
起請文前書之事

今度 竜伯様、又四郎殿を少將殿ニ被思食替、從京都

御朱印を御申下之由、乍承付不致言上、構疑心申候由被

聞食通之旨、被仰知驚存候、就夫拙者事者、毛頭不承付

候由、重疊申上候処、無吳儀被聞食分、此上者無御別儀

謂共条々被仰聞、誠案堵仕候、於自今以後、如何様之讓

人在之而、如右雖申妨不殘疑心、互御熟談之上を以、御

家御長久之調儀可仕外、不可存疎略候、若此旨於僞申上

者、

「末文神文・姓名ナシ」

「御譜ノ朱カキ」
「慶長六七之間欵」

『在官庫』

〔本文書ハ一六七五号文書ト同文ニシキ省略ス〕

〔以下義弘公御譜中ニ在リ 案文在新納仲左衛門忠雄トアリ〕

起請文前書之事

一今度之謂事、拙者毛頭不存寄通申上候処、無殘所被聞食分、安堵仕候事、

一於自今以後、如何様之讒人在之而雖申妨、無腹藏申上、互無御疑心御熟談之上を以、御家長久之調儀所希候事、
一從京都御變之儀被仰下候間、御家^當之御爲を存、御變可然之由申候キ、曾構私曲非申儀候事、

御神名如常、

慶長七

八月十日

惟新

進上

竜伯尊老様

〔此御書、四拾九番箱三卷中ニ在之、引合置也〕

〔御文庫四拾八番箱^{義久}卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

先日打立之刻、爲可進之、長刀之仕立細工屋へ申付候処、

遅く不及是非候、然者頃出來候間、彼一腰令進入候、猶

期後信之時候、恐く謹言、

〔朱カキ〕
慶長七年八月拾日

竜伯(花押)

又八郎殿

〔御文庫廿二番箱九卷中〕

難申盡候、仍愚拙氣合散く式候て、六月以來之上洛延引候事、誠迷惑之至候、何と様ニ茂致養性、來月者必可罷登覚悟候、少茂私之不用にてハ無之候、爲可申述態飛脚指上候、可然様可預披露肝要候、恐く、

八月十日

右之趣、從 竜伯様度く被仰登候哉、我等ハ餘無音龍過候条、本ノマ、
〔御案文写也〕

『雜旧記』

〔本文書ハ一六八一号文書ト同文ニシキ省略ス〕

〔家久公御譜中〕

〔案文在卷本〕

竜伯様へ御進上之御書草案

今度我等上洛之儀、富限衆中頻雖被相留候、當家之忠節
竜伯様御奉公、深々ニ存候故、不罷留候、重々以 神載
如申上候、奉背 龍伯様、身持を存事にて毛頭無御座候、

此段ハ重而雖不及申上候、昨日誓紙之草案懸御目候刻、

何事も不任 御意罷上候事、忠孝相欠たる由蒙仰、驚存
歎息仕候、惣別我等罷上候儀、從最前無御所好とハ、自
然承得事も候つれ共、遮而者不被仰聞候故、其申わけも
無之候つる、縦被仰聞候共、爲國家之候条、存寄儀者申
上候へて不叶儀候、心中の無誤儀者、任天命置候、以右
之趣、背御意不申旨、可被聞召分事所希候、若其儀於無
御座者、家之忠儀 竜伯様爲御奉公、罷上候事も徒ニ罷
成候、殊我等心中不存別儀とハありながら、於被思召殘
者、天道もいかゞ候間、且身上の祈禱、且爲安堵候、
偏御納得奉仰候、猶口狀ニ申合候間、令省略候、誠惶誠
恐敬白、

〔朱力書上〕
一慶長七年八月十一日

1682 『在官庫』

急度令啓上候、先日平左衛門尉を以申上候儀無別条候哉、
此方之事者其分ニ相究候、然者有方只今よび山にと候て

罷出候、若ぬけ候事も可有之候、爲御心得候、爰元之儀
者可御心易候、巨細者臆而以使可申候、先如此候、恐惶
敬白、

〔カキ入也〕
一慶長七年

八月十六日酉

少將

忠恒(花押)

惟新様

參人々御中

〔此御書、御文庫四拾八番箱中ニ有之〕

〔義弘公御譜中ニ在リ〕

1683 『日記』

一慶長七年八月十七日、伊集院源二郎を御成敗候事、

1684 『愚考』

押川治右衛門則義穆佐邑士なり、慶長七年壬寅、伊集院
源次郎忠貞再び肥後侯加藤清正の威を假て、公に叛か
んとす、事既に露頭し、地頭川田大膳國鏡等 御内意を
奉り、則義及び瀧脇平馬に命し、八月十七日、野尻の大
津内狩倉にて、忠貞が狩より歸るを待伏せ、案内者の誤
にて平田新四郎を鉄炮もて射殺し、躬も其過を謝し、
即劔に伏して死す、年三十三、墓野尻に在り、活山道機

居士といふ、忠貞は平馬射殺したり、ふの部に見ゆ、

1685
『全』

淵脇平馬穆佐士なり、慶長七年壬寅八月、伊集院忠貞再
ひ反状露はれし時、野尻の天津の内狩倉にて、押川則義
と 御内命を奉し、忠貞か狩より回るを待伏せ、鉄炮も
て射殺したり、とき忠貞平田新四郎と馬を乗易へ通れる
を、案内者の誤にて則義は平田を射殺し、人違として自殺
すといへり、

1686
「御文庫四拾八番箱義久卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶くかこしまへ、今日ひつしほとにこゝもとへ御着
にて候、又かの文使小吉よりさきに打立候けな、只
今參候、小吉ハ今朝また夜ノ内ニこゝもとへ參候、
兩人共ニてうさのやうニ罷とをり候、

書札之趣、則令披見候、得其心ヲ候、自是モやかて御左
右可申候、仍包節之事、如其方之可參にて候へ共、たふ
せ之儀無心元候条、先かの方ノやうニ遣候、將又鎌左ヲ
以申候、和甚へ御理肝要之由申候キ、然共今少シ御待候
へく候、維新へ談合ヲいたし、猶自是可申候、有方より

のさきの早打、きよたけのことく罷越候儀へ、まちとく

ハしく承度候、御たつね候て可承候、恐々謹言、
〔朱力キ〕
〔慶長七年カ〕八月十七日酉 龍伯(花押)

1687
「家久公御譜中」

尚々別府事者、今日八ツ時分ニ罷着候、此飛脚者別
府ノ前ニ打立申候哉、漸只今參着申候、爲御心得候、
以平左衛門尉被仰越候一儀、無別条候哉、尤存候、此方
之事も得其意存候、然者有方よび山ニ罷出候哉、無心元
存候、乍去別儀有間敷候間、御吉左右待申計候、恐々謹
言、

〔朱力キ〕
〔慶長七年〕八月十七日酉 惟新(花押)

少將殿
參

1688
「家久公御譜中」

先是慶長五年孟冬、義弘公歸國之後、徵伊集院源次郎
夫婦於頼娃居帖佐也、居次第小傳次於富隈、居三四第三
郎五郎・千次於麿島、居母於阿多、已三箇年之際、企隠

謀巧言令色吐偽事者、旁若無人、然而漸能其知非真實矣、和諧之約不可違變之旨、家康卿裁誓紙賜焉、因茲法印龍伯翁乃決上郡、時逆臣伊集院源次郎黨徒再起諸所、有窺得于佳期、則將凌亂于國中、故措國危決上洛莫如之何、行止未決之際、惟新公與四五老臣俱議曰、忠恒上

京謝于惟新之罪者可乎、我聞此之言曰、有國家之得好事、則假如以父之罪雖我身之有及刑戮、而何有敢痛悔乎、八月朔日、既首途於麿島矣、北郷加賀守三久・比志島紀伊守國貞・伊勢兵部少輔貞昌・川上源三郎久好・敷根三十三郎頼幸・三原諸右衛門尉重種等以下扈從往日州野尻、縣諸

同日斬次弟小傳次於富隈、斬三四弟三郎五郎・千次於谷山中村、從阿多歸麿島之路、殺母於阿多、渠之惡黨皆以滅盡矣、

「正文有之」

伊集院源次郎科之條數

龍伯様江小傳次申上條々

一和久甚兵衛尉殿へからくりを以、京都之実否尋究、御奉公申上度由候事、

一龍伯様へ從 内府様御神文罷下候を、伊井侍從殿・山

口勘兵衛尉殿彼兩人前より被差下候、意趣者、又四郎殿を被成御取立、龍伯様之一筋を被續候するとの神文參候由を、誰人か鹿兒嶋へ言上申候由承付候段被申候、就其從此方念比ニ相尋申候へハ、若々和久殿如被申候覽由、高崎千左衛門申候由被申候事、

一鹿兒嶋御諏方へ御參籠之子細茂、彼又四郎殿之儀を題目ニ被成候時者、鹿兒嶋方も一途可有御才覚之御談合付、七人神文被申、其上加藤殿へ内略被成候由申候事、一龍伯様於御上京者、御打立之翌日、富隈之事へ、從鹿兒嶋可有御存知之由、高崎千左衛門申候由被申候事、一少將様被成御上洛、國替可被成御望由承付候由被申候事、

一富隈御油断にて候、京都などへも何とぞ御才覚可被成儀にて候由申候事、

一平田太郎左衛門尉可被成御成敗由、承候由被申候事、一右之條々物語被申候刻、我々前より申候事ニ、何程之子細を以、ケ様之儀を濃々被聞付候哉と申候へハ、返事ニ、伊勢兵部少輔前々小傳次をからくり付へき由候て、高崎千左衛門尉へ種々懇望被申候付、高崎千左衛門かために白石惣左衛門尉と申者へいとこの事ニ候へ

ハ、彼白石宗左衛門を高崎千左衛門尉前より頼申候付、如此候由被申候、就其彼高崎千左衛門尉へハ、伊勢兵部少輔より知行契約之切紙を給置候由被申候事、

惟新様江源次郎申上條々

一 富隈より 惟新様近日可有御成敗之由候、御油断有間敷候由申候事、

一 源次郎事者、於 御前可致戰死候由被申候、小傳次事も 惟新様へ不存別儀由申候、就其富隈之事を細々申通候事、

一 鹿兒嶋之人數之事ハ不申及、南方之人數も從富隈からくり付被成候事、

一 帖佐之人數も十人程富隈之人數ニ申合候、能く御用心候へと小傳次方より申越候由被申候事、

一 鹿兒嶋・帖佐より富隈へ可有御働候間、源二郎人數可致馳走通被仰付候由、源次郎之内山伏富隈にて申候由、伊地知九介被申たると承候由、源二郎被申候間、爲申開富隈へ參ると被申候へととも、富隈にてハ兎角不申被罷歸候事、

一 富隈より方々御からくり有之上者、帖佐よりも御からくり被成候而、可有御覽候由被申候事、

一 龍伯様より於他國も、御からくり有之由候事、

一 他國より計策之書狀致懇望、到右馬頭殿相届候を即依御披露、逆心之重疊致顯然候事、

一 鹿兒嶋於 諏訪之神前被成誓紙、龍伯様を可有御背との御儀定之由、深々と被申上、於帖佐者 龍伯様以御分別、惟新様御生害之由、節々被申上候事、

一 富隈へ 惟新様御越之前日、今度御申之儀者、皆以可爲御僞候、龍伯様不被成御同心様にと、小傳次申上候之事、

一 先非を改、別而御奉公可申上候由申付而、少將様より御感狀被下候処、龍伯様へ致持參、別事ニ申成候事、

一 靈社之起請數通上置、不致其首尾候事、

一 南郷寛右衛門を以帖佐・富隈之間ニ表裡之事、

一 伊兵部少輔墨付取候て、可致持參候由、龍伯様へ申上、各別之墨付致持參候事、

右之条書者伊集院源次郎・同弟小傳次兄弟共ニ関ケ原弓箭之刻より野心を企、色々御兩殿へ計策之儀申上候、其筋目皆々相違ニより、三年めニ兄弟四人母共ニ御成敗候、當時阿多一所被下居候処、此惡心故、源二

郎日州於野尻御成敗、二男小傳次、富隈、三男三郎五郎・四男千次、於谷山御成敗、母者阿多にて皆々同日、慶長七年八月十七日之事也、

慶長七年八月十七日

1690 「圖書頭忠長譜中」

龍伯尊君欲上都之企首途之際、逆臣伊集院源次郎之黨徒再將起亂於國中、其陰謀既露顯、群疑滿腹欲專上京、則如國中之亂何乎、進退未決之際、惟新君曰、關之原之戰不得已而與暴賊之謀、我今雖欲上京、畏家康卿之憤而所以忌憚也、少將忠恒受讓於龍伯君、則忠恒上京而謝罪可乎、忠恒主聞此言曰、苟有島津氏之救巨難、假令以父之罪害己之身亦無悔、八月上旬、發虜島赴京師之路、於攝州兵庫海上、會福嶋左衛門大夫得官暇赴安藝領國矣、大夫欣欣然曰、逢子幸也、吾當忠恒之爲指南、遂返乘船、以共到大坂之際、家康卿已還御駿府、以故大夫追差使節於途中、告報忠恒上洛之故、家康卿聞件事於途中而還太駕、十二月廿五日、再入伏見城而徵忠恒於大坂、同廿八日、以左衛門大夫爲先導、忠恒詣伏見城、扈從之士雖有數多、悉踞城外、唯忠長・比志嶋紀伊守・伊勢兵部

少輔・敷根三十郎・高崎彌六五人陪從矣、丁忠恒主謁見家康卿之時、懇篤之情不可勝言、且復所昇龍蹄二疋・俊鷹二連、此次忠長亦拜謁、內府者也、熟謂忠長・政近先是不決評議之疑者、當家安泰、豈可到于今日乎、

1691 「北郷忠能譜中」

慶長七年八月、太守忠恒公御上洛、稽留于野尻城、同十七日、誅伊集院源次郎忠眞、忠能參野尻拜謁、

1692 「北郷三久譜中」

慶長七年、少將忠恒公關原沒後、始參候于城州伏見、此時三久在于供奉之列、頃年改加賀、

1693 「北郷久村譜中」

久治家傳曰、慶長七年八月、誅忠眞於野尻、島津右馬頭率多勢擊之、久村在其列、忠眞之家臣防戰甚急、久村擊之、時久村臣戰死者十餘輩也、

1694 「伊集院忠眞譜中」

慶長七年壬寅、太守忠恒主赴京師之路、有留滯日州野

尻、丁此之時、以忠眞之隱謀露顯難宥、八月十七日、所

誅於彼地、

弟
小傳次

依與忠眞隱謀、同日斬隅州濱市也、

全
三郎五郎

依兄之罪、同日斬薩州谷山中村矣、

全
千次

與三郎五郎俱於同所所斬也、

1695
『本田氏藏』

尚々御供申候人衆、何茂辛勞之儀候、弥無油断御奉
公可入精之由、兩人として相心得可申聞候、

出船已後音信不承候条、千万無心元存候処、三原諸右衛
門尉於途中參合、無何事由相聞得、さてく、玆重之至候、
殊去月十二日同十八日兩度之大風ニ、船中無恙上着之儀、
別而祝着存候、無申迄候へ共、涯分御奉公之儀、可被入

精事頼入候、然者鎌田出雲守伏見江被殘居候儀候間、定
各取合候而、質人之始末、調等談合候へんと存候、後便
ニ様子承度存候、仍六右衛門へ申候香^{ツケ}搦^{ツケ}之氣見様之事、
連年望間敷存候へ共、我等上洛之儀ハ停止候間、六右衛

門尉へ被教候而可給由、書狀を以金藏坊へ申渡候、於納
得者涯分精ニ入可有相傳候、就中氣之色之見様念ヲ入可
被尋候、左様ニ候ハ、爰元にて我等相傳可申と存候、

猶期來音候、恐々謹言、

〔慶長七カ〕

八月廿四日

本田六右衛門尉殿

友慶

惟新御判

1696
『雜抄』

猶々乍輕微御酒肴進入申候、聊表音信計候、次ニ源

二郎内之者邪答院當所ニ罷居者、自是抱置申候、然

者此比者弓筋ニ付、人少ニ罷成、百姓之成上又ハ浮

世過之ことそしたる者共召出候へ共、當分者更以可

立御用やう無之候、旁彼者共他方へ行散候ハぬやう

にと存、誓紙をさせ抱置申候、爲御心得候、將又其

元之様子示給へく候、

態令啓候、

一一昨日助允罷歸、其元之御左右細々承、満足仕候、當

分ハ取分田舎之滞留不樂御座候へんと、自是察存計候、

無指儀候へ共、爲御見廻用使札候、

一 貴所上洛之儀付而、種々取沙汰在之事ニ候、諸人之分

別と我々之覚悟者裏表ニ罷成候、大事之儀に而候間、

餘無心元存、友賢ニ筮を取せ候へは、鼎之卦ニ當申候、

臣下申儀ニ被付無上洛候へ、失義失信刑罰重と辭

ニ御座候、然時者上洛於延引者、可惡占と友賢者判申

候、貴所爲心持占之書付進入申候、不可有他言候、乍

去權權左・比紀州・伊兵部此人衆へハ被仰聞尤候、

一 源二郎咎之條書ニ、右馬頭殿ニ口上にて被申候儀、条

數之可爲眼と存候、川上六郎兵衛尉口を被聞、條數之

第一ニ可被書事肝要ニ存候、

一 從拙齋之書狀披見申候、最前之説ニ餘相違仕候、每物

ニ聞手ニより申候欤、扱々驚存計候、

一 出水表も堺目一段無事ニ在之由、六右衛門尉所々昨日

申越候、可御心安候、猶追々可申承候、恐々謹言、

八月二十九日 惟新(花押)

少將殿

參

「家久公御譜中ニ在リ」

「此書、御文庫四十八番箱中ニ有之、引合候へハ末ノ二ヶ条舊唐候間、

書加置也、外替事無之候」

1697 一 龍伯様 惟新様 中納言様御間から大かたに御成なさ

れ、召仕の侍なども三方入組のよふに成立、世上段々

念遣わしく風聞も有之、如何と存候処に、ある日 中

納言様前の瀨より御船にめされ、何方ニ御出とも御意

なく、加治木にむけて御舟をこかれ候、御供之面々、

是はとふそとおもわれぬる所に、帖佐の方々御船と見

へて、一艘中納言様御船にさしむきてこきかけける、

御供之衆も一大事只今そとて、こふしを握居候に、此

御船に 惟新様被召候而被成御座候而、 中納言様御

船とつれたら參る事候、御供之衆相互にねらミ居候に、

程なく瀨之市ニ御船着いたし候、國府新川ニむけて御

出被成候に、新川には 龍伯公より関をすへをかれ、

往來別而稠敷被仰置候付、 惟新公 中納言様御通可

被成与被仰候へ共、 龍伯様より被仰付置候趣も御座

候間、御通申儀者不罷成候与申て、関をひらき不申候、

此時すてに相互に必死に相見へ、刀の柄に手をかけ候

に、 惟新公 中納言様、いや／＼其方共か大かたニ

者なすまし、 龍伯公ニ者此方共が委細に可仰上候間、

ひらに／＼に関をひらけと御意によつて、関をひらき

御通にて候、左候而、とミのくまに御二人なから御出

被成候、御供之衆何たる事や出来候ぬとおもひ、御供
之面とすはに血のうきたる人は一人もなく候、もの申
人、ましてや□、しはらくありて御書院に、所々高砂
の尾上の松もとしふりてと、御三人様の御聲ニ而御諷
聞へければ、御供の衆は、此時すはにもかほにも血う
きたり、目出度かほ相見へ候、 惟新公 中納言様御
同道ニ而御歸被遊候而、ほとなく押川強兵衛・中村氏
に被仰付、鉄炮にて平田太郎左衛門を討候、御中あし
く成立候事、太郎左衛門しかたと申事候、碓山氏被申
候、

「右、山田四郎左衛門聞書」

(本文ハ全文朱書ナリ)